なものでございますから、心の中でこりやア到底敵はない、打合へば乃公が負けると定つて居ると思ひましたから、俄に腸腹を抱え澁面を作りながら七『アッ痛々アッ……痛い』とさも苦しさうに唸り出したは、笑止のことでございます、源『先生何う遊ばしました』七『俄かに拙者は持病の癪が發つて、アッ痛い……ア、何うもこれでは到底立合は出來ない、病氣全快次第當方から通知をいたし、更に立合をするであらう、アッ痛々々』源『左樣でございますれば、何うも致方なき事、御病氣全快次第御通知を願ひましよう』と口ではいへど心の中、アーア生命冥加のある奴だ、假令木刀でも打殺すは容易いこと、餘り此方の勢ひが劇しかつたから、先方に覺られしかマア〳〵今更云つて返らぬ事、暫時汝の命を汝に委して置くが、遲かれ早かれ打殺すから左樣に心得いと、聲を出さねど腹の中で云ひ棄てまして早川、秋山城戸の三人の繩目を解いて源『サアお三方、參りませう』と三人の者を連れまして、太田七郎左衞門の屋敷を引揚げまして、各々我家へと歸つて參りました、さて三人は源助から相當の療治を致たされましたが、何しろ腹内から起つたのでなく、外部から受けた疵でございますし、殊に血氣の壯者でございますから、皆々僅かのうちに以前の身體と相成りました、三人は大きに悅びまして、これといふも皆な松本先生のお蔭であると、まず〳〵源助の平次を主人とも師匠とも思ひ尊敬いたして居ります、ところが此所に一の騷動が出來ましたといふ

のは、諸侯同士が交際をいたします、例へば土用見舞とか或は寒氣見舞と申しまして、仙臺公から會津公へ對してお見舞物を送られました、すると會津公から仙臺へ何卒此度はお望みが願ひたい、到底大したことは出來ませぬが、お望を下さいといふ御書狀が參りました、そこで仙臺公から會津は馬が名物であるから、馬を一頭申受けたいといふ御返書でございます、ところが表面は程好く交際つて居られますが、内心は兩太守ともナアに會津が、イヤ仙臺がといふ風に思し召してお居でになりますといふ有樣でございますから、仙臺公から馬を所望したこそ幸ひ、一ッ恥を搔かして笑つて遣らうといふ御心から、會津家で持餘して居る一頭の名馬がございます、名を鬼鹿毛と申しますが、何うしてこの鬼鹿毛は何樣な名人の馬術家でも騎ることが出來ないといふ暴馬でございます、その鬼鹿毛を仙臺へ送つて、一ッ乘馴して見せて呉れと申し込み、困るところを笑つて遣らうといふ思召しから、いよ〳〵この鬼鹿毛を十六人の騎者が附き添まして仙臺へ出て參り、陸奥守へお目通りをいたし○『エエ甚だ恐れ入ることでございまするが、私共の主人が申されましたには、仙臺家には數多馬術の御名人があるから、後學のためにこの鬼鹿毛を乘馴して戴き、拜見をいたして立歸れいといふことでございます何卒恐れ入りまするが、一乘りお責め下されたう存じまする』と申上げました、すると この伊達陸奥守といふお方は、至つて御活潑のお氣性でございますか

ら、この言葉をお聞きに相成り心中憤々といたされ、ハ、アさては會津に於いて持餘して居る荒馬を送り、予が家臣に騎者のない所を見て、笑つて遣らうといふ精神だナと、思召になりました故太守『ム、如何にも承知をいたした、明日馬場において騎者に乘馴して見せるであらう』○『ハ、ア有難き仕合に存じまする』と一先づ休息所へ退きました、サア此方は陸奥守どの重役をお招ぎに相成りまして、種々と御相談の上馬術の師範家たる伊達隼人、仙石内記布施藤十郎の三名へ、明日馬場において今回會津家より送られたる鬼鹿毛を乘馴せいといふお觸が出まして、いよ〳〵明日は馬乘といふことに相成りました、サアこのことを聞ました早川、秋山、城戸の三人でございます、早速松本源助の平次先生の宅へ出て來ました 團『先生今日は・・・』源『マアお三方お揃ひで何御用でござる』と席を進めて聞いた。

（第拾參席）

仙臺の馬術者荒馬に惱まされる事、幷に平次御前に於て駒木根流馬術の奥妙を現はす事

團平外二名の者は席へ着きまして 團『さて先生、明日はお馬場前で馬乘でございます・・・』源『さあ爾ういふことだと聞いて居る』團『貴方御覽になりましたか、今度の鬼鹿毛を・・・』源『ム、拜見いたした』團『何うも大した馬でございまするナ』源『サア、餘程立派なものだ、

先づ馬の中でも化物といつても宜い』團『如何にも左樣でございます』源『併し明日誰々が乘りますかナ』團『その三幅對でございます』源『ウーム・・・して三福對とは誰のことか』團『夫れは先づ布施藤十郎先生でございます』源『ハハア無益だなア』團『ヘエー無益だつて、何ういふ理由でございます』源『彼人は無益だ、到底布施藤十郎では乘ることは出來ない』團『ヘエー夫れでは伊達隼人先生は、何うでございます』源『ム、夫れも無益だ、馬から落て隼人ともいへまい』團『先生、御戯談を仰しやつちや不可ませぬ、夫れでは仙石内記先生は如何でございませう』源『ウーム夫れも無益だ、氣の毒だが落馬だ』團『ヘエー併し今度は會津から、仙臺家には鬼鹿毛に來る者はなからうといふので、一つ恥かしめて遣らうと來て居るので、太守においても大層力味でお居でになる相でございますから、萬一乘損ねたら大變になりまして、他藩の笑ひを招ぐ譯で、これはなか〳〵戯談をいつて居る時ぢやあござりませぬ』源『だつて何うも仕方がないではないか、しかし仙臺は狹いやうでも廣いものだ、三人の方々が乘ることが出來ないでも、また他に騎手があるから心配することはござらぬ』團『ヘエーぢやアお三方より他に、上手な騎手がございますか』源『ありますとも』團『ヘエー左樣でございますか、矢張り御家中でございますか』源『イヤ足輕だ』團『エーッ・・・また先生貴方と仰しやるのでございませう』源『如何にも左樣ぢや、あの鬼鹿毛に乘る者は、拙者より他には一人もござらぬ』

團『御戯談を仰しやいますな、貴方は何でも御自慢ばかり仰しやいます』源『自慢をするといつても、現在實力があるから仕方がない』團『眞個でござりますか』源『眞個か嘘か明日は拙者が屹度立身出世をするに定つてをる、爾うすれば各々方も士分に御推擧申すからお悦びなさい』と云はれて三人のものは、大層喜び勇んで、夜の明るを待兼て居ります、いよ〳〵翌日と相成りまするとと、早朝から諸役人が人夫を指揮いたし馬場の準備に取掛ります、チャンと棧敷が出來まして、周圍には竹に雀の幔幕、眼も屆かぬ許りに引廻してございます、勿論幔幕の中には、お目見得以上でなければ這入つて見物する事は出來ませぬ、お目見得以下は幕外で見物するので、人見といふのが開けてございます、軈て時刻と相成りまするとと、正面棧敷には太守伊達陸奥守どのお着座に相成り、左右には片倉小十郎、伊達彈正其他重役の面々綺羅星のごとく嚴然とお控へになつて居ります、右の方には馬見所、これは乘馬する所、左の方には會津公のお使者十六人、其他接伴の掛役がお控へになつて居ります、彼の斑鳩平次の松本源助は、今日こそ一ッ馬術を太守へ御覽に入れ、立身出世をいたし、七郎左衞門と同位地を踏み、しかる上快よく伯父の仇討をしやうと心窃かに悦び勇んで幕外から例の早川團平、秋山良助、城戸武助の三人と共に見物をいたして居ります、暫時經ちまするとと騎者三幅對と呼ばれたる布施藤十郎、伊達隼人、仙石内記の三人が馬乘袴に腹帶確と結び、朱房の

着いたる鞭を携へ、後鉢巻をいたし、太守の御前へ平伏に及びました、此方は今回會津公から送られましたる鬼鹿毛を曳いて出ますると、サア會津の使者は互に口でこそ申しませぬが眼と眼を見合はし今に落馬するは必定のこと、一ッ笑つて遣らうと心持に待つて居ります、陸奥守殿は御聲爽かに太守『三人のもの大儀であるぞ』三人『ハ、ッ……』太守『今日は會津公よりの所望、彼の鬼鹿毛を乘馴せて見よ』と仰せが下りました、三人は唯々として馬見所へ退り、先づ初めに布施藤十郎が心得たりと云ひながら立上り、鞭を執つて鞍壺に手を掛けまして、太守へ頭を低げ、御挨拶をいたしてヒラリガッキと許り乘りました、馬の口には左右より馬丁が轡を執つて馬丁『ハイ〳〵〳〵』と中央へ出ましたが、初は地乘りといふのでガバガバ〳〵』と徐かに歩ませて居りましたが、軈て一廻り致しますると藤『馬丁口を放せ』兩人『ハ、ア』といひながら左右へハッと別れまする、此方は藤十郎精神を籠めて、手綱を繰り此邊と思つた處で藤『ハイヨー』と聲を掛るなり一鞭當てまするとと、鬼鹿毛においては鬢を振立て、ヒンと嘶くかと見えましたが、ガバ〳〵〳〵と駈出しました、サア大變、何しろ人を落すことの巧な馬でございますから、制めても止まらぬ破竹の勢ひ、藤十郎も一生懸命手綱を引き、額に流る、汗は衣を濕す有樣で藤『ドウ〳〵〳〵』と必死に行つて居りしが、到頭鞍に居堪らずしてその場へドターリ落馬致しました、陸奥守殿は落ちた布施藤十郎には

眼を着けられず、突然會津の使者等へお目をお着になりまする、十六人の使者は聲を發てねど互に顔を見合せてクス〳〵嘲笑ふて居りますから、陸奥守は顔色を變へ、眼を釣上げ太守『ヤア誰ぞある、速かに乘代つて見よ』と云ふお聲掛り、ハッと答へて出ましたのは仙石内記でございます、早速鬼鹿毛を馬見所へ曳いて參り、飜然飛來りましたがこれも亦た相變らず落馬を致しましたから、サア會津の使者は尙更クスクス笑ひ出しました陸奥守殿は、いよ〳〵御立腹を遊ばされ太守『ウム俯甲斐なき有樣かナ、誰ぞ早く來れい』いとふ仰せに今回は伊達隼人が出まして、鬼鹿毛へ乘りましたが、これも同じく落馬致しましたから、最う仙臺公の家中で出て乘る者がございませぬ、陸奥守殿は中腰にならせられ、顔色を朱の如くギリ〳〵と齒を嚙鳴らし太守『ヤア役にも立たぬ儕輩かナ、誰ぞあつて乘馴す者はあらざるか』とお呼びになりまするが、少し心得のある者とても、何しろ馬乘三幅對といふ三人が落馬いたしたのでございますから、萬一出て不覺を取れば、却つて物笑ひの種と思ひまして、誰あつて出る者がございませぬ太守『ウム俯甲斐なき家中の侍、出て乘る者はないか……假令陪臣の者でも苦しうない、陸奥守のために乘馴せい』と仰しやつて、頻りに氣を焦つてお居でになりまする、此方は會津の使者十六人が、袖ひき眼を見合はし、いよ〳〵嘲笑つて居ります、ところへ一人の侍、バタ〳〵〳〵と現はれ、太守の御前へ平伏に及びました、此人ぞ誰であるかと

申しますると、片倉小十郎の家來野口金太隼方でございます、前にお伺ひした斑鳩平次と義兄弟になりました仲間の金助でございまして、陸奥守殿直參の家來でございませぬから差控へて居りましたが、陪臣の者でも苦しうないといふ御意が下りましたので、此處へ飛出したのでございます、陸奥守殿は御覽になりまして太守『誰れぢや汝は……』金『恐れながら、片倉小十郎の臣野口金太隼方と申す者でございます』太守『ウ汝は馬術を心得居るや』金太『ハ、アイ聊か辨まへて居りますれば、何卒彼の鬼鹿毛へ乘馬御免下だし置かれませうなれば、有難い仕合に存じまする』太守『ム、如何にも心得あると申せば苦しうない、乘馴して見ヨ』金太『ハハア……御免』と云ふなり馬見所へ徐々と出て參り、飜然乘馬致しましたが、さて平次の源助ハ、三人が落馬いたしたるを見て心の中で時節到來、今に乃公が出て吃驚さして遣ると、思つて居りました所へ、バタバタと出て來まして、鬼鹿毛に乘つた侍を見ると、何ぞ圖らん自分の義兄弟たる野口金太隼方でございますから、大層失望を致しまして早川團平に向ひ源『オイ早川々々』團『何でございます』源『何うも困つた奴が出て來た』團『ヘエー何が困つた奴でございます』源『何がつて何うも馬鹿々々しい譯、眞個に此樣な詰らないことがあるものぢやアない』團『一向私には分りませぬが、何が馬鹿々々しうございます』源『能く考へて見なさい、ソレ今馬に乘つた奴は彼人ア拙者の舍弟ぢや』團『ヘエー先生の御兄弟でございますか』

源『爾うちや拙者の舍弟ぢや、彼奴は馬術は心得があるから、巧く乘馴すだらう』團『夫れなら尙更結構ではござりませぬか、先生の仰しやつた通り、三幅對のお方々は落馬なされ、會津の使者はクス〳〵笑ふ、お殿樣は御立腹、眞個に家中一統心配して居るところへ、乘馴すお人が見えましたからお芽出度いことでごはありませぬか』源『一寸も芽出度いことはない、彼者さへ出なかつたら、殿樣が陪臣でも苦しうないから出いと仰しやる、サア出る者がないによつて、足輕でも宜しと仰しやる、爾うなつたら乃公が出て、馬術の妙を現はして立身出世をすることが出來るのに、彼人が出たら最う無益だ、エッ何うも忌々しいことだ、何うか野口の野郎落馬して呉れゝば宜い』と平次の源助先生が思つて居ると早川、秋山、城戸の三人も、同じく先生が出世が出來ると思ひましたから、これも亦た心中に落馬を祈つて居ります、彼方は野口金太隼方でございますが、例の鬼鹿毛に乘りまするとも、同く馬丁が左右の轡を取つて、引出そうと致しまするから金太『アヽ、コリヤ〳〵馬丁、轡を取るには及ばぬ、最う宜いから彼力で見物いたせ』と馬丁を謝絶つて金太『ハイ〳〵〳〵』と馬を地乘にいたして居りましたが、馬がいふ通り・・・思ふ通りに動いて居ります、何うも上手と下手とはこれ程も違ふものでございませうか、太守は漸つと御安心の體で眼を放たず、一心に御覽になつて居ります、金太隼方は二三回地乘をいたし、更に太守の御面前へ來まして、馬の四足を揃へさせ

丁寧にお辭儀をいたしまして馬の首を變へて金太『ハイ』と呼んだかと思ふと乘工合と腰の据ゑ樣、手綱の操り樣で、金太隼方のハイ〳〵といふ聲と共に右足を擧げ、左足を擧げ、カツパ〳〵と足並揃へて前足と後足とが入れ違ひに徐々と出て參ります、陸奥守殿はこの體を見て心中にお悅び遊ばされ『ア、これが眞の名人であるわい』と思召し、これでもかといはぬ許り、會津の使者の方を御覽になりまするとと、使者十六人の者もアッと感心いたしましたが○『何とまだ若いが、能く彼れほど馬術を究めたものでござるのう』△『ム、如何にも名人でござる』○『何うも感心いたした』と囁やきながらも小首を傾げて居る、陸奥守も大層なお悅び、持つてお居でになつた金緣の扇面をお開きに相成り、それを高く差擧げて太守『野口金太とやら妙々・・・ヤア〳〵皆のもの賞めて遣はせ』といふお聲が掛りまするとと、列座一同のものは口々に、皆々野口殿天晴れなる技倆、感心いたしましたぞと、大聲に呼立てます、此方は野口金太隼方が今や鐙を蹴付けまして金太『ハーイ』と聲を掛けまするとと、馬は一目散にカパ〳〵駈け出しましたその疾きことは電光石火もかくやと思ふ許り、彼方此方と駈廻るかと思ふと、飜然地上へ飛び降りては、また飛び乘るその妙術、馬が金太か、金太が馬か分らないくらゐ、暫時いたしまするとまた此方へ歸つて參ります、陸奥守殿は夢現のごとく、唯だ妙妙と許り仰しやつてお居でになりまする、金太隼方も內心得意になりまして、ます〳〵乘馬

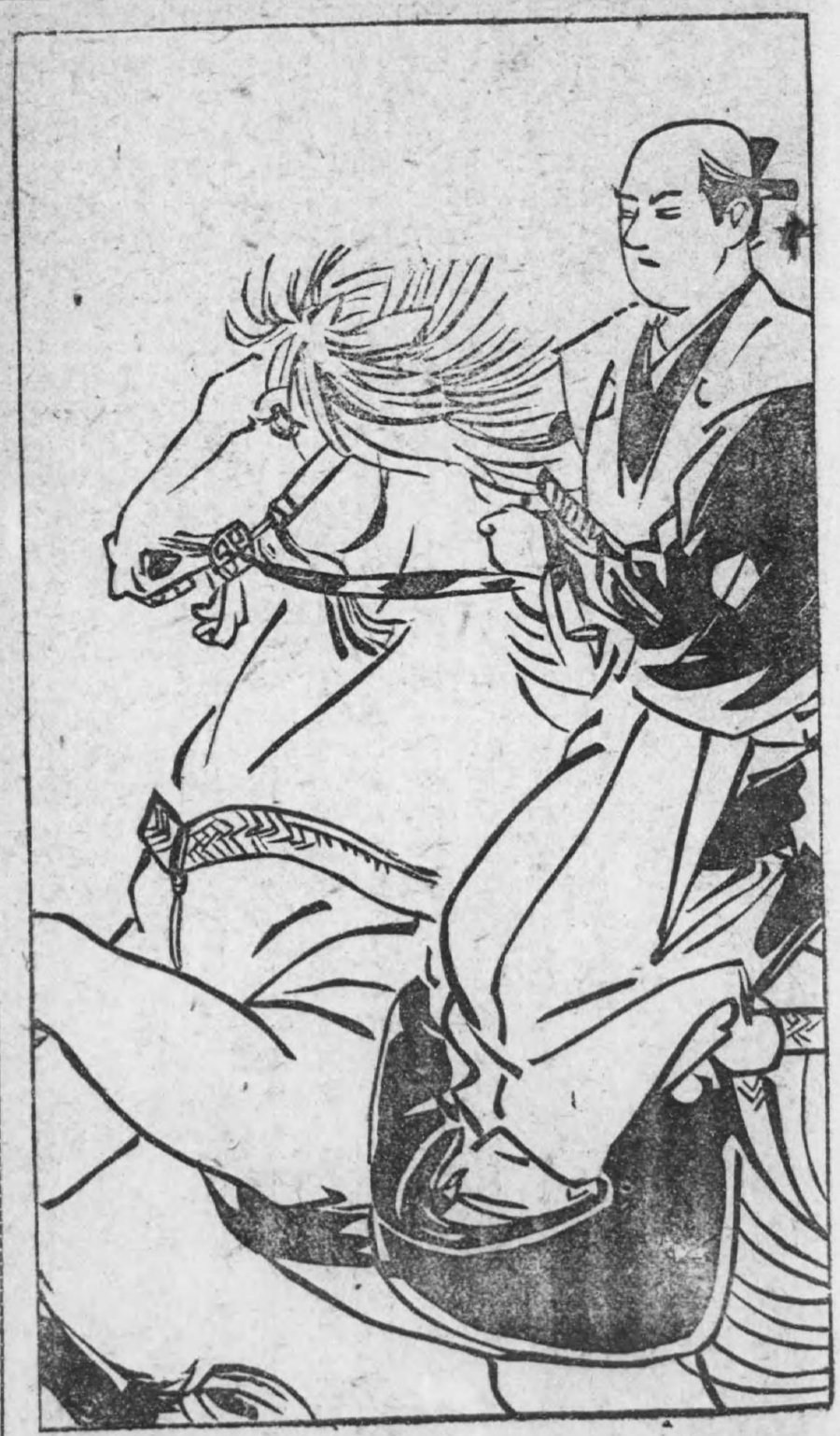
して居りましたが、此方は平次の源助先生及び三人でございます、何うか落馬して呉れれば宜いと、一心に四人が思ひ詰めて居りますると妙なもので、人の一心透つたか、何う云ふ機會か知りませぬが、今まで意氣揚々と自由自在に乘廻して居つた金太隼方が、アッといひながら地上へ落馬をいたしました、馬は體裁を見よといはぬ許り、向方へ駈出しまする、この體に馬丁が出て來まして、馬を止めようといたしまするが、何しろ今まで責めて責め極つたところで、何うしても人を近着けませぬから、只だアレヨ〳〵といふ許り、會津の使者十六人もクス〳〵笑つて居りまする、此方は陸奥守を始め一統の方々が、アッと計りに驚いて居られまする、處へ平次の源助先生は、時節到來せりと嫣然と笑み 源『御免』と聲高く呼はつて、バタ〳〵ッと幕内へ飛込みまして、勢ひ猛り駈來る鬼鹿毛の前に兩手を擴げて突立ちますると、この馬といふものは大きい割合に臆病な奴でございまして、面前へ人がたちまする と、向方へは進み兼ねます、そこで平次の源助が面前へ突立つて兩手を擴げましたので、鬼鹿毛も少し躊躇ひまする、その虚に乘じて馬へ近寄つた源助、突然轡をとつて馬の首を叩いて居ります、馬は首を叩かれて心地が好いか、その儘止つてしまひましたから、源助は太守の方へ向つて頭を垂れ、兩手をついて控へて居りまするとと、例の野口金太隼方でございます、御承知の通り侍が他人に殺されても、自分の刀の鯉口さへ、少しでも拔き掛けて居りました

ら申譯の立つもので、家名斷絶にもなりませぬ、また騎馬でも例令落馬致しましても、手綱さへ放さなかつたら失策にはならぬさうで、流石は野口金太隼方とまでいはるゝ名人、落馬致しましても手綱は放しませぬから、馬に曳かれてズルズルと此處まで參りましたが、平次の源助が止めて呉れましたので、ホッと安心いたして漸う〳〵這ひ起きました 金『誠に何うも有難い』と偶爾と眺めまするとと 這は如何に、自分の義兄たる斑鳩平次でございますから、アッと計りに打驚き 金太『ヤア貴殿はといはうとするを源『アヽイヤ〳〵、恐れながら私は松本源助と云ふ足輕で、遇ふは今日只今が初めでござ

います、何うか將來はお見知り置かれまして、宜しくお引立の程を願ひまする』と、餘所々々しく致しますから、金太隼方も合點は參りませぬが、これまた何か事情があるだらうと思ひまして金太『ヤアなかなか其方は馬術には心得のある奴ぢや、只今馬を止めたところ抔は、金太隼方感心いたしたぞ』と大音に呼はつて、さて小聲で金太『しかし兄上ぢやアござりませぬか、何うもお久しうござります、何故あつて斯樣な處で、かくのお姿になつてお居でになります』と最も不審の體に平次は大音に 源『何う仕つりまして、なか〳〵馬術の心得なぞ少しもござりませぬが、餘り馬が飛廻りまするから、思はず知らず失禮を仕つりました』といつて置いて今度は微聲になり 源『ヤア何うも久しいなア、實は少々これには事情があるのだ、何れ後日お話をいたそうが、何うか拙者を出世さして呉れ』と賴み込みましたので、金太隼方も、合點をいたし金太『イヤ天晴である、兄上御心配は要りませぬ、私が都合好く致しますから……』と塵打拂つて立上り、最とも赤面の體で鬼鹿毛を曳きまして、陸奥守の御前へ平伏いたしました、金『ハ、ッ見苦しき所を御覽に供し何共恐れ入りまする』と申上げまするとも太『イヤ〳〵その心配には及ばぬ、なか〳〵名人である、予は感心をいたしたぞ』金太『ハ、ッ恐れ入りまする』太守『予は汝程の名人を今日まで存じ居らなんだ、其方は馬術に於て日本一であらう』金太『恐れながら、中々私共は馬術に掛けたらまだいろはのいの字でござります

太守『ウム、其方ぐらゐでは、まだいろはのいの字〳〵らゐのものか』金太『御意にござります』太守『しからば其方より上手なものがあるか』金太『恐れながら他の御家來衆は卒ざ知らず、お足輕の松本源助といふ者、此人こそ眞の日本一かのやうに心得ます、虚か實かは一度鬼鹿毛を責めさせ、御一覽あらせられますれば直ちに御分りに相成る事かと存じまする』と申上げました、すると陸奥守殿は太守『ウーム爾うか、然らば苦しうない……その松本源助とやらを此處へ招げ』金太『ハ、ッ』と應へて此方に向ひ金太『ヤア〳〵松本源助殿、太守の御意でありますぞ、此處へお進みなさい』と大音に呼はりましたが茲に彼の太田七郎右衞門でございます、過日松本源助のために失敗を取りましたから、このことを虚實相交へて、伯父の家老職伊達彈正へ物語を致しました、それで彈正においても平次の源助を憎んで居りまする、機會があつたら酷い目に遇はせて遣らうと思つて居る處へ、いま野口金太隼方から馬術の名人は松本源助といふ者であると申上げたるために、太守よりお招ぎのお聲が出ましたについてこれへ出してはならぬと彈正『ア、イヤ君公には、暫らくお止りを願ひまする』と突然いひ出したから太守『彈正何故あつて制止るのぢや』彈正『恐れながら、君命にはござりますれど、今日は家中計りでなく、會津公のお使者も見えて居る處へ、如何に馬術とは申しながら、足輕ごときに鬼鹿毛を責めさしては、使者御歸國の上、士分には鬼鹿毛に乘る者なく、遂に足輕ま

で乗らしたとあつては家中一般の面目を失ふ而已ならず、君命の御威勢にも關はるかと存じます、この儀は平にお止まりを願ひたう存じまする』と申上ぐると陸奥守は、ニツコリとお笑ひ遊ばして太守『彈正汝の心得と予の思ひとは、天地雲泥の相違ぢやの・・・』彈正『ハ、ッ』太守『足輕に鬼鹿毛を責めさすときは、仙臺は狹いやうでも廣いもの、足輕ごときに斯く馬術の名人があるといへば、獨り予の面目而已ならず家中一般の譽にも相成る譯、下らぬ事を申すより差控へて居れい』と一言の下に斥けられて、伊達彈正は赤面の體で默してしまひました、此方は平次の源助先生、天へも昇る喜びで、徐々と出て參り頭を大地に着け、平伏に及んで居りますると、御覽になつた陸奥守殿太守『予は陸奥守である、苦しうない汝彼の鬼鹿毛を責めて見ヨ』源助『ハッ、有難き君公の仰せ、恐れ入りまする』太守『何も遠慮するに及ばぬ併し足輕といふ地位では、何彼に就いて遠慮いたすであらう、今日馬術を現はす間は、三百石の格式を許し遣はす・・・ソレ儕輩彼れに衣服を與らせよ』と鶴の一聲、近習においては早速に衣服上下を持つて參り、松本源助の前へ差置きまする太守『松本源助とやら衣服を更ためて宜からう』源助『ハ、ッ』とは申上げましたが、太守の慈仁あるお言葉に胸も塞がるほどの感をいたして、早速此方へ退つて衣服を更めました、何しろ加藤十勇士の一人斑鳩平兵衛の御養育、布施藤十郎の一子でございますから、何うも見違へる程の立派な姿、十萬石の若殿と



申しても恥かしからぬ威儀がございます、一統の者も吃驚いたし、眼を見張つて只だ呆氣に奪られて居るといふ有様でございます、源助は飄然馬に乗りまして徐々と歩ませ、太守の御面前へ馬を止めて、馬乗ながら獣禮をいたしてチャンと控へて居ります、何故馬を止めて居るかと申しますると、これが駒木根流馬術の玄妙でございまして、馬は四足を一處に寄せ、チャンと立つて居りますので、これを眺めた會津の使者並に野口金太隼方は、アーア上手の上にも上手があるものだわいと感心し、目も放たず眺めて居りまする、源助に於いてはエイと一聲掛けたかと思ふと、前足だけを上へ擧げ斜に突立ちましたから、太守は勿論一統の者が思はず、ヤンヤと聲を揚げましたが、此方は平次の源助、なアにこれぐらゐのことで感心しては不可ない、まだ〳〵これからだと口ではいひませぬが、腹の中で笑つて居りまする、今度またもやエイと聲を掛けますると、チャンと四足を以前の通りに揃えました、何うも只だ腰の工合で馬が自在に動いて居りまするは、實にや馬術の達人でございます、金太隼方は金太『ア、何うも感心だ、矢張り兄貴は兄貴だけの實力があるわい』と會津の使者の方を向いて彼れを見よといはぬ許り、おのれも大層悦んで居りまする、源助においては黙て一聲ハーヨーと聲を掛け、一鞭當てたと思ふと、馬は勇みに勇んで駈出しましたが馬は名馬、騎手は名人と來て居りますから、何うも立派なもので、平次の源助先生の身體が馬上にあるかと思

へば、腹下に居るやうに見え、左と思へば右に現はれ、此方から眺めますると只だ馬許りが走つて居る、所謂鞍上に人なく、鞍下に馬無しといふ有様でございます、すると野口金太が金太『エー太守、申上げます、彼れを御覽遊ばしまするやう、只今の松本源助乘馴す、足の足へお目をお着けて下さいませ、彼れこそ誠に御大將などには、大必要なる馬術でございまする』と申上げました、太守『ム、成程、何うも名人ぢやのう、松本源助とやら天晴れなるぞ』と大音に お賞詞がございます、此方は源助先生暫くすると、駒の脊にあるかと思ふうちに、源助の姿が見えなくなりましたから、サア陸奥守殿は不審に思召され、アット御感嘆になつて居るとまたもや、源助先生の姿が現はれましたが、何しろ名馬の鬼鹿毛でございますから、その走ること〳〵いつたら何うも早いもので、クル〳〵〳〵と馬場を廻つて居りまするうちに、馬上へヌックと立上り或は飛下り、千變萬化の祕術を現はして居ります、陸奥守殿は御感心の體でございましたが太守『ヤア僕輩馬を止させい……馬を止めさせい』とお聲が掛りまする と、一人の侍が大音聲 ○『ヤア松本源助、太守の仰せでござる、馬を、止めなさい』と呼はりまする と、源助先生はさしも電かと思ふ計りに走つて居りまする鬼鹿毛をハタと止めまして、徐々と太守の御前へ參りました、ハット鬼鹿毛から飛び降りるが早いか、地上へ平伏に及びまする と太守『如何に松本源助とやら、其方の馬術感するに餘りあり、只今脊にあるかと

思へば、其方の姿が見えなくなつたが、彼れは何といふ法であるか』とお尋になりました源『ハ、ッ恐れながら、これは獨り馬術ばかりではございませぬ、火術の手でございまして、卽ち鐵砲矢玉を避けまする法で、これを敵隱と申しまする』太守『ウーム……成程……してその術が實地に見ることが出來るか』源助『恐れながら御所望ございますれば、一挺の鐵砲に三個の彈丸、夫れから八分の的をおなほし下し置かれますれば、御尊覽に供しまする』太守『ムム左樣か、しからば一つ見るであらう』とこれから八分の的を三個建てまして、一挺の鐵砲を持出しました源『御免』といふなり鐵砲を片手に持つて、またもや鬼鹿毛に飛然飛乘りました。

（第拾四席）　平次八百石に取立てらるゝ事、幷に七郎右衞門の惡事を聞き出す事

これを眺めた伊達彈正またもや、口を出しまして彈正『申上げます、君公にはこの事計りはお止まりを願ひます』太守『ヤアまたしても要らざることを申す、何故あつて止めるのぢや』彈正『さればでございます、彼れ足輕の身分で、斯く馬術に巧みなる上は、或は大阪の殘黨かも分りませぬ、萬一鐵砲を以て的を擊と見せ掛け、御尊體へ對して彈丸を向るやも計り難ふ

存じます、然あるときには實に由々しき大事でございますから、何うかこの儀はお止まりを願ひます』太守『默れ彈正、價値の知れたる足輕ごときに、何條この身を擊たれんや、假令大阪の殘黨にせよ、予は千軍萬馬の中を往來した者である、彼等ごときに擊たるゝやうでは、苟且にも六十餘萬石の國主になれると思ふか、さる武運拙い予ではないぞョ……控へ居らうぞ、馬鹿者奴……』と一言の下に叱り附けられ、伊達彈正は恐れいつて居ります、此方は松本源助先生、一番巧く行つて出世をしやうといふ了簡、馬を徐々と歩ませて居りましたが、時分は好しとハッと鐙を蹴ると、馬は矢のごとく走り出しました、源助は鐵砲を左眼に當て的を狙ひながらもハッと馬背に隱れたと思うとズドーン一發、カチリ黑星へ的中りました、またもや彈丸を籠めて二發三發と擊出しましたが、二發目も黑星、三發目は星から一分下つて命中ました、太守は申すに及ばず、使者なり家中一般のものはアッと舌を卷いてその妙術を感心いたし、喝采の聲は天地に轟く許り、右の的を取寄せ御覽になりまするとなるほど中てたり初發二發は黑星の中央を貫き、三發目は一分下つて貫いて居ります、これが火術の名人ださうにございます、三發を全部黑星に中てますると魔がさすと云ふので、態と一發は一分下を貫いたのは、太守においても大層御感心遊ばされ太守『松本源助、今日より食祿五百石を以て抱えて遣はす、何うか予に對して指南いたして呉れるやう』といふお言葉が下りまし

たので、源助の悦びは實に譬へん方がない、するとまたもや例の伊達彈正が彈正『恐れながら申上げます』太守『ム、彈正、またも汝は口出しをいたすか、全體何事である』彈正『何うも足輕ごとき者を、如何にその術に長けたりと申して、五百石の大祿とは餘りではござりませぬか、何卒素性をお正しの上、お抱えの程願はしう存じまする』太守『ウム如何にも汝の申す處も一理がある、それも爾うぢや、ア、コリヤア松本源助』源『ハ、ッ』太守『汝の素性を語れ：：ウム汝の父は何と申す者ぢや』と問はれて松本源助此處を踏外しては、伯父の敵も討取る事が出來ないと思ひましたから源助『ハ、ッ恐れながら、私の父と申しますると加藤十勇士の一人斑鳩平兵衛、私は其の伜同苗平次と申す者でござります、事情あつて松本源助と名乘りまして、御當家の足輕を勤めて居りました』と申上げると、陸奥守殿は滿面に笑をお含み遊ばし太守『ウーム有名なる加藤家の勇士、斑鳩平兵衛の伜であるか』平『御意にござります』太守『ウム：：コリや彈正、これなれば素性は賤しからざる者であらう、朝鮮征伐の折に、和漢に勇名を轟かした斑鳩平兵衛の伜であるからは、五百石にては彼も不足ならん、よつていま三百石を加增をいたし、八百石を遣はして宜からう：：コリヤ〳〵斑鳩平次、汝に今日より八百石を遣はすから忠勤を盡して呉れヨ』と御意になりました、サア彈正は却つて藪を打つて蛇を出すの道理、苦々しい顏色をいたしまして彈正『なか〳〵立派なる素性でございます

と頭を低げてしまひました、此方は陸奥守殿宛も心地好げに太守『コリヤ平次、今日より余が名乘の一字を遣はし、斑鳩平次正盛と名乘れヨ』平『ハ、ッ身不肖なる某へ對し、御名乘の一字下し置かれ有難く御禮申上げます』と此處でその日の馬乘も首尾よく濟みまして、會津の使者は舌を捲いて感嘆して、却つて耻を受けたるも同樣、倉皇にお禮を申上げこれは本國へ引取りましたが、さて此方は更に平次へお屋敷を下し置かれ、足輕より一足飛八百石の指南番と相成りました、勿論野口金太隼方へも相當の御褒美がございましたが、金太隼方も平次の出世を悦び、これで後日の再會を約して白石の城下へ立歸りました、ところが陸奥守殿においては、何うも足輕にも斯樣なものがあるによつて、更に家中一統足輕に至るまで、三日の間技倆試しといふことに相成りまして、御城内において立合が出來ました、すると例の早川團平、秋山良助、城戸武助の三人が三日の間勝續けました、これまた二百石宛の侍士に取立てと相成りましたから、三人のものは天へ昇るの悦び、これといふも畢竟平次先生の御恩であると、ます〳〵平次に對して忠勤をいたすといふ有樣、サアこうなると家中の若侍が、我も〳〵といふので平次の弟子と相成りましたから、馬鹿を見たのは太田七郎左衛門でございます、おのれの弟子は平次の方へ行つてしまひましたから、尙更無念と思ひまして、何うかいたして鬱憤を晴さうと、伯父の伊達彈正と頻りに工夫を凝らして居りましたが、茲に一

の騒動が起ると申しますのは、毎年陸奥守殿が江戸へ御參覲に相成ります節は、必らず出立前に鹽釜明神へ武運長久のため御參詣に相成りまして、三日の間御祈禱を遊ばされ、守札を頂戴になりまして、それを以て江戸へ御參覲に相成り、御歸國の節以前の鹽釜明神へお返しに相成りますのが一の家例となつて居ります、恰ど本年も御參覲のときに間近く相成りましたから、行列美々しく多勢の家來を隨へ、鹽釜明神へ御參詣に相成りました、そのお供の中に伊達彈正、太田七郎左衛門、斑鳩平次、早川團平、秋山良助、城戸武助も加はつて居ります、太守は御本陣へお着となりました、するとその日は皆々休息を下され、斑鳩平次においても自分の宿で一杯飲みまして、ブラ〳〵と氣晴しに散歩と出掛けました、さて段々と歩つて參りましたのが、名取川の堤へ出て來まして四邊の景色を眺めながらブラ〳〵歩つて參りますると、一軒の茶店がございます、今年四歳か五歳と見えまする男の子が、店頭で砂を弄つて遊んで居ります平次『オ、可愛い子である、見受けるところが、この邊に似合はざる色白の、凛々しい子ぢやわい』と思ひながらも見て居りますると、子供の母親と見えまして、五十歳許の女がその傍で頻りに糸を紡いて居りましたが、早くも平次の姿を認めまして女『旦那さま、子供が惡戯びを致しまして、嘸かしお見苦しうございませう、サア何うか汚穢しうはございますが、此所へお掛けなされまして、一吹召喫りませ』と云はれて、平次も

其處へ參りまして平次『では暫時休まして貰はう』と緣端へ腰を下して一吹して居りますると彼の女房は子供に向ひまして

女『コレ坊や、左樣な惡戯はお止しなさい、旦那さまがお休みになつて居るから……』と子供の惡戯を制止やうといたします、此力は平次が平次『ア、イヤ〳〵棄て置かつしやい、子供の遊びといふものはなかなか愛らしいものぢや、苦しうない』女『左樣なれば旦那さま御免遊ばしませ』と糸車へ手を掛けて頻りに糸を紡いて居る、平次は子供の遊びを一心不亂に眺めて居りますると折しも此處へ來掛りました一人の百姓體の男、頰冠をいたし鍬を肩に擔げて男『ヤアお喜代さん何う

しなすつた、何うも今日の行列は相變らず勇ましかつたのふ』女『オ、平助さんかい、マア一服してお居で……』平『ヤア大きに……しかしお喜代さん、お前も今日行列を見なすつたら、嘸かし思ひ出しなさるだらうねえ、乃公だつて眞個に口惜しいもの、お前の良人が現世にござつたら、定めし今日のお行列のお供をして立派に行けるもの、眞個にあの七畜生のために大變な目に遇ひなさつた乃公ア考へると涙が溢れる、今日お前さん太田の餓鬼がキロ〳〵眼をしやアがつて、乃公より豪い者はないと云ふ容貌で居やアがつたから、乃公ア最う腹が立つて、この鍬で打擲つて遣らうかと思つたが、イヤ〳〵到底乃公が敵ふものぢやアないと、殘念ながら斷念めて歸つたものゝ、心の中ぢやア堪つたものぢやアない、だからお前さんの心の中を察するよ』と平次の妻が眼に着かぬから、頻りに不平を鳴らして居ります、ハツと思つてお喜代は平次が居るから滅多のことをいふなと、眼を以て仕儀をいたして居りますが平助はその意味が分りませぬか平助『お喜代さんお前は眼をクシャ〳〵させて居るが眼でも不快いのかい、眼といふものは大切のものだが、一眼二足といつてナ大切にしなさい』といひつゝ偶然と平次の妻を見て平助『オヤッ……』といひながらおのれの手でおのれの口を押へ平助『ブル〳〵鶴龜々々』と吃驚いたし、その儘先方へ行かうとするやつを平次『ア、コリヤ待て〳〵……一寸と待て……』と呼ばれて、ハツと色を變へた百性平助、ブル〳〵慄へなが

ら平助『ウッヘイエ、旦那何うか御勘弁なして下さいませ、ヘイ〳〵この通りでございます』兩手を合はして拜んで居ます、平次は可笑しくて堪りませぬので漸つと笑ひを忍んで平次『イヤ苦しうない、左樣に心配をいたすな、拙者は當國のものではなく九州地方の浪人者で、今日鹽釜へ參詣旁々奥州松島を見物しようと思つて、當地へ出て來た譯だが、併し何かい只今聞くところが、この御婦人は以前陸奥守樣の御家來の御内室で』平助『ヘエーでは旦那さまは御家中ではございませぬか』平次『ム、爾うぢや』平助『でございまするか、夫れで私も漸つと安心をいたしました、ア、吃驚した、眞個に太田の味方の奴かと思ひまして……ヘイ夫れやあ何でございます、このお喜代さんと申しまするのは……』といひ掛けてお喜代の顔を眺めて平助『そのヤア其樣なものでございます』平次『ハ、ア訝しな返答だな、マア〳〵宜しい、して何が何ういふ理由でお良人は亡くなられたのだ』平助『ヘイその何でございます、これには段々深い樣子がございますので……』平次『ウーム爾うか、何うだ拙者は人の難儀を見たら、助けたいといふのが性質だ、仔細がなければ一ッ話をして聞かして呉れ、また何う云ふ相談をいたさぬものでもないから』といはれた百姓平助は、心の中に決心致しましたか平助『イヤお話を仕つりませう、併し旦那さまなか〳〵先方は大した者になつて居ります、で他人には決してお話し下さいますな、實ア斯ういふ譯でございます、太田七といふ奴が居ります、そ

の何でございます、名前は太田七郎左衛門と申すのでございますが、私は腹の立つことがございますゆゑ、太田七と申すので、』平次『ウム〳〵』平助『此奴はなか〳〵何うも、夫れやアなか〳〵惡い奴でございます・・・』平次『ウーム何う云ふ理由で腹が立のだ』平助『何故と申して貴方、仙臺の御家老に伊達彈正といふ人がございます、その彈正といふ人の甥に當るのが太田七で、此奴が何時の間にやら九州から出て來まして、その伯父の處へ參りまして、假令少〳〵少の扶持でも構はぬから仙臺公へ取持つて呉れといふ事になりまして』平次『ウム〳〵成程』平助『ところが、何しろ一方は御家老、殊に伯父甥の間柄でございますから、宜しい引受けたといふことになりました』平次『成程』平助『するとは前から御指南番をなされてお居でになりました、勝田忠左衛門樣といふ、そりやア何うもお慈仁深いお方がございました』平次『ウム〳〵ウム』平助『そこで彈正の計ひで、この太田七と勝田樣とを立合をいたさせ、都合好く勝田の旦那を負かして、その後釜に据ゑやうといふ計畫でございました』平次『成程』平助『其處が旦那さま、惡いことは出來ないもので、勝たうと思つた太田七が散々に勝田の旦那に打たれましたので・・・』平次『なアーる程』平助『たが旦那、何しろ伯父の彈正が家老でございますので兎も角これ程の技倆があればといふので、知行三百石にお抱へになりました、どうも太守樣も分りませぬ・・・負けた奴に三百石を遣るなんて・・・』平次『ウム爾うか』平助『サア斯うなる

と太田七が、仲間が欲しいとなりまして、私の弟に六造といふ者がございますが、此人は隨分幼少いときから放蕩で、仙臺の御城下で彷徨いて居りまして、その太田七の方へ仲間に這入りました』平次『ム、左樣か』平助『ところが旦那さま、これから肝臂のお話で、その太田七と彈正とが相談を致しまして、何うも勝田の旦那を生かして置いては、出世が出來ないといふ考へを起しまして、何うかして失策を見出して、浪人さすか殺してしまはうといふ何うも惡い僻輩で、このことを六造に相談を致した相でございます』平次『ウーム、何うも怪しからぬ奴ぢやのう』平助『ヘイ〳〵惡い奴の何のつて、全然話にならない奴でございます、それで六造に何うかいたして、勝田の旦那さまの所持の一品、何でも宜いから盗んで呉れいといふ頼みでございましたが、何しろ放蕩は致しましても、さうまで惡い奴ではございませぬ、私の弟を賞めるぢやアございませぬが・・・そこで他人さまの物品を盗むことは、私には到底出來ませぬとお謝絶を申上げたさうでございます』平次『イヤなか〳〵感心の者だ』平助『ヘイ有難うございまする、すると旦那さま太田七のいふことには、それでは汝の友達に盗む奴はあるまいかといふ頼みで、六造奴が紹介ぬでも宜いのに、びん小僧の丑松といふ、此奴は途方もない惡い奴で、此人に頼むといふことになりました』平次『ウム〳〵』平助『そこで、びん小僧の丑松へ話をいたしますると、何しろ稼業でございますから、金子になりさへすれば宜い

といふところから諾と承知を致しました、恰ど三月三日の節句でございましたが、勝田の旦那が太守様から御饗應を戴いて、日の暮れ時分大手の枡形といふ處へお掛りになりまするとと豫てびん小僧は仲間風に粧つて待受けて居りまして、ドンと突當りさま、勝田の旦那が太守様から頂戴になりました、至極大切な印籠を掏取りました』平次『フーム酷い奴だのう』平助『夫れから勝田の旦那さまは、ア、周章者もあるものだと思召して、腰の印籠を奪られたことは夢にも御存知なく、サッサと屋敷へお歸りになりましたが、此方は丑松が仕合せ好しとその印籠を太田七へ渡して二十五兩に買つて貰つた上、五兩の褒美まで貰ひましたが、その内の十兩を弟へ呉れましたさうでございます』平次『ウームなか〳〵混雜んで居る話ぢや』平助『へイ〳〵惡い奴でございますから、何うも能く企んだものでございます』平次『して何かそのびん小僧の丑松といふ者は、何處に居るか只今は分らぬかい』平助『夫りやア何處へ行つたか一寸も分りませぬ』平次『ム、爾うか』平助『さう致しまするとその印籠をもつて四月の十四日でございました、このお喜代さんの良人といふのが、仙臺の足輕小頭を勤めて居られました、坂田與市といふお方で、この坂田さんが何か御用があつて、名取川の堤を通り掛りました』平治『ウーム・・・』平助『すると旦那その太田七の餓鬼奴が、後から尾けて來まして突然拔討に、バッサリ斬付けましたから堪りませぬ、マア何しろ指南番にでもなるといふ技倆

でございますので、アッといつたが現在の別れ・・・モシ旦那何うも憎い奴でございませう』平次『ウム武士に似氣なき奴ぢやのう』平助『夫れから、その坂田さんの打倒れて居る所へ、例の勝田の旦那の印籠を態と落して置きました』平次『フーム』平助『サアこれが太田七の計略、到頭その印籠が證據となりまして、お氣の氣にも勝田の旦那さまは殺人罪といふところから切腹とまでなりましたを、片倉小十郎さんといふお方が、種々御議論の上浪人といふことになりました』平次『ウーム・・・』平助『何でも其の勝田の旦那さまは、福島とやらで御病氣にお罹りなされて、大層御難儀をなされてお在でになるといふことで・・・』平次『イヤ何うも、聞いても腹の立話しだのう』平助『夫りや腹が立つの何のつて、まだこれからでございます、その勝田の旦那さまが御浪人をなされましたので、太田七の野郎奴一足飛びに五百五十石の御指南番となりまして、只今ぢやア飛ぶ鳥も落ると云ふ大した勢でございます』平次『成程』平助『そこで弟の六造が、斯う云ふ惡事を知つて居りますので、度々無心を申しまして十兩二十兩と貰ひましたさうです』平次『成程』平助『ところが、或日六造が例の無心を申しますると、快く金子を呉れまして夫れから用事を云付けて、この名取川の向方村に寄越しましたが、太田七の餓鬼奴、六造の跡を從けて來まして、恰ど日の暮過で、人の顔が分るか分らないかと云ふ時分、後方から拔討に肩口を斬下げましたが、六造の運が好かつたか僅の負傷でござ

いましたから、その儘名取川へ飛込んで漸つと遁れましたもの丶貴様さまも御承知でございませう、彼如云ふ激しい流れでございますし、殊に飛込んだ時に石で足を痛めましたから、その儘死んでしまつたかと思ひまするとム、折好くも漁師の網へ掛つて助かりました』平助『ウーム夫れは好かつたの』平助『ところが旦那、その負傷が原因で到底跛となつて最う此頃では仕方もございませぬ』平次『夫れは氣の毒千萬な話ぢや』平助『斯う云ふ惡い奴で、太田七と私が申すのも無理ではございますまい』平次『イヤ道理の譯である』平助『その太田七の野郎が、今日の御行列の中に立派にしてお供をいたして居りまするが、斯うなると天道さまも正を助けるとは言ひませぬ』平次『何うも酷い奴ぢや』平助『ところが可哀想なは、ソレ此宅のお喜代さんでございます、良人は殺され、一人の子供を連れ今は斯うして貧しく生活して居られますが、定めし今日の行列の美々しいのを見たら、良人の事が思ひ出されるだらうと、私も涙を溢しましたので、殊に何日の夜でございましたが、私が用事を濟せまして名取川の堤を歸り掛けますると、その夜は寒が嚴しうございまして、雪がドン〳〵降つて居りましたが、この子供でございます、この寒を厭はず可哀想に、堤の上に突立つて川中を眺めまして、父さまいのうと云つて泣いて居りまするぢや、わ、わ、私は可哀想でこの胸が張裂けるやうに思ひまして、この子供を漸つと賺して此宅へ連れて參り、何故子供を一人で出しなさる、萬一の

事があつたら回復が附かぬではないかと申しましたら、お喜代さんの云ふ事は、また私の涙の種でございます、イヤ夫りやア心着かぬではないが、この子供が毎夜お父さん〳〵と云つて、何うしても寢ませぬ、偶には泣倒れて寢る事もありますが、何うしても寢ない時がありますと、その時には仕方がないので、夫れでは堤の上へ行つて、お父さんを呼んでお來でなさいと申しまするとム、彼の樣に一人で堤へ參りまして呼んで居るのでございますと、お喜代さんが泣いての物語、わ、わ私は弟の敵よりも、このお喜代さんの敵が討取つて遣りたうございますと、平助が涙ながらに物語る、一伍一什の事情を聽取りました斑鳩平次正盛思はず涙を催しまして平次『ア、左樣か、何うも惡むべきは太田七郎左衞門、憫むべきは御婦人なり其方の身の上、然し其方が夫れぐらゐ詳しく何も彼も知つて居れば、何故訴へ出ぬのぢや』平助『イヤ夫りやア私も爾うは思ひましたが、何しろ向方は指南番、迂濶した事を申し出まして、却つて私共の生命を奪られるやうになつたら、夫れこそ大變でございますから、何でも力になるお方を見着けて、そのお方へ賴んで敵討をいたさうと、無念ながらも時節を待つて居るやうな事でございます、併し旦那さま、頃日仙臺へ豪いお方が見えましたさうで、何うかそのお方へ賴みたいと、毎日神樣へ願ひ申して居るやうなことでございます』平次『ウーム：：：してそのお方と云ふのは、何と云ふ人だな』平助『エ、何とか云ひましたヨ：：：オ、左樣

左様斑鳩平次様と申します』平次『左様か、その人へ頼む心算ぢやナ』平助『ヘイ、そのお方でございましたら、夫りやア最う大丈夫で何うかお頼み申したいと、一心に思つて居ります』平次『爾うか、夫りやア最う頼むに及ばない』平次『ヘエー無益でございませうか』平次『イヤ爾うぢやアない、最うチャンと云うてあるから心配する事はない』平助『オヤ〳〵ヘエ……』と平助は妙な顔をしながら、最とも不審の體でございます、此方は平次正盛は、ニコ〳〵と笑ひながら平次『オー不審も道理、その平次といふのは則ち拙者である』平助『エーッ……、ぢや貴方様でございましたか』平『如何にもさうぢや、その浪人いたした勝田忠左衛門といふのは拙者の伯父に當る人だわい』平助『何と仰しやります、それでは彼の勝田の旦那さまが伯父さまで、貴方が斑鳩平次様でございましたか……モシお喜代さん、サア早くお出で、このお方が斑鳩平次様といふお方だとヨ』と平助の喜こびは天へも昇る心地、お喜代もこれを聞いて早速平次の前へ出て參り、額を着け両手を突かへて喜『何うか旦那さま、宜しうお願ひ申しまする』と嬉し涙に咽びまして喜『オイ坊よ、お前も此處へ來てチャッと旦那さまへお頼み申しや』といはれて、今まで悪戯を致して居りました小兒は、衝々と出て來まして紅葉のやうな両手を膝へ乗せ小兒『何うぞお父さんの敵を取つて下さいまして、一日も早くお父さんのお歸宅になりまするやう、宜しうお願ひ申しまする』と流石は小兒だけに、死んだ父が歸るやうに思つて頼むいぢらしさ、三人は涙をホロリと零しまして、互に顔を眺めて居りまする、平次正盛は感情に激せられ小兒の手を握つた儘堰き來る涙を押止め平次『ア、憫然な者だ、可哀想なことだ、ヨシこの叔父が屹度敵を取つて遣はすから、必ず安心いたして居れ』と子供を慰め更らに百姓平助に打向ひ平『イヤ心配いたすな、この平次のためにも伯父の仇屹度敵を取つて遣はす、去りながらその六造といふ者に、最う一應聞正して置きたいから、その者を此處へ呼んで置いて呉れ』平助『ヘイ〳〵有難う存じまする、何うか何分宜しうお願ひ申しまする、六造は私が今晩連れて參ります』平次『ム、……では頼んだぞ』と平次は一先づ我が宿といたして居ります鶴屋五兵衛の宅へと歸つて參りました。

（第拾五席）　圓平數人の曲者と大奮闘の事、并に七郎右衛門等平次に召捕らるゝ事

ところが彼の早川圓平、秋山良助、城戸武助の三人でございます、今しも大層酒を飲んだから三人共泥酔になつて何か愚圓々々と話しをいたして居る處で、その席へ歸つて參りました平次正盛平次『ヤア早川、秋山、城戸のお三方』と聲を掛けたから、流石は生酔本性違はずで、胡座を掻いて居りました三人吃驚して嚴粛に座を改ため圓平『マア先生でございますか、何時

お歸宅になりました』平次『ム、只今立ち歸つたが、併し何うも爾うお酒を飲がつては宜しうござらぬ、些とお慎しみなされい、拙者は今日吉報を得ましたぞ』三人『ヘエー何ういふことでござります』平次『他でもござらぬ、卽ち貴公等三人が怨み重なる太田七郎左衞門の惡事が露顯をいたしました』三人『エーッしてまた先生、何ういふ處から如何なる惡事をお聞込みになりました』平次『されば……斯う斯う斯樣でござる』と一伍一什を物語りましたから、三人は悅び勇み團平『イヤ何うも悅ばしいことでございます、さういふことでございますれば、一寸も早く太田七郎左衞門の旅宿へ踏込み、捕縛つては如何でございます』平次『イヤ〳〵夫れは我々が捕縛するよりも、相當の手續を踏んで乾度白狀をさした方が宜しい、さうして阪田與市の伜與之助の助太刀をいたし、七郎左衞門の生首を取りますのでござる』三人『成程左樣でございます』平次『拙者とても伯父の無念を晴し、貴公等がまた怨を晴す時節到來、必らず空呆ては不可ませぬぞ』三人『心得ました』平次『今晩最う一應、六造といふ者に聞き糺すのでござるから、一緒にお出で下さい』とこれから日の暮るを待つて平次、團平、良助、武助の四人が打揃ふて出て來ましたは例のお喜代の宅でございます、四人が參つて見まするとなほ何ろ田舍の事なり、且は一軒家でございますから、最うチャンと戸が閉めてございます、平次正盛はトン〳〵と戸を叩きながら平次『コリヤ早く開けて呉れ、平次である』と訪ひます

ると、早速内方から出て來ました百姓平助が平助『ヤア旦那さまでござりまするか、何うも御苦勞さまで……』と戸を開ける間遲しと平次正盛、内方へ這入つて來まして平次『六造といふ者は參つて居るかナ』平助『ヘイ〳〵、最う先刻から連れて參りまして、奥で待つて居ります……ヤイ六造ヨ、旦那さまがお越しになつたから、早く出て來い』と呼はりますると、奥から膝行り出ましたは六造でございますが、見ると大層痩せ衰へて頰骨高く、眼凹み見る影もない有樣、平次『六造といふのはお前かい』六造『御意でござりまする、兄貴から承はりましたが、何うも此樣な目に遇しやアがつた太田七郎左衞門、早く敵を取て下さいませ』平次『ウム敵は取つて遣はすから、安心をいたすが宜い、併し貴樣の兄平助から、ことの有樣は聞いたものゝ、尙一應聞き訊したい拙者の考へ、詳しく話をいたして呉れ』六造『ヘイ〳〵畏まりましてござります』と說き出す物語は兄平助の申しましたと寸分も違ひございませぬから、平次正盛は大層悅びまして平次『イヤ御苦勞であつた、夫れで宜しい、近いうちに敵を取つて遣はすから、神妙にいたして居れ』と平次は戸外へ出まして平次『早川……』團平『先生何御用で……』平次『お前はナ、一人此處へ殘つて呉れ』團『ヘエー何ういふ理由で、私が一人丈け殘りますので』平次『されば……奸智に長けたる太田七郎左衞門、萬一おのれの殺した坂田與市の女房伜が、近邊に居るといふことを知つたなら、生けて置いては後日の爲めに宜しくない

と思つて殺害に來まいとも限らぬ、よつて爾ういふことになつては、折角寶の山に入りながら、寶を失くする道理であるから、保護の爲めに殘つて居つて貰ひたい』園平『成程……先生心得ました、決して御配慮には及びませぬ、この早川園平が從いて居りますからは』平次『サアそれが不可ぬ、油斷大敵といふ事があるから、決して自負してはならぬ』と懇々と戒めまして、平次は秋山良助、城戸武助の兩人を從へ、太田七郎左衛門の狀況を伺はうと、今しも名取川の堤の中央へ掛つて參りまするとと、折柄遙か前面の方よりも闇の鴉か烏羽玉か、覆面頭巾に黑裝束の怪しい曲者五六名、此方を指して歩つて參る樣子でございますから、平次は心中にハテナと思ひまして平次『秋山に城戸』兩人『ハイ』平次『何うやら前面から怪しき扮裝の奴が五六人、此方へ來る樣子であるから、何者か窺つて遣らう』兩人『成程參りました〳〵』平次『サアこの堤の下へ隱れやう』といふので三人はバラバラッと堤の下へ駈下りまして茂みの中へ隱れて居りまするとと、此方の怪しい奴は其樣な事とは知りませぬから、歩つて參りましたは三人の隱れて居る處で　○『先生彼宅でございます、彼處に一軒家がございませう、卽ち彼宅が坂田與市の後家伜が……』といはうとすると頭らしき一人の侍が　△『ア、コリヤお默り召されい、左樣なことを、こういふ處でいふものではござらぬ、壁に耳あり徳利に口ある世の戒め、萬一他人に知られて御覽なさい、我々の一大事ではござらぬか、決して爾うい

ふことを仰しやるものではござらぬ』

○『ハ、ッ先生何うも恐れ入りました彼宅がその伜の奴の居る所でございます』△『ウーム左樣か、サア早く案内を下されい』といひながら、スタ〳〵歩つて參りまする圖らず聞いた平次正盛平次『秋山、城戸……』兩人『先生』平次『何うやらいま向方へ行く六人は太田七郎左衛門を首め、門弟共に違ひないサア早くお來であれ』と、三人がバラバラと出まして、後から知れぬやうに六人の跡を從けて參りました、此方は六人の曲者は例のお喜代の宅へ來まして五人は裏手、一人は表へ參りますから平次『いよ〳〵太田に相違ない、必ら

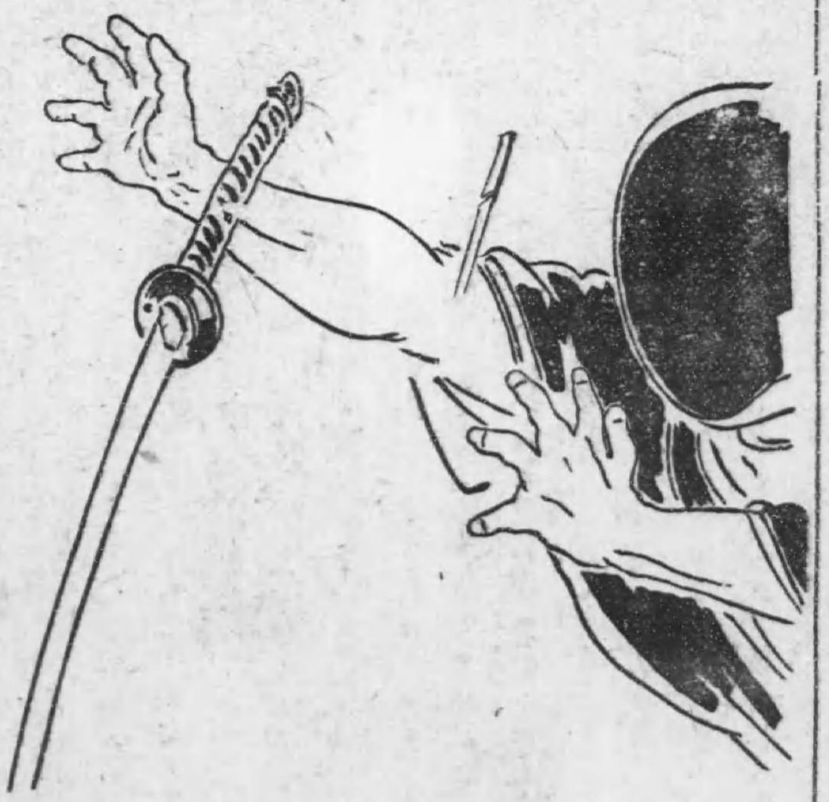
す空呆つてはなりませぬ』と、同じく裏手へ參りましたが……さてお話轉つて内方では例の早川團平が、酒を買つて獨酌でやつて居る、餘程梯子酒と見えまして團平『オイ酒があらば持つて來い……ウム早く持つて來ないか』と頻りに呼ばるものでございますから平助『ヘイ〳〵お酒は少々ございますが、その何で今晩は……』團平『何だ今晩は……あらば早く持つて來い』と云はれて流石に百姓平助、何うもそれでもとは申されませぬ、早速一升樽を持つて參りまするとと、團平は五郎八茶碗で冷なり、ウム〳〵と飲んで居ります團平『アーア何うも酒に限る酒なくて何のおのれが張番かなか』と先生非常の機嫌の體でございます、平助は恐怖しながら平助『モシ旦那……モシ先生』團平『ム、何だ……』平助『餘り貴方お酒をお飲り遊ばしましては、あの例の奴が出て來る時分に、貴方が酩酊されて、足が立たぬと云ふやうなことがございましては、私共が大きに困りますから、何うか明朝お飲り下さいまして、今夜は誠に失禮ではございまするが、お止めを願ひたう存じまする』團平『何だ、コリヤ默り居らうぞ、ウム斑鳩平次正盛先生の一高弟、早川團平とは我事であるぞ、武士たるべき者が、僅な酒を飲んで、酒に手身を奪られるといふことがあるか、餘人は知らずこの早川團平ばかりは一升飲めば一升の力を增すのだ、心配いたすな、ウム必らず安心をいたして居れ』と太平樂を並べて居る處へ、折から裏手の方に當つて、バリ〳〵〳〵〳〵といふ音響がいたしまする、平助は

容易ならぬ物響をきゝ、青蒼な色なにつて顫ひ出し　平『モシ旦那……何だか裏手の方が、バリ〳〵〳〵〳〵といふ物響が致しまする』團平『ナニッ……バリ〳〵といふ音響がいたす、ウム恰ど待つて居たのだ、酒を飲だが爲めに力を增して、腕が夜泣をいたして居るところ、そいつは夜泣止めの藥が來たといふもの、ヤア面白いぞ、其方等は怪我があつてはならぬによつて、押入の中へ隱れて居れ』平助『ヘイヘイ、何うかマア何分確乎お賴み申します』と平助とお喜代與之助は皆々押入の中へ這入つてしまひましたが、六造は何分蹙のことでございますから、ズル〳〵這ひながら六造『オーイ兄貴、待つて呉れ、自分等は隱れても、乃公のやうな蹙を打棄やつて置くといふのは酷いぢやないか』と怨みながらも、漸やうのことにこれまた押入の中へ潛り込みました、そのうちに裏手の方を、バリ〳〵と打壞し中へ這入つて來ましたのは、例の五人の曲者でございます、此方は早川團平は下緒を脫つて早速の襷手拭にて鉢卷をいたし、太刀の目釘に濕りを呉れ、スラリ拔いたる氷の刄を右手に引提げ躍り出で、團平『ヤヤ人里離れた一軒家へ、覆面頭巾で這入つて來たは正しく夜盗の類ならん、伊達陸奥守公の家來において、武勇類なき豪傑早川團平とは我事なるぞ、我と思はん者は來つて勝負を決せよ』と大音を張上げて呼はりました、これを聞いたる五人の曲者　○『ヤアおのれは遺恨重なる三門弟の一人、早川團平であつたか、幸ひのことだ覺悟いたせ』と五人が齊しく打

込んで來るやつを團平『ナニッ』といひつゝチャンチャンリンと斬りむすびましたが、何しろ寡は衆に敵せざるの金言、先方は五人、此方は一人、幾ら早川團平が必死の勇を出しましたところで敵ふことはございませぬ、漸々と後ろへ〳〵と退つて來ました、この體を眺めましたる斑鳩平次、秋山良助の兩人、勿論城戸武助は表に待たしてございます　平『秋山……』良助『先生何か御用で』平次『何か用といふことがあるか、貴公の爲めには親友の間柄、互ひに生命の危ない時は、助け合はなければならぬではないか、夫れに早川の危急を傍觀して居ることは何事だ、サア早く助太刀をして遣りなさい』良助『ヘイ、だがそいつは打棄つて置きませう』平次『これは怪しからぬ、何故打棄つて置くのぢや』良助『先生……彼は大體兄弟子の顏を致しまして、一つ違うと貴樣を出世さして遣つたのは乃公がして遣つたのだから、乃公を守護神さんのやうに思へなんて大層自慢を致しますから、斯ういふ時にその少々は彼に苦しまして置きませぬと、將來の爲めになりませぬ』平次『ウーム、併し萬一急所でも斬られては不可ないから』良助『ナアに大丈夫でございます、私に考へがございまする』と衝々と入口へ參りまして大音を張り揚げ良助『ヤアイ早川團平確乎しろッ、生命の危ない場合となつたら、秋山良助が控へて居る、將來高慢を吐かぬといふなら秋山良助生命に掛けても助けて遣るが何うぢや』と呼ばりまするとと早川團平、此奴大層負惜みの強い男でございますから、斯る場合も

厭ひなく團平『ヤア秋山良助、貴公も來て居るな、なあに彼等五人や十人來たればとて、そんな事に驚く團平ではないぞ、決して心配いたすに及ばぬ、貴公等の手を借らないでも拙者曲斬りをいたして見せるから、其處にあつて見物いたせ……』曲斬とはひどいことを云ふ奴だ、良助『先生何うでございます、如彼いふ剛情で誠に仕方のない奴でございます』といつて居るうち如何にしけん早川團平、上り口を踏外して庭へズトンと墜倒れました、太田七郎左衛門はこの時なりと進み寄り、今や團平の頭上を目蒐けて斬下さんとする、此處間髪を容れざる危急の場合、斑鳩平次正盛は、手早く小柄を拔取り、エイと計りにピシャーリ投附けまする と、手練の早業何して狙ひを外しませうや、ピューと迂鳴を生じて飛來る小柄は、今や斬下さうとする太田七郎左衛門の二の腕の處へ突刺ましたからアッと驚いた七郎左衛門は、這は敵はずと思ひましたか、後へ引返さうとするやつを、早川團平が突然刎起きさま七郎左衛門の足を掴んで引摺り落しましたから、七郎左衛門はアッと云ひながら入口の處へ打倒れました、そいつを上から乘蒐つて胸倉をグイと押へた早川團平『ヤア秋山良助これを見い、墜落たと見せたは拙者の計略、斯う云ふ工合に取押へんが爲めである』と呼はつて居りまする 良助『先生彼樣な餘計な口を吐く奴です』平『何うも面白い男だ』といつて居るうちに、餘りの四人の奴が團平を斬附けやうと致しますから、秋山良助が飛込んで參り　秋『ヤア汝等に得物

が要らうや、これでも喰らへといひつつ、握り拳を振上げて前後左右に打据ゑました、これに驚く五人の僕輩、表に逃げ出さうとするやつを、平次が飛込みざま難なく五人の曲者を捕縛つてしまひ、さて表の方へ出て見ますと此處では城戸武助が、一人の侍と上になり下になり組んで居りますから、これに助力を致しまして難なくこの者を縛めてしまつて平助、六造、お喜代、與之助を連れまして『サア歩めい』といふので六人の曲者と共に歩つて參りました處は、伊達陸奥守の御本陣でございます、高張提灯は萬燈のごとく、所々には篝火を焚きまして恰も白晝か



と思はれる計り、足輕共が手に〳〵六尺棒を持つて警番をして居ります、平『ア、コリヤ〳〵拙者共は斑鳩平次、早川團平、秋山良助、城戸武助の四人でござる』足『ヤア左樣でございまするか、サア〳〵何うかお通り下さいまする』とこれから玄關へ通りまして　平『お賴み申す、斑鳩平次始めといたし早川團平、秋山良助、城戸武助、四名今晩怪しき曲者を認め、只今召捕つて參りましてございます、何卒今晩中にお取調の程を願ひたう存じまする』と呼ばりますると、運の惡いことには伊達彈正が、何ういふ工合か此處へ來掛つた所でございますから、この聲を聞いて佇止り　彈『ハテナ……萬一太田の奴が、間違でも起して召捕られたのではあるまいか』と思ひましたので　彈『ヤア只今承はれば何者を召捕つたと申す、平日とは違ひ、この度は鹽釜明神へ太守武運長久の爲めに御參詣に相成つて居る本日、何者かは存せねど斯る吉兆御祈禱のときであるから、以後を戒め追放して遣れ、斯く申すは伊達彈正であるぞ』と高らかに呼ばりました、サアこれを聞いた平次正盛、苟且にも家老職の言葉とあれば、これを背〳〵といふ譯には參りませぬから　平『ハ、ッ』と應はいたしましたが心の中で失策つた、何うも殘念千萬、今夜に限り伊達彈正の眼に掛るとはと、非常に口惜しがりましたが、妙なもので棄る神あれば拾ふ神ありとか申しまして、何かは知らぬが玄關の方に當りて喋々と人聲がいたしますから、其處へ出て來ましたは片倉小十郎でございます　小『コリ

ヤ〳〵何事である、ナニ斑鳩平次が怪しき曲者を召捕つて參つだ・・・ウム、彈正殿、貴公にもお似合なさらぬ、追放するなどゝは以ての外でござる、今回太守武運長久の爲めに、この鹽釜明神へ御參詣に成相つて居る折柄、怪しき曲者を平次の手に召捕つたといふも、これ畢竟鹽釜明神の御利益ならん、夫れにその者を太守にも申上げず、追放するとはこれぞ却つて神の御利益を無にいたすの道理、甚だ恐れ入る次第でござるから、決してそのものを追放する譯には相成らぬ、一應太守へ言上いたした上のこと、何と左樣なものでござらう』彈『ム、如何にも・・・』小『ヤア〳〵斑鳩平次、早川團平、秋山良助、城戸武助、決してその曲者を追放することはならぬ、大切の上に大切にいたし取逃がさぬやうにいたせ、斯くいふ拙者は片倉小十郎であるぞ』と大音に呼はりました、片倉小十郎の聲を聞いて、平次正盛は平『ハ、ッ有難い仕合に存じまする、仰せの趣き平次正盛心得ました』とお答へ申上げ、さて心の中で『ア、有難い、片倉小十郎殿のお耳に這入る上からは、百人の助力よりも心強いことである』と、思ひながら悅び勇んで控へて居ります、此方は片倉小十郎が太守陸奥守殿の御前へ參られ、襖の此方へ頭を低げ　小『ハ、ッ太守には最早御寢に相成りましたか』と申上げますると襖の彼方より　太『誰ぢや・・・何者ぢや』小『ハ、ッ』太『深夜に及んで何事ぢや』小『恐れながら只今斯樣々々の次第、如何取計

ひませうや、この儀お伺ひの爲めに罷り出でました儀でございます』太『ウム左樣か・・・斑鳩平次は新參の身でありながら、忠義の者ぢやのう』小『ハ、ッ御意にございます』太『白晝の疲勞も壓はず、予を大切に心得て夜中怪しきものは居らざるかと心を碎く平次正盛、感ずるに餘りあり、明日ともいはず今夜その者の善惡を調べて遣れ、汝に對して予の名代を申附けるまた斑鳩平次其他の者も勞はつて遣はせヨ』小『御意心得ました』と此方へ退つて參り、小『ヤア斑鳩平次、太守の仰せである、今夜拙者太守の御名代を申附けられ、取調べいたすから此方の旅宿へ曲者をば引連れ、歸宅いたして相待つて居れ』といふ言葉に平次は悅び、早速右六人の者を繩附の儘鶴屋五兵衛の宅へ連れ歸りました、サアこのことを聞いた伊達彈正心も心ならず、萬一太田七郎左衛門であつたら、何とかいたして助け遣らねば相成らぬと早速太守の御面前へ出まして　彈『ハ、ッ申し上げます』太守『誰ぢや深夜に及んで』彈『伊達彈正にござります』太『ム、彈正か、して何事であるぞ』彈『恐れながら只今承まはりますれば、斑鳩平次が今夜怪しき曲者を召捕り、片倉小十郎殿、太守の御名代となつて取調べらるゝとのことでござりますが、何分御參詣の折柄怪しき曲者が徘徊致したとあつては、これ容易ならざる儀に心得ます、つきましてはこの彈正も若殿の御名代と相成り、大切の上にも大切に吟味いたしたく存じまする、よつて御名代の儀お許し下されまするやう』と此奴なか〳〵佞奸の

智に富んで居りまするから、如何にも道理らしく言上に及びました、太守においても表面忠義に聞えますし、殊に片倉小十郎に名代を申附け、彈正に許り許さぬと言ふも如何とお考へなりましたから 太『ム、汝の願ひ聞き屆けて遣はす、よつて小十郎と共に綿密に取調をいたすやう』と御意が下りましたから、彈正も心中大悦び早速小十郎と共に鶴屋五兵衛の宅へ出て參りました取調役は仙石長左衛門といふ大目附で俄に鶴屋の表の室を取調處といたし緣側に斑鳩平次、早川團平、秋山良助、城戸武助がチャンと控へて居ります、緣下左右には百姓平助、六造、坂田與之

助、同人母お喜代、中央には例の六人の曲者を役人が繩尾を捉つて控へて居ります、上段正面左右には片倉小十郎殿、伊達彈正、一段下つて取調役大目附仙石長左衛門、左右には書役が筆を執つて待構へて居ります、勿論百匁蠟燭は萬燈のごとく燈してございまして、白晝よりも明るいといふ有樣、仙石長左衛門は扇面を膝へ附け 長『ア、コリヤ曲者の頭巾を脫れい』○『ハ、ッ』と應へて曲者六人の頭巾を脫りますると、紛ふ方なき太田七郎左衛門、其他門弟でございますから、大目附仙石長左衛門の驚愕よりも、伊達彈正はハッとばかりに仰天いたして、何か目でパチ〳〵知らせて居ります、此方は太田七郎左衛門も最早これまでの運命なりと、覺悟いたして居りました所へ、思ひがけなく伯父の伊達彈正が居りますから稍々安心をいたして、おのれ今に反對の言譯をいたして遣ると、心中に思ひながらも控へて居ります、此方は仙石長左衛門が暫時は無言でございましたが、軈て徐かに口を開いて 長『ハテさてこれは思ひも寄らぬ、如何なる曲者と思ひしに、見れば太田七郎左衛門首め、松田三十郎、秋田幸次郎、淺島左近、三浦重左衛門、山田左内ではござらぬか、全體各々方は、何故あつて斯樣に面體を包み、怪しき者と認められたるか』と尋ねに及びまするとと平次正盛が 平『恐れながら申し上げます、事實は斯樣〳〵でございます』と一五一什殘らず言上に及びまして 平『即ち彼處へ控へて居りまするのが證人の六造、兄平助並に坂田與市の室のお喜代

伜與之助と申す者でございます』と委細を申述べました、此方は仙石長左衛門 長『ウーム左様か、ア、コリヤ六人の者、吟味中は言葉を更めるから左様心得よ・・・・コリヤ太田七郎左衛門、只今斑鳩平次より申されたる通りに相違ないか、ム、相違の點があれば申開きをするが宜い、萬一覺えありとすれば、武士は武士らしく速かに白狀に及び、お上の御手數を省くが宜い、サア返答に及べい』七『ハ、ッ恐れながら申上げます、決して私共は左様な惡事をいたした覺えは、毛頭ございませぬ』長『ウーム・・・・しからば何故あつて、左様な怪しゝ風體で人里離れた一軒家へ參つたのだ、豈夫金銀財寶に眼を眩れるといふやうな宅でもあるまい、何ういふ理由で參つたのだ』七『如何にも不肖ながら太守へ對し、御指南をいたして七百五十石を頂戴して居る太田七郎左衛門でござる、決して窃盗をいたすやうな淺猿しい心を持つものでござらぬ、實は二日のことでございましたか、彼の一軒茶屋へ休息をいたした、そのまゝ宿所へ立歸り不圖心附きまするとと拙者の財布がございませぬ、さては彼の茶屋へ忘れて來たかと、その財布を取還しに參つたのでございます』長『成程、しからばその財布を取還しに參つたのであれば、何故裏と表へ人數を分けて這入つたのだ』七『それは表を叩きましたが、起きて呉れないから裏手へ廻つたのでございます』長『その答辯は曖昧であらう、さういふ譯であれは、何故表へ一人殘して置いた』七『何分金錢のことでございますから、萬一心得違ひが出

來て、表へ飛び出すやうなこともあつてはならんと思ひましたから、一人丈は表に張番をさして置いた譯でございます』長『ム、・・・・それはそれとして置かうが、其方の泊つて居る宿から、右の一軒茶屋まで道程は何程ある』七『エ、ッ・・・』長『僅かの道程ではないか、その僅かの道程である一軒茶屋へ參るのに、何故覆面頭巾をいたし足裝束までいたし、草鞋穿きで參つたのだ、サア此の儀はどうぢや、ウム遠い道といふではない、甚だ怪しむべきことだ』七『ハ、ッ・・・』七『サア返答は何うぢや、速かに答辯を致せッ』と威丈高になつてグッと睨め附けました。

（第拾六席）七郎右衛門六造と合拷問を願ふ事、幷にピン小僧丑松改心駈込み訴への事

七郎左衛門は恐れ入つた體で 七『ハ、ッ、恐れながらこれは斯様でございます、何分夜半に私事の爲めに通行いたしますのに、家中の武士と見せては、太守へ對して甚だ恐れ入る事と御遠慮仕りまして卽ち斯る風體に裝束浪人者のやうに見せたので、私共は人を殺したの、または印籠を窃ませたといふことは、決して覺えはございませぬ』長『ム、然らば證人を對面さすが、夫でも其方答辯があるか』七『これは又證人なぞ・・・アハ、、アイヤ何人かは存じま

せぬが、此處へ御呼び出しを願ひませう』といつたもの丶側に六造が居るのは、疾うから承知いたして居ります、此方は仙石長左衞門が、更に六造に向はれまして　長『コラ六造とやら速かに前へ出よ』六『へイ〳〵』長『其方此處において七郎左衞門に申して宜からう』六『へイ有難う存じます……モシ太田の旦那、貴方は能くも私を酷い目にお遇はせなさいましたな、アモシ旦那……私を知つて御出でございますか、これこの通り不具に成りましたよ、眞個にお前さんは……』と平素の怨みを充分に申したいは山々でございますが、餘り殘念な……口惜いといふ感情が胸に押しせまつて、その顏を見ると十分の一も申されませぬ、只先き立つものは怨の涙ばかり、拳を固めて七郎左衞門の顏を睨み詰めて居ります、豫て期したる七郎左衞門は　七『やア誰かと思へば汝は六造ではないか』六『旦那その六造でございます、貴方御一人が出世しやうと、多勢のものを大變い目にお遇はしなすつたな』七『默れッ……おのれこそ乃公を酷い目に遇はしたぞ』六『何で私が旦那を酷い目に遇はせました』七『ヤア、今更何事を申すのだ、汝こそ拙者の金子三百兩といふのを盜み出して逃亡いたしたではないか、今日に至つて、その盜み取つた三百兩の金子を使ひ果し、故郷忘れ難しと歸つて來たが、何分良心に責められ拙者が居つては不安心であるといふ所から、俄か出世の斑鳩平次と申し合はして、忠義無類なる拙者を曲者と申立て、この太田七郎左衞門を自滅させん考へだナ、汝

ごとき奴が幾ら佞辯を揮つて鷺を烏といひ紛らさうとも、天道は正を好んで邪を惡み給ふ、さる淺墓な計略を以て、この七郎左衞門を自滅させようとは笑止千萬、エ、大目附へ申上げます』と七郎左衞門はグイと、六造を睨み付け　七『この六造といふ奴は、以前拙者の屋敷に使ひました仲間でございますが、大膽にも拙者の金子三百兩を盜み出し、逐電いたした者でございます、その後密々行方を搜索致しましたが、何處へ隱れましたか一向行方が分りませぬで、その儘放任つて置きましたが、遂にはその金子を使ひまして、已むを得ず故郷へ立歸りましたもの丶、拙者が居つては往來も心安く出來ないといふところから、斯る不實の申立をいたしたものと相見ます、何分宜しく御賢察の程を願ひまする』長『ウーム……コリヤ六造其方は主人の金子三百兩を盜み取つたか、何うだ速かに返答に及べい』六『モーシお役人さま恐れながら申上げます、私は決して左樣な覺えはございませぬ、殊に仲間をいたすくらゐの者が、なか〳〵三百兩と五百兩といふやうな大金を見たこともございませぬ、殊に何處のお屋敷だつて、仲間の眼に知れる樣な處へ、大金をお置きなさらう道理もございませぬ、その邊のところも宜しくお察しを願ひ上げます』長『ウーム……イヤそれも爾うだ、けれども、そのびん小僧の丑松といふ者が居れば、何もいふことはないが何うだ、その丑松といふ者は當時何處に居るか、其方には分らぬか』六『ヘイ其點でございます、何分彼の餓鬼は掏摸や窃盜

をいたす奴で、何處に居るといふ當もございませんから、當時何處に居りますか確と行方が分りませぬ、今日は此處に居るかと思へば明日は何處に參るか分らぬ奴でございますので』

長『何うも困つたものだ』と思案の體に平次正盛、早川團平、秋山良助、城戸武助を始め、平助お喜代に至るまで心の中で『アーア困つたものだ、殘念なることである、證據人たるびん小僧が居らねばこれも仕樣がないが、現在惡事をしたものが佞辯をもつていひ紛らすとは口惜しき次第である』と、皆々は無念の拳を握り詰め、アーアと嘆息をいたして居りますと素より佞奸邪智に長けたる七郎左衛門早くも皆々が心配をいたす狀況を眺め、宛も心地快げに體裁を見ろとはいはぬ許り、仙石長左衛門に向ひまして

七『エ、恐れながら申上げます、私の申すことにお疑ひがございますれば、彼が嘘を申しますか、私が實を申上げますか、この場において相拷問にお掛け下されませ、左すればことの虛實が相分ります、彼が如何に虛を實と申上げましようとも、拷問に掛れば白狀をいたすでございませう、また實際のことでございますれば、白狀をいたさう道理がございませぬから、この儀願ひ上げまする』と言上に及びました、と申しまするは七郎左衛門の心では、いま此處で互拷問を願へば六造は病後の身體、痩せ衰へて居りまするから、一ッ打たれたら生命を落すは必定、おのれの壯健の身體豈夫彼に負ける氣遣ひはない、さすれば憂の種を除く道理、到底この場を巧くいひ紛らすと

も、六造が居つては將來安心が出來ぬ、この場で自滅さしてやらうといふ考へから相拷問を願つたので、昔は何うも無理なお話で、詰り弱い者酷めといふやうな譯で、餘り苦しいといふと、知らぬことでも斯ういふ苦痛を見る程なら、寧そ死んだ方が優だと、ツイ覺えのないことを白狀いたして、無實の刑に處せられ、惡人が却つて蔓るといふやうな偏頗な裁判が澤山ございましたが、其點は文明の餘澤は有難いもので、當今は假令私が殺しました……盜みましたと申しましても、證據が具備いたして居りませぬと、罪人となるといふ譯には參りませぬ、餘事は扨て措きまして太田七郎左衛門は、相拷問を願ひ出ましたので、平次正盛を首め一同の者は互に顏を見合はせて、何うも七郎左衛門といふ奴はなか〳〵惡事に長けた奴である、到底相拷問となつたら六造の生命があるものでない、こいつア困つたことになつたと心痛いたして居ります、仙石長左衛門においても、何しろびん小僧の丑松が居らぬので、これといふ確な證據もなし、相拷問を願ひ出た以上は許さぬといふ譯にも參りませず、致方がないところから

長『コリャ六造、相拷問の儀、太田七郎左衛門から願ひ出たが、其方に於ても苦しうないか』と云はれてハッと顏の色を變へました六造

六『アヽモシお待ち下さいませこの病人の身體で相拷問に掛りましたなら、先方は壯健の身體、到底私の生命は堪りませぬ何うかこの儀はお察しの程を願ひ上げます』

七『ソーレ御覽下さいませ、彼が斯く避けやうと

致しまするのは、即ち無實の言を申上げる證據でございます、何卒相拷問の儀、是非に願はしう存じまする』と弱味に附け込む風の神、七郎左衛門は此處だと熱心に相拷問を願つて居りまする、かうなりまするとと一同のものが大心配、殊に六造は涙をバラ〳〵溢しまして六『アア此樣なことであつたら、云ひ出すのではなかつた、兄貴も兄貴だ、眞個に酷いぢやないか乃公がこの痩せた身體で、ビユ〳〵打たれて堪るものか、何うして生命があるものぢやない』と、今更愚痴を溢して、平助の顏を恨めしげに眺めて居ります、平助とても殘念で堪りませぬ、アーア眞個にかうなるのであつたら、斑鳩の旦那へ話をするのではなかつた、旦那も旦那ぢやアないか、何とかして呉さうなものだ、流石は百姓丈けでございまして平次正盛を恨んで居るといふ有樣、平次を首め早川、秋山、城戸の四人も口惜さに、ウーンと迂鳴つて居りまする、斯る處へ出て來ました一人の料理人、此の人は何者でございませうや、即ち本件の有力なる證據人びん小僧の丑松でございます、何故丑松がこの場へ折好くも出て來たかと申しますると、お話は以前へ復りまするが、丑松が勝田忠左衛門の印籠を首尾好く盜み取りまして、太田七郎左衛門に二十五兩で買つて貰ひ、尙ほ五兩の褒美金都合三十兩の金子を以て、その中幾らか六藏に遣りまして、殘金を懷中におさめ奥州を後にして江戸表へフラ〳〵歩つて參りましたが、何しろ斯ういふ家業をいたす奴でございますから、僅か二十五兩內外

の金子が爾う何日までもあらう道理がございませぬ、また以前の杢阿彌となりましたところから丑『ア、困つた、最う金子はなくなつてしまふ、エッ何うなるものか、また美味い仕事もあるだらうと、長光寺の堤をブラ〳〵思案しながら歩つて參りまするとと、折柄前面の方より出て來ました一人の侍、風體もなか〳〵立派でございまして、腰に帶したる大劍の小柄、全部黃金と赤銅の造へ、何うもなか〳〵大した品でございます、これに眼を着けたびん小僧の丑松は心の中で『ア、何うも武士の小柄は立派な物だ、こいつア捨賣にしても五十兩の價値はブラついて居る、何うかして一つ奪りたいものだ』と衝々と侍の側へ參りまして小腰を屈め丑『エ、旦那さま、一寸とお尋をいたします』とお辭儀をいたして居りまするから、件の侍も停止りまして侍『誰だ、何事の尋ねである』丑『何うも濟みませぬが、私はその何で淺草北島町の紙問屋、小西屋淸兵衛の番頭で直七と申す者でございまするが、此の度若旦那が御養子にお出でになりますに就て、お手道具萬端大概殘らず買ひ整へましたが、一つまだ思はしいのがございませとぬ申しまするは日和傘でございます、ヘイ〳〵その旦那のお持ちになつて居りまするお傘は、何うも私の眼から見ましても大層立派でございます、其品は何店でお求めになりましたか、甚だ恐れ入りまするがお敎へを願ひたうございます』と眞實しやかに申しました、何うも人間といふものは、自分の持つて居る品を賞られまするとと心嬉しい

ものでございまして、何となく鼻が隆うなります、で件の侍もニッコリ笑を催しまして侍『ムムこの傘か、こりやアその北門前の傘重といふ店で求めたのだ』丑『ハイ〳〵有難う存じます る、してそのお傘の骨は百五十本骨でございまするか』侍『サアこの骨は幾らあるか、まだ數へて見たこともないが、爾うだ幾らあるかな』と侍は骨を見やうと上へ計り氣を注けて居ります、その際を見たびん小僧突然小柄を奪りまして、素知らぬ顔をいたし 丑『エ、幾ら骨がございませう』侍『爾うさなあ、待て〳〵……エ、、爾うだ、矢張り其方が申した通り、凡そ百五十本計りあるだらう』丑『ヘイ〳〵何うも大きに有難うございました、御足を停めまして恐れ入りまする』と今しも面前へ行かうとするやつを、件の侍が 侍『ア、コリヤ〳〵直七とやら待て〳〵』丑『ヘイ何か御用で……』侍『イヤ餘の儀でもないが、拙者の小柄を何處へ持つて參る』といはれて驚くびん小僧『ヤイ〳〵知らぬと思つてゐたが、何うもえらい奴に出會したものだ』と思ひながら、流石惡黨だけに逃げもせず、底氣味惡く立返りまして彼の侍の前へ小腰を屈め 丑『甚だ相濟みませぬ、何うか御勘辨を願ひ上げます』と例の小柄を片手に捧げ出しました、侍は小柄を受取りながら 武『エッ呆痴者奴が、汝等ごときに我が魂に付いて居る小柄を奪られて武士の面皮が何處で立つ、甚だ横着千萬なる奴だ』とグイとびん小僧の首筋を掴み、ハッと驚く丑松を手前へ引寄せた、侍『サア、おのれのやうな奴を活かして置

けば、定めて町人百姓が迷惑いたすであらう、依つて只今斬棄てるから覺悟に及べい』と例の小柄で、ビシャーリ骨筋を打ちましたから、びん小僧はヒャリッと首を縮め『アーア乃公も斯うなつたら、年貢の納め時だ』と覺悟ばしながらも其處が凡夫の淺猿しさ、何うかして生命が助かりたい、最う少し生延びたいと惡い奴ながら、一心に金比羅さんを頼み出しました、能くいつてござります通り、平素信心のない者でも、さて病氣が苦しいとか、乃公困難の場合に出會ひますると、心にもない神や佛を祈るもので、支那のチャン〳〵先生が、疾痛父母を呼び、困苦天に訴ふるやうな道理で、丑松も心の中で何うか金比羅大權現さま、命ばかりは助かりまするやうお願ひ申しまする、その代り生命が助かりましたれば、盜賊根生は全然と改心をいたします、何うぞ私の生命が助かりまするやうにと、一心に願つて居りますること、妙なもので信あれば德あり、鰯の頭も信心がらとも申しまして、神さまは廣大無邊、此樣な惡い奴の願ひでも改心をするといふからは、助けて遣らうと思召しましたか、不思議なるかな彼の侍は如何に思ひけん、持つたる小柄を鞘に納め、首筋掴んだ手を放しまして侍『イヤ能く〳〵考へて見ると、汝のやうな犬畜生同然なる奴を、殺すは我が小柄の汚れであるによつて、今回は免して遣はす、だが其後改心をいたさぬによつては、屹度拙者が其方の生命を貰ひ受けるから左樣心得い……宜いか』といふなり横ッ面を嫌といふほど扇子で擲附けま

した、此方は丑松がアッといひながら横面を押へ其儘其處を逃げ出しましたが、凡そ十町許りも走つたかと思ふ時に、不圖停止り後方を回顧つて　丑『ア、危險々々、危機のことに生命を取られるところだつた、眞個にヒヤリッとした……だが待て〳〵、何うも酷い目に逢はしやがつたなア、小柄の汚れた生命は助けて遣るッ……何うも讃岐の金比羅さまは尊崇ものだなか〳〵御利益が恐しいなア、到底生命のない處を、彼の侍がガラリッと助けて呉れたといふのも、金比羅さまの御利益だぞ、アーアこれを思ふと惡いことは出來ねえや、このくらゐ惡事を重ねた丑松が、お願ひ申しても御利益を下されるからは、善心に立歸つて一心に御信仰をしたら何程の御利益があるかも知れねえ、アーア惡いことは最う眞個に廢してしまはうこの上惡いことをしたら一度限り、スバーリキユーだ、金比羅さまがお免しはねえや』と流石は惡に強き者は善にも強しで此所で全然と改心を致すやうの心になりましたが、さて斯うなると資金はなし、家は勿論身體の他には何物とてもござりませぬから　丑『サア困つたぞ、改心をするとしたところが、何うして糊口をいたしたものか知ら……オ、爾うぢや、淺草に留公が居る筈だが……エ、何とか云ふ料理屋だと……分つた彼奴の處へ行つて一ッ料理人にして貰はう』とスタ〳〵丑松が淺草を指して飛出しまして、彼方此方と尋ねた上漸つと留吉といふ料理人の朋友を訪ねまして、今までの事柄から改心をした一伍一什を物語りまして、

何うか一人前の料理人にして欲しいと、頻りに賴み込みました、勿論この留吉といふのは、同じ仙臺の者で幼い時の朋友でございます、そこで丑松の惡黨は知つて居りますから、なかなか一應や二應では聽容れませぬ、そいつを再三再四賴み込むものでございますから、留吉もそれぢやアいよ〳〵改心をしたのかと思ひまして、去る料理店へ奉公に住込ました、すると改心をしたびん小僧の丑松、一生懸命に修業を致しまするし、殊に惡い奴丈けに才智が利きますので、一年前から住込んで居る者よりもズウと上の技倆となりました　丑『ア、これといふも金比羅さまのお蔭、侍のお蔭だ、惡い事をして僅かのことに心を恐懼するよりも、斯うして居れは眞個に心が清爽すらア』と尙も一心に勉强をいたして居りましたが、最う今日は田舍の料理店へでも行けば、一人前の給料は取れるやうになりました、ところが今回は鹽釜へ、伊達陸奥守の御參詣でございますので、江戸へ料理人を雇ひに參りましたので、その時此丑松も一緒に出て來たのでございます、ところが今しも料理の隙間でございますから、何心なく丑松もブラ〳〵と出て來ますとお庭の方でアーア丑松が居りさへすりやア、此樣なことにもなるまいにと、頻りに述懷をいふ聲がいたしますから　丑『オヤ〳〵丑松が出て呉れればよいやなんて云てやアがらア……待て〳〵』と偶爾と隙間から覗ると、左側に控へて涙をハラ〳〵溢して、宛も怨めしさうにして居るは紛ふ方なき六造でございますから丑『ヤッ：

……彼人ア六造だぞ、ハテナ……眼を何うかして居るのか知ら……』とまたもや覗いて丑『いよ〳〵六造に違へねえ、野郎何だつて此樣な處へ來て居やアがるのだらう、しかし何うも痩せやアがつたな、全然昔の俤はねえや、ヤア、人間と云ふものは、斯うも僅の間に變るものかなア、眞箇に可哀想なものだ、待てヨ涙を出して居やアがるナ、オヤ〳〵澤山居らア……オヤア……こいつア妙だぞ、太田の野郎も居るぞ、ハテナ……何うも理由が分らねえなア、野郎乃公に勝田の旦那の印籠を盗ませやアがつて、三十兩といふ金子を呉れたが、何でも夫れから出世したといふことは聞いて居たが、縄に掛

居るとは分らねえなア……斯うと惡事露現といふやうなことかも知れねえ』と丑松が頻りに覗いて居りまするとと、此方では夫れとも知らぬ太田七郎左衛門が七『サア相拷問を願ひます拙者は決して印籠を盗みましたの、坂田與市を殺害したといふやうな、惡事をいたした覺えはござらぬ』先方の弱味に乘け込んで、頻りに相拷問を願つて居ります、これを聞いたびん小僧の丑松丑『ヤア惡事露現だナ、其れに何だ、びん小僧に印籠を盗ました覺えはない、フン笑はしやアがらア、能くも其樣なことを吐しやアがる、しかも三月三日のお節句の晩だ彼の六造から乃公に賴んで、勝田の旦那が御城内からのお歸途、大手枡形で乃公が仲間の風體に化けて、印籠を盗んで太田の野郎に渡したら、戒さんが鯛でも釣つたやうに、ニコ〳〵笑ひやアがつて、手文庫の内から二十五兩出して呉れ、剩さへ五兩の褒美まで出して置きながら、へゝン印籠を盗ました覺えがない、エッ人を馬鹿にして居やアがる、ハゝアこれで分つた、さてはそのために、六造の野郎涙を出して泣いて居やアがるのだわい、待て〳〵一ッ改心をした驗に、乃公が御免と名乘つて出りやア生きた證據人、これより確乎なものはねえや、直樣白黑が分ること、乃公だつて金比羅さまの御利益を受けながら、まだ一枚の繪馬を上げないのだ、惡い奴が證據がないので威張つて、正しい人間が困つて居るとすれば、こいつを助けて遣りやア一枚の繪馬を金比羅さまへ上げるよりか、遙かにお悦びになるだらう、

ヨシびん小僧が改心の驗だ、一つ名乗つて出て遣らう』と心の決した丑松が　丑『ヘイ眞平御免なすつて下さいませ』と出やうとするから、役人が　○『コリヤ〳〵何處へ通るのだ、其方は何者だ、控へ居らう』丑『ヘイ〳〵馬鹿にしなさんな、惡い奴が威張りやアがつて、證據がねえので正しい人が困つて居まさア、愚圖々々いふにやア及ばねえ、乃公が出りやア直に邪正が分ることです、お上樣だつて爾うでせう、早く黑白を分けて、惡人を懲し善人を助けるのがお職業でせう、それで乃公が通るのでがす、餘計なことをいふものぢやアありませぬ』と勢ひ好く這入らうといたしますから　○『オーイ〳〵待て、夫りやア其方のいふ通りだけれど、お掟といふ物があるから、其樣なに無暗に通る譯には行かぬ、すると何か、其方がびん小僧の丑松か』丑『ヘイそのびんでございます、何うか一寸も早くお取次を願ひたい、一寸遲くなりますと、正しい人間に一寸も苦勞を增させる道理ですから、ヘイ〳〵』○『コレ承知をいたした、暫らく待つて居れ』と役人がバラ〳〵ッと出ました　○『只今その證據人たる、丑松といふものが斯樣々々と、申して居りまするが、如何取計ひませう』と聞くと仙石長左衞門、片倉小十郎どのを首め平次正盛、早川、秋山、城戸は申すに及ばず六造、平助お喜代の喜びは何うも大したものでございます、それに引代へ此方の伊達彈正、太田七郎左衞門其他門弟の者共は、何となく心配いたして居ります、此方は仙石長左衞門が　長『ウーム然らば、

その丑松とやらは此處へ入れまするやう』○『心得ました』と役人は出て來まして　○『ア、コリヤ丑松此處へ來い』丑『ヘエ〳〵、有難うございます』と庭前へ通りました丑松、大地へ兩手を突かへ頭を低げて居りましたが、突然六造の方へ向いて　丑『オイ六造兄弟、最う乃公が出たからにやア、決して心配するぢやアねえ、大船へ乘つた氣で居るが宜いや・・・フ、ン今に見ろ・・・』と太田の顏をグイと睨み附けました　長『アコリヤ其方、許しなく言葉を替すことは出來ない、控えて居れ』丑『ヘーイ』長『其方がびん小僧の丑松と申すか』丑『ヘイ丑松でございます、私も今までは惡事に掛けちやア兄哥々々と尊てられまして、巾着切りから引つ浚へ、詰りが强盗追剝までなりました、勿論斯ういう惡黨でございますから、三度の食事は盛粒飯で遠島船、腰附きで結局何の途この身躰では、裸馬へ逆乘り紙幟を前に立て、拔身の槍を左右へ列べ、拷問臺を枕にしやうと覺悟は決めて居りましたが、腐つた魂も少しは掛りがございましたが、不圖したことから、今じやア全然改心を致しまして、賊の心を廢めてしまい、眞人間に立返つたのでございます、ヘイしかしお役人樣へ申上げます、もうお尋ねには及びませぬ、何れ印籠の一件と思ひまするが、これは斯うなのでございます、忘れも致しませぬが、この六造が以前此所にござる太田の旦那の許で仲間奉公をいたして居りまして、一日乃公に六造が申しまするには、太田の旦那から勝田の旦那の所持の品物を何んでもよいか

ら窃んで呉れといふお頼み、乃公は博奕はするがまだ盗賊したことがないから、何うか汝一つ行つて呉れないか、褒美は屹度出るからと申しますので、勿論乃公の稼業は金子になることならと早速承引まして、へイ〳〵三月三日お節句の日でございました、私が仲間體に粧ひまして、勝田の旦那が御城内からの御歸途、追手桝形の處で巧く印籠を掏りましたに相違ありません』と潔よく白狀する。

（第拾七席）七郎左衞門びん小僧と合拷問の事、幷に萩の戸姉弟

遂に平次を尋ね來る事

びん小僧の丑松は言葉をついで丑『その印籠を持つて太田の旦那へお目に掛り、斯様々々でございまするとと印籠を渡しましたら、太田の旦那が大層悦びなすつて、ヤア此品は思ふたよりも結構な品物だ、太守さまから頂戴した大切の印籠、これさへありやア大丈夫と仰しやいまして、早速手文庫から二十五兩と別に褒美だといつて五兩、都合三十兩下さいました、そして私は一寸と樂が出來ると奥州を後にして江戸表へブラ〳〵遊びに出掛けましたが、旦那惡錢身に着かずとは此處でございませう、瞬くうちにその金子を使ひ果し、仕様のねえところから長光寺の堤で侍の小柄を掏りましたのが抑も私の改心の梯子でございます、首んよく

知れないやうに奪つたと思つたやつが反對と來て、その侍に既に生命を取られる所を、金比羅さまへお願ひ申したその御利益は恐ろしいもので圖らずもない生命を助かりました、へイ〳〵それから全然と改心を致しまして、今ぢやア御覽の通り料理人となりましたが、今回お太守さまが鹽釜さまへ御參詣、料理人が足らないといふので江戸へ雇に參りましたから私もその仲間へ這入つて此方へ參りましたのでございます、すると一寸と仕事の隙間がございましたから、ブラ〳〵其處まで參りますとびん小僧、證據人……といふやうな聲が聞えますから、ハテナと思ひまして隙間から覗いて見ますると

六造が困つて居る樣子、こいつア太田が惡事をしながら證據人がないといふので威張つてゐると思ひましたので、今こそ改心の驗を見せる所だ、それが金比羅さまへのお禮と思ひまして出て來た譯でござります、斯ういふ譯で他のことは存じませぬが、印籠の一件ならヘイヘイ私が生きた證據人で、これより確乎なことはござりませぬ……モシ太田の旦那……イヤサ七郎左衞門、最う斯うなつちやア是非がねえよ、武士は武士らしくサッパリ云つておしまひなさい、惡は善に近しといつてね、最う運の末と思つたら早く斷念るが肝心で、さあ云つてしまひなせえ、エ、惡いことを云はねえや、サア早く白狀しなせえ、お前さんが六造に賴んで、乃公に印籠を取らして二十五兩に買つた上、五兩の褒美までお呉んなすつたぢやあねえか、コウ太田の旦那、何んだつて武士らしくもねえ、惡圖々々してるんだい』言語道斷に罵られて、太田七郎左衞門は怒れる眼をクワッと見開き 太『ヤア汝等は何だナ、拙者の出世を憎んで、俄か侍の平次とやちと心を合はせ自滅をさせやうと拙者に惡名を塗け、彼々來れば斯うする、かう來れば彼すると、チャンと準備をいたして、何處までも奸智に長けたる儕輩であるわい、コリヤ天道は正しきを照し給ふ、さる淺墓なる考へで、忠義無二なる七郎左衞門を自滅させやうと思つても叶はず仕遂げることは出來まい』と大喝一聲怒鳴り附けました、他の者なら驚きもいたしませうが、何しろ惡事に掛けては大膽なるびん小僧、驚悖とも

せずにニッコと笑み 丑『何を吐しやアがるんだい、難かしい其樣な講釋染みたことは廢しねえ、幾らお前さんが眼を剝出したつて、それに驚く丑松たア違ひやすヨ、江戸や大阪の檜舞臺で、ハッタと睨む俳優なら最う些つと感も起りませうが、お前さんぢや貫目がねえや、そりやア其樣なことは昔のこと、かうなつちやア何んにも効力はごせいやせぬヨ、お臍が聞いて茶を沸しやさア、フ、ン面白くもねえ、ハ、ア何んだかお前さんが、先刻から相拷問々々と仰しやつたが、こりやア何んですナ、何うもお前さんは、なか〳〵奸智に長けて居なさる、俺の考へぢやお前さんは壯健な身體、一方の六造はお前さん故に、今ぢやア痩せ衰へて見る影もねえ不具者、相拷問に掛つたらおのれさへ辛抱をしたら、その中に六造は死んでしまふ、さすりやアおのれの手で殺して、却つて將來が安心だと兩方旨い計略だナ、イヤハヤ何うもお前さんの考へは、貼紙の篩でもりめがねえといふやつだ、このびん小僧も惡事に掛けちやア失敗を取つたことはごせえやせぬが、お前さんにや、一番兜を脱ぎました、だがね最う此處へこの丑松が出ちやア、お前さんが幾ら鷺を鴉といひ紛らさうとも、そいつア最う無益だ、さあ宜しい、お前さんの望み通り乃公が嘘をいふか、お前さんが眞實を仰しやるか、一番此處で乃公が相手になつて、相拷問を願ひませう、アーア拷問に掛るも久振だ、何んだかこのごろは關節が痛むやうでならねえ、恰ど按摩の代りに一ッ拷問に掛つて見やうかね・

：エ、お役人さまへ申し上げます、前刻から太田の旦那が相拷問が願ひたいと、頻りにお願ひ申して居りましたから、この丑松が申し上げる事が嘘か、また太田のいふことが眞實か、相拷問にお掛け下さいますれば直に分ることでございますから何うか相拷問の儀を宜しうお願ひ申しまする』長『ウーム道理の願ひである、アヽコリヤ七郎左衛門、只今聞く通り丑松から拷問の儀を申出したが、其方は何うぢや、定めて望みのことであるから苦情はあるまいのう』といはれて太田七郎左衛門は心の中で『アッ失策つたわい』此樣なことになるのなら、相拷問といふのではなかつた、何うも大變なことになつて來た、といつて苦情をいふ譯にも行かず、拷問に掛けては何しろ丑松奴は、度々のことで慣れて居やアがるだらうし、殊に壯健の身體、到底乃公が勝つといふ譯には行かない、こりやア何うも閉口だと思ひましたが、さて如何とも仕方がございませぬから七『ウム：：ハイ如何にも承知を仕りました』長『ムヽ承知とあれば：：コリヤ〳〵拷問の準備に及べい』○『ハヽッ』と應へて下役人が、それぞれ拷問の準備に及びました、するとびん小僧の丑松はグル〳〵と丸裸體と相成り、その場へ堂と座り込みまして丑松『エヽ、何うか可成手酷くお願ひ申します』と泰然自若と構へて居りまして、役人が双方へ兩人宛參りまして、後手に縛りました上、後に二尺許りの棒杭がございます、その中央に鐶がございまして、その鐶へ縄尻を帶めグイと結んでしまひました、斯うしま

せぬと痛い：：苦しいところから動いて、狡猾奴になりますと横ッ腹を打たれやうといたします、横腹でも打つたらそれこそ一息に死んでしまひますので、役人は遠慮をいたすといふ工合、そこで斯く動けないやうに、鐶に結び附けてあるのでございます、双方から役人がしばきといふ品で、ハッフッハッ、フッと掛聲をいたして交る〳〵に打つたのでございます、そのしばきといふ品は、竹の尖を細く割りましたもので、それがハッフッハッフッと打ち下ろす度に、ピユー〳〵と迂鳴を生じて、尖の細いところが罪人の尻に捲き着きますから、何うも堪つたものではございませぬ、痛いの痛くないのつて紫色に變つて來る、血汐が流れ出る、結局には柘榴のやうに肉が現はれて來るといふ、何うも側で見て居られる譯のものではございませぬ、丑松は度々拷問に慣れて居りますから、打たれるごとに丑『痛い〳〵：：痛い痛い〳〵』と叫んで居りましたが段々と叩くに連れて『アヽ痛い：：痛いｉ』といつては、お尻で以て打下して來るやつを、ヒョイ〳〵と迎へに行きますから、しばきの細い捲き着くところは中りませぬ、中央から上がチョイ〳〵と當る許りでございますから、さまで痛くはございませぬ、斯ういふ呼吸を知つて頻りに痛い、痛い痛いとは叫んで居りますものゝこれは表面丈でございます、ところが此方は太田七郎左衛門は、さういふ呼吸は知りませぬから、例の細い捲き着くところで、ヒユー〳〵と打たれるので堪つたものでございませぬ、

瞬くうちに紫色に變つて來る、血汐が流れ出ると云ふ有樣で 七『ウム痛い……アア苦しい』ウム〳〵唸つて居りましたが最早堪へられなくなつたと見えまして、苦しき息をホツと吐き 七『ウームッお願ひがございます』とさも哀れに云ふ○『何事だ』七『何うか水を一口、お飲しなすつて下さいませ』長『ソレ水を與へい』○『ハッ』と應へて柄杓に水を汲みまして、今や七郎左衞門に飲ませやうといたすやつを、グイと尻目を睨んだびん小僧の丑松

丑『ア、イヤそいつァ不可ぬ』○『何故不可ぬ』丑『何故と仰しやりますが、能くお考へを願ひます、これは相拷問でございますから、私も水を飲むといふなら、先

方も水を飲むのは宜しうございますが、私は水は要りませぬ、だから相手ばかりに水を飲ましては、相拷問に相成りますまい』○『ム、成程……』といふ處から水を與へませぬ、またもやビユー〳〵と打下して參りますので、太田七郎左衞門は最う肉が柘榴のごとく現はれて來まして、虫の息かと思ふ計かりウム〳〵と苦しんで居りましたが、漸くに思ひ決したるものと見えまして 七『ア、申上げます』○『サア早く申せ』七『如何にも勝田の印籠は、びん小僧に奪らしたに相違ございませぬ、また名取川の堤で坂田與市を殺害いたし、その罪を忠左衞門に被せたも、皆私の仕事でございます』と遂々舊惡を殘らず白狀に及びましたから、平次の悅びは申すに及ばず、早川、秋山、城戸を首め百姓平助、六造お喜代一統の喜悅、到底私共の申す得られぬくらい、此處に愁眉を開くことに相成りまして、いよ〳〵明日は坂田與之助母の喜代の兩人に、親父良人の仇討をさせやうといふことになりまして、平次正盛は明る日遲しと相待つて居りましたが、さて恰どその日も夜半でもあらうかと思ふ時刻、皆々はグウ〳〵といふ白河夜船の高鼾、不思議や本陣の裏手に當つてバチ〳〵といふ音響に眼を覺した家中の侍共○『ハテナ山中氏、何だかバチ〳〵といふ音響がいたすやうでござる』山『如何にも佐伯氏の云はるゝ通り、怪しからぬ音響でござるのう』といふなり外の方へ出て見ますると、御本陣裏手の方から炎がバアと燃え上りました、サア驚いたは家中の面々、御本陣

が出火でござると大音に呼立てると同時に、ハヤ半鐘の音ヂヤン〳〵〳〵、これに皆々眼を覺して逸疾くも本陣へ駈け着けまする、此方は平次正盛、早川團平、秋山良助、城戸武助の四人がおなじく眼を覺まして平『ヤア各々御本陣が出火と相見える、太守の御身の上が大事早くお起きあれい』三『心得ました』と早速身輕の出裝をいたし、小刀は前半に大刀は脊中に連雀に負ひ、袴の裾を高く褰げ、四人の者は一散に本陣を指して飛着けました、太守は如何であらうかと、心痛しながら聞き合はして見ると、ハヤ太守におかせられては近習の侍と共にお避けになつて居りますから、四人はホッと一息いたして居ります、斯る中に消防夫も參りまして、漸つと鎭火に及びましたが、餘りの火事でもございません、ホンノ些細で濟みましたので、太守には早速御歸館となりました、そのうちに夜は明けて參りましたが、さて平次に於ては、早速鶴屋を指して參りました、太田七郎左衞門其他の惡人は如何でござるかと一室に來て見ると這はソモ如何に、餘程嚴重に繩付きにいたし、一室に押籠めてございましたのが、何處へ行つたか影も形もございませぬ、藻拔の殼と相成つて居りますから平『ヤツ何うも大變のことをいたした、折角此所まで仕上げたものを・・・』と地團駄踏んで口惜がり大の男が齒を嚙み鳴らし、無念の涙ハラ〳〵と四方を睨んで居ります處へ早川、秋山、城戸の三人も歸つて來まして、この體に打驚き『ヤア先生、何うも酷いことになりましたなア』

平『オ〳〵お三方か、實にこの上もない殘念千萬なことをいたした』三人『御道理で』とこれから四人のものが、家の周圍を檢べて見ますると、何者か放火をいたしてその騷動に乘じて七郎左衞門を救ひ出したと見え、裏の切戸が開いて居ります 團『ヤア先生此處から忍び込んで出したと見えます』平『ム、何うも困つた、併し早川、此處に何か證據物ともなるべき品を遺失してはござらぬか』團『サア』皆々が檢めて見ますると、一箇の財囊が遺失してございますから、中を調べて見ますると、金子といつては澤山はござりませぬが、名刺が四五枚入れてありますから、これを見ると廣田軍平と記してあります 平『ウン廣田軍平、さては太田七郎右衞門の屋敷へ、食客となつて居つた九州浪人廣田軍平、大河内團藏の兩人が御本陣へ放火をいたし、その騷動に紛れて七郎左衞門を助け出したか、己れ何處に隱れるとも搜し出さないで置く可きか』とこれから此事を太守へ殘らず言上に及びました、お聞取りになりました伊達陸奥守殿、滿面朱のごとくならせられ、兩の眼をクワッと見開き、額に靑筋を立て、餘程の御立腹でございます、元來此の陸奥守殿は性急なお方でございますから太『ム、憎みても餘りある奴である、假令伊達家六十餘萬石を潰そうとも大惡人たる七郎左衞門外二名の奴輩を召捕らいでならうや、ヤア〳〵臣等のもの宜きに執り計らへ』といふお言葉、皆々もハッと平伏に及んで居ります、併し御祈願の儀もござれば、兎も角これを濟ました上のこ

とにしやうと評議一決いたし、さて御新願も濟み守護札をお請に相成り、御本城に御歸館と相成りましたが、この太田七郎左衛門他二名の悪人の召捕役は誰に申附けたものであらうと重臣の面々が御相談に相成りましたが、さてこれといふ者も見當らないので、種々と選定に苦しんで居ります、太守よりは一日も早くいたせと御催促、重臣方も兎や角と心配に及んで居りました、さて此處は斑鳩平次正盛でございます、我が屋敷へ歸りまして、右の三人と共にこれまた評定をいたして居ります、ところが或日のことでございましたが、平次正盛は奥の一室で頻りに七郎左衛門捕縛の手段に工夫を凝らして居りまする處へ、玄關へ來ました一人の女中、年齢のころは十八九歳、誠に何うもその綴縹といつたら雲間をいづる月の風情と申しませうかなか〳〵の美婦人でございます、何か心配事があるか何處となく憂を帶びて居る樣子、これがまた一層の愛嬌を添へて、恰ど雨に惱める海棠の花かとも思はれます、身には一寸した絹物を纏ひ、甲斐絹の脚袢に同じ手甲、足には甲斐草履をはきまして片手に菅笠を持ち、片手には十三四歳の男の子を連れまして玄「ハイ御免なさいまし……お願ひ申しまする」と聲を掛けましたから、奥から出て參りましたるは例の民藏でございます、平次正盛が八百石の知行に出世しましたので、槻木から參りまして今では若侍となつて居るのでございます民「ドーレ」と玄關に出て來ましたが、此奴なか〳〵周章者でございますから、この

美婦人を見るなり眼をキョロ〳〵させ民「オヤ〳〵何うも途方もない別嬪だ、ハテナ……ハ、ア分つた、こりやア乃公とこの若旦那が、江戸へ行つてござるそのときに、彼如いふ男振も好し性質も好いので、この女郎が何だナ……何うか妻にして下さい、女房としやうといふような處から、二世は愚か三世も四世もと契つた変情に達ひねいわい」ところで若旦那は此方へ歸つてお出になると、飽かぬ別れも良人の爲めだといふ譯で、女は江戸へ殘つて居るが、當時旦那は八百石の御出世、それに何の音信もねえといふから、悠氣で歩つて來たのだナ、アハ、、大分面白くなつて來たぞ、エ、お女中お

待ち下さい、早速主人へ傳へますから』と……民藏おのれが勝手に臆測をいたしまして、何の爲めに何といふ人が來たか、其樣なことを聞かず獨り合點に奥の平次正盛の居室へガラガラバタ〳〵、と周章てながら出て來ました 民『ハイ若旦那へ申上げます』平『何だい民藏……

民『何だいなんて大層濟し込んでお居でになりますが、何うも貴郎も貴郎ぢやアございませぬか、餘り殺生です』平『オイ〳〵民藏、何を申すのだ、殺生なんて全體何ういたしたのぢやい』民『フ、ン眞個に濟まないのです、玄關で貴郎地團太踏んで泣いて居ります』平『誰が泣いて居る』民『誰がつて貴郎の胸に聞いて御覽なさいませ、夫りやア先方が憤るのも無理はありませぬ、あれ程固い約束をして置ながら、これ程までに出世をしてござるのに、手紙の一本も下さらぬとは男心と秋の空、變り易いとはいふものゝ、夫りやア餘りでございます、一時お別れするのも辛い悲しいと思ひましたが、これも貴郎の御立身を樂しみに、夫婦にならうと思つて辛抱を致しましたに、このくらゐ立身をして居らつしやりながら、お便りも下さらないとはア、お情けない……お恨めしうございます、この仙臺には神も佛もないことか、定めて打棄つてお置きなさるのは、他に良い娘が出來たのでございませう、戀しい殿御を仇人に奪られ、それで默つて居られませうか、この怨は生代り死代り、屹度女の一心を貫徹して見せます、昔松浦佐用姫は石になり、清姫は蛇になつた例しもある、おのれ……』平『コレ

全體其方は何をいつて居るのぢや、誰が其樣なに何を申して居る』民『阿呆らしい、誰だつて貴方女が斯ういつて憤つて居りますので……』平『馬鹿なことを申す奴だ、何といふ者が左樣に申して居る』民『何といふ者つて、その貴郎の奥さんでございます』平『コリヤ失禮なことを申すな、他の者は卒知らず、この平次正盛は左樣なことは決してないぞ、して何かその婦女は何處の何某と申す』民『爾うでございますなア、大方江戸の者でございませう』平『其方が取次だのではないか、夫れに江戸の者でございませうとは何事だ』民『けれども、まだ何處の者とも聞きませぬから……』平『ウーム、して何か只今女の怨み言を申したが、あれは當人から聞いて拙者へ申したのか』民『イエその何でございまする、大方さうだらうと、私が推察致しましたのでございます』平『何うも詰らぬことを申す奴だ、さういふ周章者だから困る、早く生國から名前、また用向の次第を聞いて來い、馬鹿者奴が……』と叱られて民藏は初めて我に返り、頭を掻きつゝ玄關へまたもや出て參りまして 民『ヤア何うも失禮を致しましたエ、貴方は何處の何といふお方でございます』と問はれて件の女中は最初は何事も聞かずに奥へ這入つてしまつたので、呆氣に取られ只だ茫然といたして居りましたが、女『ハイ私は京都から、はる〳〵參りました者で、何うか平次さまへ駒木根八右衞門の娘萩の戸が、訪ねて來たと仰しやつて下さいまし』民『ヘエ宜しうございます、一寸とお待ちなすつて……』と

平次の居室へ歩つて來まして　長『エ、京都の駒木根八右衛門の娘の萩の戸だといつて居ります』と、聞いた平次正盛は『さては我帥匠の兄御に當る、八右衛門先生のお娘御が見えたか』と早速出て來まして玄關の處へ兩手を突き　平『これは〳〵萩の戸さまでございますか、お珍らしうござる、一別以來如何お消光しなさるかと、平素心には掛けて居りましたが、ツイ〳〵私用に取紛れ御無沙汰勝に流れましたる段、平に御免を願ひまする、併し貴娘方御姉弟とも全體如何いたした譯で遙々この仙臺へお尋ね下されましたか、誰あらう京都御幸町において道場をお開きになつて居る、駒木根八右衛門友成ともいはる、大先生のお娘御なり御子息なりが、今日只今お二人お來でになるとは、さては先生の御身に異つた事でも出來ましたか、サア〳〵兎に角此方へ……』といふので民藏に湯を汲んで來させまして、兩人の者の足を洗はせ奥の一室へ通しました、姉弟兩人は漸つと安心をいたし、互ひに顔を見合はせてホロリ溢す嬉し涙、對座となりましてから平『サア如何なる事情でござるか、お話下し置かれたい』と問はれてまたもや涙の雨、萩の戸は袖にて涙を拂ひながら萩『エ、貴郎さまには、お障りもなく殊に大層御出世を遊ばし、何よりお芽出度う存じます、私共兩人が態々遠國の貴郎さまを便つて參りましたに就いては、定めし御不審もございませうが、これには種々悲しいお話がございますので……』と流石に女氣の最う堪らなくなつたか、ツッと許りに泣き伏して

しまひました、平『これはしたり　お嬢さん何故の御落涙、定めし深い事情がございませう、包まず お話なされい、及ばずながら平次正盛、屹度お力になりますから……エ、先生は如何なされました』萩『サアそのお父上が、現世にお居で遊ばすならば、失禮ながら姉弟二人が遙遙この遠國の、貴郎をお訪ねはいたしませぬ』平『ウーム、さては御病死でもなされましたか』萩『病氣で死なれましたのなら、また斷念も附きまするが、お父上には殘念にも、他人手に罹つて敢ない御最期……』とまたもや瀑なす涙の雨、聞く平次正盛も吃驚仰天　平『エーッ……何と仰しやる、夫れではあの大先生には、他人手に罹つてお果てなされしとや、してその殺した奴は何處の何人でございますか、早くお話下されい』と躙り出た　萩『その殺した奴といふは、九州の浪人大河内團藏、廣田軍平といふものでございます』平『ウーム……さては大河内團藏、廣田軍平の兩人でございつたか、ウーム今少し早かりせば、仇討はこの場で致さうもの』萩『エーッ何を仰しやいます、それなら私共が最う一足早く參りましたら、あの仇敵が討てたのでございましたか』平『如何にも實は斯樣でござる、その大河内、廣田と申す奴は近頃當地へ參り太田七郎左衛門といふ奴の處へ食客となつて居りましたが、先夜斯樣々々の次第で右の兩人が御本陣へ放火をいたし、殘念にも七郎左衛門を盜み出し何處へか姿を隱しましたので、太守においても非常に御立腹、只今その召捕役について御評議最中、併し御心

配下さるな、この平次正盛が承はりました上からは、屹度草を分けても搜索いたし、近いうちに仇敵は討たして上げまする』萩『お嬉しう存じまする、何分宜しうお願ひいたします』平『イヤ宜しい御安心下されい、マア〳〵兎も角疲勞もござらうから、緩くりとお休みなされい』と、これから御飯の準備をいたし、姉弟兩人も初めて安心をいたし、その儘寢むこと丶相成りましたが、此方の平次正盛は直ちに民藏を手許へ呼びまして平『民藏』民『ヘイ何か御用で……』平『氣の毒だが早川、秋山、城戸の處へ參つて、呼んで來て貰ひたい』民『承知いたしました』とその儘右の三人の屋敷へ駈着けましたが、暫くすると表の方へ出て來ましたは早川秋山、城戸の三人で御座います。

（第拾八席）　平次團平俠客風となり七郎左衞門召捕出立の事、幷に月山兼五郎平次に好意の事

早川、秋山、城戸の三人各々身輕の用意に及び、後鉢卷玉襷手に〳〵大身の鎗を引提げ、平次の玄關に駈着け大音聲、團『ヤア〳〵九州の浪人能く承はれ、我等こそ斑鳩平次正盛の高弟なり、師匠の敵覺悟に及べい、早く來つて勝負をいたせ』と呼はつて居りますから、驚いたは平次正盛、早速出て來まして平次『コレ〳〵貴公等は何といふ體裁で、何事を申して居らるゝのぢや』といはれて此方の三名も、眼許りパチ〳〵させながら團『オヤ〳〵、こりや何うしたのぢや、さては何だナ、他人手に罹つて無念といふところから、我々共へ敵討をして呉れいと賴まうと思ひ、魂魄現世へ迷つて出たか……』平『コリヤ〳〵何といふ馬鹿なことを申すのぢや、氣を靜めさつしやい』三『ヤア師匠貴方は生きてお出でになりますか』平『ハヽヽ、拙者まだ〳〵死なぬのだ』三『ヘエ……眞個に御無事でござりますか』平『眞個も虛僞もないではないか、この通りピン〳〵して居る、併し何故左樣なことを申さるゝのぢや』團『こいつア訝しい』平『何が訝しいのぢや』團『イヤ師匠實は斯樣でございます、只今民藏が慌章て參りまして、土足の儘座敷へ上り込み、ヤア大變なことぢや、大變々々と座敷中を走り廻つて居りますから、全體何ういたしたのぢやと尋ねると、殺された〳〵と吐鳴ります許り、そこで誰が殺されたと問ひまするとは實は九州の浪人が來やアがつて、金子を百兩貸せといふ、旦那は金子を貸されないから草鞋代として十兩進上いたすと仰しやると、浪人者奴が大層憤つて、金子の十兩や二十兩の目腐金を借りに來たのぢやアない、百兩の金子を出せい、イヤ出さぬと言爭つて居るうちに、浪人者が懷中から短銃を出して、ズトンと旦那を擊つたから、不意を擊たれたから其の場へキャツと打倒れたのみか、夫れを浪人者奴が足は足、手は手と膾のやうに切つてしまつた、サア大變々々早く敵を討つて呉れいと、またもや座敷中を走り廻りま

すので、斯様に準備をいたし三人が駈發けましたる次第でございまする』と息繼して物語りに及びました、平次正盛が、何とも言はず苦笑ひをいたして居りますので、三人は手持無沙汰の體 團『併し師匠マア〜貴方が御無事で、此樣な悦ばしいことはございませぬ』平次『ム、左樣か、何うも民藏といふ奴も困つたものでござる』と談話をいたして居る處へ民藏がニコニコ笑ひながら歸つて來ました 民『ヤア旦那、奴等三人は來ましたか……』平『來ましたかもないものだ、何といふことを申すのぢや、何うも仰々しいことをいつて、お三方へ相濟まぬではないか』民『ヘイ、だが旦那、元來が尻の重い三人でございますから、彼如云はないと出て來ませぬからなア……』平『何うも餘計なことをいふ奴だ、以後は慎むが宜い』と民藏を叱りまして、さて右の三人を一室へ通し 平『イヤ何うも御苦勞でござつた、貴公等お三方を招いたのは餘の儀でもござらぬ、實は拙者の師匠駒木根八兵衛のお兄上が、斯く〜云ふ始末で姉弟兩人が見えての頼み、憎むべきは大河内、廣田の兩人でござる、就ては拙者等の爲めにも是非我手に召捕らねばならぬ奴でござるから、幸ひ召捕役の評定中、この役を拙者に任して貰へるやう、貴公等から宜しく執成して貰ひたい』三人『イヤ宜しうございます』とこれから右早川、秋山、城戸の三人が此事を太守へ申上げました、陸奥守殿もハタと小膝をお打ちに相成り 太『イヤ夫れは幸である、予も頓と心注かなかつたが、平次正盛ならば大

丈夫、然ちば召捕役は、平次へ申附けるから、早速出立をいたすやう』といふ御意が下りました、先づお手當金として二百兩を下し置かれ、其他下役として汝の望む者を召連れいといふことで、平次正盛も大喜び二百兩の金子を頂戴に及びまして、早川團平を召連れることに相成り出立の準備に取掛りましたが、平次は團平に向ひまして 平『さて今度七郎左衛門を見附け出すには、侍の風では面白くない、よつて俠客風にならねばならないから左樣に準備いたして呉れ』團『委細心得ました』と兩人が正紺の腹掛四ツ井、米澤の額裏取つたる袷に、獨鈷の博多帶を締め、突掛草履を穿きまして、大劔の作は銀の胴輪に鐵角鍔の目貫は純金の昇龍、其刀を腰に打帶みましたは、縱から見ても横から眺めても俠客としか思はれませぬ 團『先生何うも妙な風體でございますなア』平『ウムこれでないと、早く彼等を召捕ることが出來ぬ』團『ヘエー成程……』平『斯ういふ風で搜したら、先方で我々と知ることが出來ぬから、三年で搜し出されるものは、一年で召捕ることが出來るといふものだ、併し早川風體はこれで宜いが、言葉を旨く行らないと不可ないぞ』團『ヘイこいつア困りました、私は俠客の言葉は存じませぬので……』平『爾うか、拙者は江戸へ參つた節に呉服屋重兵衛といふ者の宅に暫く厄介になつて居つたから少々知つて居る、だから拙者のいふ通りにすれば、大概何うにかなるだらう』團『成程一ツ敎えて戴きませう』平『ウム承知いたした、先づお師匠とか先

生などゝいふやうな言葉を使つては不可ない、拙者を兄弟々々といふのだ』團『ヘエー』平『そこで拙者が貴公を、團兄弟といふから、拙者を平兄弟といふのだ宜いか、成るべく言葉を粗大にいはなけりや不可ぬ』團『成程……では先生此處で行つて見ませうか』平『爾うだ此處で下稽古をするが宜い、拙者からいふぞ、オイ團兄弟』團『ウフウム』平『ウフウムぢやア不可ない、何とか明白といはないか、オイ團兄弟』團『ウム……先生兄弟』平『アハ、、先生兄弟といふことがあるか、其樣なことをいつちやア話にならない、マア〳〵宜しい、そのうちに習ふより慣れろといふから、途中で能く覺えるが宜い』平『心得ました、私も精々勉強を致します』といふので、其所で不中在何しろ大切な萩の戸や、八之丞のことは、彼の野口金太隼方に頼みまして整然と旅裝束をいたし、いよ〳〵出立することに相成りました、すると家中一統の侍よりは、何うも今回は御苦勞でございますと、多勢の者が城下端しまで送つて呉れました、茲に兩人は皆々と別れを告げ段々途中搜索をいたしながら、日を重ねて出て來ましたのは、出羽の山形の城下に掛り丸八峠へ歩つて參りました、この丸八峠といふのは、左程大した峠ではございませぬ頂上に一軒の茶店がございまして、五十路許りの婆が店番をいたして居ります、この茶店の前へ來まして平次正盛平『エイ眞平御免なさいヨ』婆『ハイ〳〵お出でなさいまし』平『一寸この床几の端を借りますア』婆『エ、緩くりとお休みなさいまし』平『ヤ

ア大きに……サア團兄弟一服しようぢやアねえか』いはれて團平は只だウム〳〵と許りいつて居ります 平『サア掛けねえな』團『ウム』とこれまた床几へ腰を下しまして、澁茶を啜りながら休んで居りまするとと、戸外の方へブラ〳〵出て來ました兩人、俠客らしうございます、○『オ、婆や、何うも過日は邪魔をした』と、衝々這入つて來ました 婆『オ、これは山形の親分でございまするか、何うでございました、過日 私が申しましたことは、都合好く行きましたかナ』○『ム、旨く行つたヨ、お前の親切で思はねえ金儲をした』婆『夫れは結構でございました、私も敎へ申して程好く行つたと仰しやれば、嬉しい心地でございます』○『サア有難う、依てナア今日はおごるとしやう』婆『大きに有難うございます、ぢや奥へお上りなさいまし』○『では一寸と奥の室を貸して貰はう、オイ兄弟一杯飲まうぢやアねえか』○『ム、宜からう、婆や……先日は有難う』 婆『何ういたしまして、サア上りなさいまし』と、婆は頻りに下物を調へて居ります、兩人の俠客が、偶爾と平次團平の姿を眺めたところから、見ると俠客らしうございますので、一人の奴が側へ近寄つて來まして ○『ヘイ眞平御免なさいませ、見違ひましたら御免を蒙りまするが、貴公方も俠客の道をお渡りになるお方と心得ますが、何地の親分さまかは存じませぬが、お名前を名乘を上げます段は御免なすつて下さいませ、乃公ア山形のものでございまして、親分と申しまするは月山兼五郎といふ者で、その乾分の賴朝

善吉、海間周藏といふまだ驅出し奴でございますが、何うかお見識り置かれまして、この上ながら宜しうお願ひ申上げます』と俠客仲間の切口上、此方は平次正盛は『こいつア困つた何う挨拶をしたものかと、心中考へて居りましたが、ヤア〳〵何とか瞞着して置かうと 平『左樣でございますか、お言葉に差遲れましたが、乃公共の名前は申上げるやうな者ぢやアございませぬ、ホンの詰らない人足でげして、親分と申しまするは奥州仙臺、伊達陸奥守さまの御城下で、亘理の驛の長兵衛といふものでございます、その一家もので、蛙の平六、河童の團八といふ者でございます、何うか何分この上ながら此方から宜しうお願ひ申します』と出放題に申しまする』と、此方の兩人は心の中で『さても妙な名前もあるものだわい』と思ひながらも 善『そうでございますか、ぢやア何ですか、お前さん方は亘理の長兵衛親分のお若い衆でございますか』平『ヘイ左樣で……』オイ〳〵そいつア奇妙だ、その亘理の親分は乃公の親分とは義兄弟の間柄でございまさア』平『ヘイ〳〵何だか其樣なことを、親分から聞いて居ますので、實ア兼五郎親分にお賴み申したいと思つて此處まで來ましたやうな譯でございます』と、旨く調子に合して居ます 善『でございますか、爾ういふ譯なら乃公等が御案内をいたしませう』平『イヤ何うも有難うございまする』と口ではいへど心の中では、こいつア困つたわい、先方へ行つたら何も彼も發露てしまつて、化の皮が現はれるだらうと心配をいた

して居りましたが、最う嫌といふ譯には行きませぬので　平『エッ儘よ、先方へ行つたらその時の臨機應變と、覺悟をいたして居ります、此方は善吉が　善『ヤア婆、折角調へて呉れたが乃公はいま急に用事が出來たから、また來ることにしやう』婆『マア〳〵宜いぢやアありませぬか、最う出來ましたから、一杯飲んでお歸りなさいまし』善『イヤ有難う、だがこのお客を御案内しなけりやアならねえから、また來るまで預けて置かう、少ねえが此處に置いて行くョ

婆『でござりまするか、それぢやア强つてお勸めもいたしますまい、オヤ〳〵この金は二分ではござりませぬか、此樣なに餘計頂戴いたしましては濟みませぬ』善『なアに其樣に遠慮にやア及ばねえ、金子を儲けさして貰つたホンの乃公の志だ、爾ういはずに取つて置いて呉んねえ』婆『でございまするか、何うも親分有難う存じます』善『さう禮をいつて貰つてはお前の方に損が行くよ、左樣なら……』とフイと戸外へ飛出しまして　善『サアお客人、御案内をいたしませう』と、これから善吉、周藏の案内で平次、團平の兩人は山形の城下月山兼五郎の宅へと出て參りました、流石に親分ともいはれる兼五郎の宅、新しい格子戸構へで大層廣い宅でございます、がらり格子戸を開けて這入りました賴朝善吉、海野周藏兩人『ヘイ親分、只今歸りましてございます』と聲を掛けまするうちに、親分兼五郎が出て參り　兼『オ、汝ア善と周ぢやねえか、何處へ行つたのだい、四五日顏を見せないなんて、都合の好い時は顏を見

せず、懷裡が淋しいと、何とか彼とか宅に計り引込んで居やアがらア、眞個に仕方のねえ奴だ、ウム何處に行つたのだい』善『親分誠に濟みませぬ、實ア周の野郎が在所へ出掛けまして少々計りヘイ金子儲をして歸りましたやうなことで……』兼『ウーム、また何だナ素人衆を奸策に掛けやアがつたのだな、廢せ〳〵素人衆を虐めるものぢやアねえ』兩人『ヘイ恐れ入りました』兼『マア〳〵宜いや、して其處に居るのは誰だい』善『ヘイ〳〵彼人でげすか、彼人アその何で、乃公共が歸つて來る途中で、丸八峠の茶店で出遇しましたので、蛙の平六、河童の團八といふ者でございまさア』兼『フーム爾うか、ぢやアお客さんだナ』善『ヘイ夫れなら奥へ通さねえか』善『畏まりやした、オイ蛙の平六さんと河童の團八あん、親分が奥へ通せといつて居らつしやるから此方に這入んねえ』平『さうでございますか、では御免なすつてお呉なさい』とこれから平次、團平の兩人は奥の室へ通りまして、叮嚀に頭を低げ兩手を疊に突へまして　平『エ、親分でございますか、お初にお目に掛ります、乃公共は亘理の驛の長兵衞親分の若物で蛙の平六、河童の團八といふ、まだ駈出しの靑二才でございます、何うか宜しくお願ひ申します』兼『ヤアさうか、ぢやアお前方は亘理の長兵衞兄哥の若い衆かい』二人『エイ左樣で……』兼『夫りやア能くこそお出でなすつた、して兄貴は壯健ですかい』平『ヘイ親分は至つて壯健でございます』兼『さうかい、乃公も兄貴の安否が聞きたくつて、實は何うして居な

さるかと思つて居たが、マア〳〵壯健と聞いて大きに安心だ、お前方も緩々遊んでお呉んなさい』二人『ヘイ〳〵何うも有難う存じます』と談話をいたして居る所へ、一人の乾分が慌てて出て來ました。『ヘイ親分申上げます』兼『何だい』。『その何でげす、只今亘理の長兵衛親分がお來でになりました』兼『ヤアッ……そいつア妙だ、早く此方へ通して呉れ』。『畏まりました』と、出て參りまする後姿を眺めた平次、團平互に顔を見合して、アー虚偽はいへぬものだ、豈夫長兵衛が此處へ來やうとは思はなかつたのに、萬一發覺ると大きに都合が善くない、困つたことが出來たわい』と、心痛をいたして居りまする處へ、衝々と出て來ましたのは亘理の長兵衛でございます、平次、團平は下を俯向いて居りますから分りませぬ 長『ヤ、兼、頃日は何うして居る』『旅』兄弟か……能く來なすつた、實ア乃公もお前に逢ひたかつた、何うも久振ぢやなア』長『爾うヨ、併しマア汝も無事で結構だ』兼『有難う、お前さんも壯健で芽出度えや、マア〳〵緩然と遊びなせえ何もないが幸ひ生鮭の上等を貰つたから一杯飲らう』長『さうか、そいつア有難え』長『しかし兄貴、いまお前の若い衆が兩人來てネ、ソレ此處にゐるのだ』長『さうか何うも厄介計り掛けて濟まねえなア』兼『なアに其樣なことアお互だ』長『併し何といふ野郎が來たのだ』兼『何でも妙な名前で、蛙の平六と河童の團八といつて居ますヨ』長『ヘエー』といつたが、長兵衛も不思議に思つて居ります、夫りやアその筈でござ

います、自分の若い者に其樣な妙痴奇の名前の者は居りませぬから、小首を傾けて妙な面をいたし 長『ウーム其樣な者が來たかい』兼『其處に居るではないか』といはれて長兵衛は、さては何者か乃公の名前を騙つて來たかと思ひながら 長『ヤイ其處に居る野郎共、頭を上げぬかい、乃公の若い者には其樣な妙な名前の奴はない筈だ、全體汝等ア何だい、早く頭を上ねえかといはれて、此方の平次、團平の兩人は、心の中でサアいよ〳〵困つたことが出來たわい、何うしたものかと思ひましたが、上げずに濟むべき場合でございませぬから、度胸を据ゑて兩人がフツと顔を上げました、亘理の長兵衛は 長『おのれ……』と睨みつけて能く〳〵見ますると、這はそも如何に……、思ひがけない斑鳩平次でございまするから、心の中で『オヽこりやア不思議だ、誰かと思つたが、乃公のためには以前奉公をして居つた布施の旦那の令息で、その後槻木平兵衛旦那の息子になられたる平次の若旦那だ、聞きやア今ぢや仙臺の太守へお手を取つての御指南番、八百石の御大身といふのが何うして此樣な風體で蛙の平六だなんて仰しやつてござるのか知らん……何うも不思議のこともあるものだ、待て〳〵偶爾としたら何か仙臺と、この山形とに紛擾事が出來たので、斯うして姿を變し何でも戰爭でもするといふことから、間者になつて忍び込んで居られるのかも分らねえ、萬一さうだつたら此處で化の皮を露はしたら、この若旦那のため計りでなく、仙臺一國の不利益とになる

ことだ、こいつアばつを合はして置くが宜い』と、斯う思ひましたから態々粗末に平次、團平の兩人を睨み付け 長『ヤイ〳〵汝らア、何てえことをさらしたのだ、ヨウ誰かと思つたら汝は槻木の平六ぢやアねえか……ヤイ聽いて呉れ、此樣な暢氣な奴はねへのだ、行く先先で虚僞計り吐いて歩きやアがるのだ、眞個に仕方のねえ奴、笑はしやアがる、出任に蛙の河童だなんて、乃公ア初めて聞いて可笑くつて堪らなかつた、ヤア〳〵こういふ奴だが、なあに腹の中は滿更惡い奴でもねえから、何うか何分一つ賴むヨ……コウ奴等は口から出任せに蛙の河童と吐しやアがつたが、マア〳〵それも宜いや、その名前を通して行け』といはれて平次、團平の兩人は、ホツと一安心をいたしまして心の中で、『ア、有難い、長兵衛ならこそ旨くパツを合はして呉れたかと、』密に悅こんで居りましたが 平『親分誠に濟みませぬ、何うか御勘辨なつすて下さい……エ、』長『親分定めしお心も惡くなりましたらうが、何うか宜しうお願ひ申します』兼『ヤア心配しなさんな、マア〳〵其樣なことは何うでも宜い』とこれから一同打解けまして、一杯酒を飲みながら四方八方の雜話をいたして、皆な寢むこと〻相成りましたが、亘理の長兵衛は密と平次の居室へ歩つて來まして 長『しかし若旦那、貴方は何う云ふ事情で、かういふ處へ俠客の風體となつて、お出でになつたのでございます』平『ヤア長兵衛か、先刻は誠に濟まないことをした、お蔭で乃公も安心をしたが、實はかう〳〵いふ譯

で、太守の御本陣へ放火をした太田七郎右衛門、大河内團藏、廣田軍平といふ三人の惡人を捕縛のために出て來たのぢや、確にこの山形の城下へ入込んで居るといふことで、かうして俠客風になつて來て居る譯だから、何分宜しう賴む』長『でございますかイヤ承知いたしました、決して御心配には及びませぬ、爾ういふ譯でございますれば、當家の兼五郎といふ者は乃公の兄弟分で、隨分顏も利いて居りますし、心も正直な奴でございますから、包まずお話になつた方が却つて御爲になりませうから、何事も話をして萬事賴んで置きませう』平『ヤア爾うか、ぢやア一ッ話をいたして置いて呉れ』長『承知しました』といふので長兵衛から事情を打明けた、兼五郎も吃驚いたし 兼『ぢやア何かい、お前の若者なんていつて來た、彼のお兩人は仙臺のお侍かい』長『其うだ、以前乃公が奉公をして居つた布施の若旦那で、それから實は弟の長藏の一件で、平次の旦那と紛擾を起したやうなことが、そいつが却つて雨降つて地固まるの道理、槻木の斑鳩の旦那の宅へも、出入りをして居るやうな譯、何うか何分萬事賴むヨ』兼『ア、宜いとも、この兼五郎が承知した』とこれからまたもや夜が明けると、四人齊しく酒宴を催しまして、長兵衛は一兩日滯在の上三人に別れを告げて、仙臺へ歸つてしまひました、此方は兼五郎が 兼『エ、お兩人さま、何うか汚穢しうはございまするが、御遠慮なくその三人の僕輩をお探しなさいませ、私も及ばずながら心を注けますから……』

平『イヤ何うも親切丞じけない、何分賴む』と云ふので兩人は毎日七郎左衛門等三人の者を捜索いたして居りましたが、何うも見附かりませぬ、團平は最う退屈で堪りませぬから、或日のこと頻りに乾分のものが博奕をして居る處へブラ〳〵出て來ました、すると長兵衛親分の若者と而已思つて居る乾分の儕輩でございますから ○『オイ〳〵河童、オイ河童』團『何んだ』○『何うだい、一勝負行らねえか』團『ム、一勝負ッて何うするのだ』○『何うするッて退屈だらうから、一ッ行りねえと云ふのよ』團『ウーム、何か劍術か』○『馬鹿々々しい劍術なんて、ソレ一本賭けナと云ふのだ』團『一本ッて何うも分らない』○『ウム串戲ぢやアねえせ、マアマア何んでも宜い、こちらへ這入りねえ』と強いて一室へ連れられました、早川團平は見ると多勢の者が、頻りに偶よ奇よと爭つて、金錢を收受いたして居りますから 團『ハ、アこいつが博奕だナ、何うも淺猿しい儕輩だわい、法度を犯しておのれの金子で、氣兼をいたして勝負をするなぞ、アーア嘆ずべき人間だ』と、嘆きながらも見てゐるところへ四五人の俠客らしい男が戸外からドヤ〳〵と入つて來て ○『ヤア今日は……』△『オ、來らつしやい』○『氣の毒だが、少々半り小遣錢を貰つて行きてえのだ、何うか頭數割を賴むョ』と應揚に突立ちながら無心を吹掛けました、此方はまたかといはぬ斗りの顏で ○『さういつちや困るぢやアねえか、何うか頭數割といはねえで、今日はこれで辛抱して呉んねえ』と、金子十兩を其場へ

列べました、するとその金子に見向もせず『○オイ〳〵馬鹿にしやアがるナ、僅か十兩や二十兩の目腐金を貰ひに來たのぢやアねえ、オイ誰だと思ふんだい、憚りながら目證祐天親分の一乾兒山形權次さまだぞ、愚圖々々いはずに出せば宜し、萬一出さねえと吐しやア捕縛つても連れて行くのだ』○『オイ〳〵兄哥、其樣な酷いことをいふもんぢやアねえ、何うか今日は此處で我慢をして呉んねえ』權『巫山戲やアがるない出さなけりア夫れで宜いや、今に吠面掻かして遣るからさう思やアがれ』といはれて、皆々の客も、また兼五郎の乾分等も、何しろ法度を犯して打つ博奕、目證から役人に密告せられては、稼業が出來ないといふところから殘念ながらも夫れ〳〵幾干かの金子を出しました、そいつを掻浚つた山形權次の連中、嫣然と笑を含み 權『少ないが、マア〳〵これで今日は辛抱をして遣るぞ、いづれまた小遣錢がなくなつたら借に來るせと一寸と向方の横手を見まするとと早川團平の河童團八が、妙な顏をしながら突立つて居りますから、山形權次が衝々と出て來まして 權『ヤイ汝ア出さねへか』團『ナニッ拙者か……』權『拙者……』團『イヤ乃公が何で出すのだい』權『何だ汝は拙者だとか……乃公とかをかしいことを吐しやがる、何處の贅六かは知らねへが、汝も此處に居るからにや定めて博奕をして澤山勝つたところから、一服して居るのだらう、サア其樣なら尙のことだ早く勝た金子を出さねへか』團『誰が勝つたのだ』權『ヤイ不知風れるない』團『不知風れるなど

いつて、何が不知風れて居るだ』權『この野郎生意氣なことを吐しやがる』とハッと拳骨を固めて打下して來るやつを、一寸と轉して權次の腕首を執るが早いか、肩に擔いで筋斗打たして、向方へドサリ投附けました、キャッといつて打倒れる ○『ヤア兄哥を投げやがつたナ汝何うするか見やあがれ』と他の三人の奴が打つて掛らうとする。

（第拾九席） 祐天萬次郎平次團平を殺さんとする事、幷に平次萬次郎を助ける事

左右齊しく打込んで來るを、同じくハッと體を轉して空を打たせ、ヨロ〳〵とよろめくやつを、首筋摑んで投け付けました、これに辟易いたした權次の連中、各々起上るなり 權『ヤイ能く投げやアがつたナ、汝覺えて居やアがれ』と一目散に外の方指して飛出しました、早川團平はニコ〳〵笑ひながら 團『ナニッ猪古才千萬な奴だ、今度來たら生命がねえぞ』と威張つてゐる、これに引代へ此方の連中は、皆々心配顏をいたして互に、顏を見合はせて居りますから 團『オイ心配するな、汝達は行れ〳〵、なアに彼奴等が何うするものか』○『オイ河童……無茶をするない、汝のやうに串戲をして呉れちやア、乃公等が困るぢやねえか、彼奴等ア祐天萬次郎といつて、山形の大目證の親分の味内で權次といふ奴だ、今に役人に密告して

この賭場を荒しに來るは必定、さうなつたら明日から乃公等が稼業が出來ねえ、眞個に困るぢやねえか』團『ナアに心配するな、幾等彼樣な餓鬼が出て來たつて、夫れに驚く仙臺の家來……イヤナニその亘理の長兵衞の若者、河童の團八たア違ふのだ、箆棒奴……』と難しい處へ箆棒をいつて居ります、此方は皆々が何うも困つたことになつたと、大層心配いたして居ります處へ、戸外からガラリと這入て來ました一人の男 ○『オ、御免ねへ』といふ顏を眺めた一統の者は、ハヤ顏色を變へまして ○『エ、こりや祐天の親分でございますか』と、若者は突然奥へ飛込んで來まして ○『親分祐天の親分が見えました』兼『さうか此所へお通し申せ、

○『承知致しました…、ヱ、祐天の親分、何うかお通り下さいやせ』萬『ちやア眞平御免なせい』と奥へ通つて 萬『ヱ、兼さん毎度若い者が出ましてお邪魔を致します』兼『なアに其樣な挨拶には及びませぬ、サア何うか此方へ…』と兼五郎を見ると賭場で出來た騒動は、毫も知らぬ樣子ゆゑ 萬『いま乃公の若者が、此方へ參つて投附けられたといひますが、全體何といふ人でございませう、一寸と知らして戴きたいので…』といはれて兼五郎は一向合點が參りませぬ 兼『へーそれやア一寸も知りませぬが…オイ〳〵留吉、誰が打つたのだ、ヱヱ祐天親分の若者を投附けたといふのは…』留『へイ夫りやアその何でげす、乃公も知りませぬので』兼『誰だか聞いて來い』留『畏まりました』と賭場へ出て來まして 留『オイ〳〵騒動だ、いま祐天の親分が來て、斯う〳〵いつてるのだ』と聞いた一同は ○『アーア困つた…ソレ見ねへ、だから云はないことぢやアねえ、眞倒に何うするのだ』團『アハヽ、出て來たかヤア面白い、なアに心配いたすな乃公が引受けてやるから』とその儘團平は此方へ出て來ました 兼『ヤアお前さんかい、いま祐天の親分の若者を投附けたといふのは…』團『アハヽ、ハヽ、拙者だ、乃公だ』兼『何うも困つたことをしやがるな、ヱヽ…その何でげす投附けたといふのは、此人でございまして此方は仙臺の、亘理長兵衛の若者で、河童の團八と云ふ者でございます…オイ團八、お前このお方へ謝罪りなせい』團『ヘエー何がために謝るので』

兼『何がためつて、お前さんが若衆を投附けたからだヨ』團『馬鹿々々しい、何も謝まることはない…オイ〳〵何か貴樣は…シウム何といふ奴だ』萬『オイ〳〵爾うお前さんのやうに、聲高にいはねえでも、物は靜かにいつても分りまさア、乃公が祐天萬次郎といふ者でございますが、いま乃公の若者を酷い目に遇はしなすつたさうで』團『爾うだ、正に投附けたがそれが何うした』萬『何うもお前さんといふ人は分らえね人だ、親分乾兒となりやア親子も同然、その乾兒を打擲せられては、親分たる乃公も實ア腹が立まする、ちや萬一乾兒に粗忽があれば、かういふことがあると、乃公にまで知らしてお呉れなさりやア、また親分の勸とて何とか意見もいたします、それに何う云ふ譯で投附けなすつた』團『ヘエ、成程一寸と聞くと理に合ふやうだが、そいつア不可ねえや、法度を犯してする博奕場へ來て、小遣錢を出せば宜し萬一出さないそのときは捕縛つて行くとか、役人に知らして十手風を吹かすとか左樣な不當なことを申して、脅迫ケ間敷いことをいたす奴だ、聞けば目證をも勤め、上から十手捕縄を許してある身の上といふことだが、今日役人として他人の金子を出せば宜し、出さぬに於ては捕縛るなんて、十手や捕縄を戴いて居りながら、恐喝がましいことをいふから投附けたが如何いたした、ウム貴樣の乾兒が盗賊に等しいことをいたすから、投附けたのだ、大體其方も盗賊の頭だらう』萬『エ、ーッ…ぢや何と仰しやいます、乃公の乾兒が爾う云ふ事を致しま

したか』權『いたしたから投附けたのだ、其方も盜賊の頭とあれば同じ樣に投附けて遣らうか、拙者を誰だと思ふ、苟且にも六十餘萬石仙臺陸奥守樣の家來……イヤサその御城下で有名な亘理の長兵衞親分の一乾分で、河童の團八といふのは乃公のことだ、ウム箆棒奴、乃公の兄弟分には蛙の平六といふのがゐるんだ、貴樣等の千や二千が束になつて來たとて蛙の平六、河童の團八二人居る以上は、何奴此奴の容赦はない、片端から死の山だぞ』といふ言葉の端端が何だか變なことばかりいふものでございますから、こいつを聞いた祐天萬次郎は心の中で、ハテナ……何うも妙な奴だわい、こいつ間違なく何だな、俠客の風體をして居るが、眞の俠客ぢやアねえ、必らず事情のある奴に違ひねえ、拙者だとか乃公とか家來だとか、ハヽハこれは仙臺の家中で、何か考へあつて、こう姿を變へて當地へ乘込んで居るのだナと、思ひましたから萬次郎逸る心を押沈め 萬『ヤア成程さう聞いてみれば、此方が惡うございました、一方聞いては何事も善惡が分らねえたア此處のことでございませう、こいつア乃公も行屆かねえ、イヤどうも失禮を申上げましたが、どうか御勘辨を下さいまし』祐天萬次郎は何れ後刻お禮をいたしまするとも體裁惡げに狐鼠々々と出て來ま七て 萬『ヤイ若い儕輩歸らうヨ……』權『親分何で歸るのです、彼樣な野郎に投附けられて、この儘にして置ちやア祐天親分の顏がなくなります』萬『何も彼も乃公の胸に在る、歸れといつたら歸らぬか』權『だつてお前

さん、打たれた乃公の心にもなつて見て下さい、忌ま〳〵しくつて堪つたもんぢやアございませんヨ』萬『宜いつてことヨ、汝等が自と面を汚すやうな半間なことをするから不可ねえや能く道理を考へて見ろい、十手捕繩を頭に被つて、他人を脅迫して金子を取つたりすりやア盜賊といはれたつて仕方がねえ、乃公にまで吐すことが癪に觸らア、乾分の者が盜賊なら、汝は盜賊の頭だなんていはれたときは、乃公だつて心の中が……マア〳〵宜い、此處で何といつたつて仕方がねえ、乃公に計略もあるから其處まで來い、汝等の面の立たねえやうにはしねえから』權『だつて親分、何うもこの儘に打棄つて置いちやア、乃公其の男が立ちませぬ』萬『エヽ、これ程いつて聞かすのに、男が立つも立たねえもありやアしない、此方へ來いといへば……』と强いて乾兒の者を連れまして、凡そ道の四五町も來た所で祐天萬次郎は足を駐め 萬『ヤイ若い儕輩、實ア斯うして此處まで引取つたが、彼奴ア全くの俠客ぢやねえ』權『ヘエーだつて俠客の風體をして居るぢやごせえませぬか』萬『サア其點だ、彼如して姿は變へてゐるが、何うも言葉尻を考へると仙臺の……拙者……なんていふ處を見ると、ソレ御家老の松田さまからお賴みのあつた兩人に違ひねえ、蛙の平六といふのが斑鳩平次で、河童の團八といふのが早川團平に違ひねえのヨ』權『ウーム成程左樣々々、乃公のときにも拙者とか何とかいひましたつけ、イヤ流石に親分、權次感心いたしやした、して松田樣から何とい

ふお頼みがあつたので……』萬『それは斯うだ、過日松田主膳さまから、乃公に一寸と來て呉れといふお使があつたから、こいつア何事か召捕者でもあるのかと、思つて早速お屋敷へ駈付けた』權『へイ〳〵』萬『するとマア此方へといふので一室へ案内をせられたから、乃公もこいつア不思議だ、平日庭前へ廻せといふのだが、ハテナと思つて居ると間もなくお茶が出る菓子が附いて來るといふ有様』權『へエー成程……』萬『そこで何うも變だわいと、實ア薄氣味惡く待つてゐると、またもや此方へといふので奥の間へ連れて行かれたのだ』權『オヤ〳〵』萬『すると奥の間には見識らぬ侍が三人と、御家老の主膳さまとが御酒宴の最中、何んと恠しな工合だと思つて居ると、何うも御苦勞であつたと叮寧なお言葉、剰さへ一杯飲めといつてさ、右の三人が乃公に酌をして呉れたちやアねえか』權『へエー何うも妙ですなア』萬『眞個に乃公だつて氣色が惡るいや、只だへイ〳〵といつて、マア御饗應になつて居た』權『だが惡くねへちやアございませぬか』萬『ム、饗應れるのは嬉しいが、良い後は不良いと來るがお定りだからナ』權『成程、それもさうでげす』萬『ところで四五杯頂戴すると、乃公からその斯うして御叮寧な御饗應になりましては甚だ恐れ入ります、何うか御用のこころをといつたら、主膳さまが御しやるには、實ア汝を呼んだのは他ちやアない、少々頼みたいことがあるのだ此處にござる三名は太田七郎左衛門、大河内團藏、廣田軍平といふお方だ、この御三人に就

いて少々事情があつて、仙臺の家老伊達彈正といふ人から手紙を附けて、拙者の屋敷へ蔵庇つて呉れといつて來たのだ、斯うして屋敷に置いてあるのだが、その伊達彈正といふのは即ち拙者の女房の兄である、その縁によつて拙者の方へ寄越したので、是非このお方を心易くして上げねばならぬ、ところが仙臺からこのお三方を召捕らうと斑鳩平次、秋山良助、早川團平、城戸武助といふ者が、何ういふ風にして乘込んで來るかも分らない、人相は斯様々々であるから、何うかその者等が姿を變へ、姓名を變へて當地へ乘込んで來たら計略をもつて殺して呉れ、殺してさへ呉れたら褒美として金千兩遣ると仰しやるのだ』權『イヨー千兩、何うも大した金子でげさア、お遣りなせえ、憚りながらこの權次が從いて居ります』萬『オイオイ笑はすない、汝が居たつて仕方があるか、マア〳〵それは何れ汝の力を借りなけりやアならねえが、乃公も千兩と聞いてこいつア有難へ、千兩の金子があつたら一資產、此様な詰らねえ稼業をせんでも、一生氣樂に懐手で消光される、尤も汝等も骨さへ折つて呉れたら、千兩の三分は呉れて遣らう』皆々『有難うございやす』萬『オイ待て〳〵、いま遣るんちやアねえ乃公がまだ貰らつたのでもなし、マア詰りさういふ頼みだ』皆『へイ〳〵成程』萬『そこでいまの蛙の平六、河童の團八だ、彼奴こそお頼みのあつた斑鳩平次、早川團平に相違ないから乃公も一先づ彼奴して濕和に引取つて來た譯だが、普通で行つたら、到底望みは遂げられねえ

依て計略で二人を打殺してやらうと云ふのだが、汝等も三百兩になる仕事、必らず阿呆ではならねえ』萬『ヘイ〳〵そいつは豪氣でさ、なアに造作はありやしませぬ』萬『イヤ〳〵さう心易すく思ふから可不ねえ、先づ乃公が考へはかうするのだ、今夜日暮に酒肴をもつて兼五郎の宅へ出掛け、先刻は何うも濟まねえ事を申しました、全く乃公の方が惡うござりました將來は氣を注けますから何うか御勘辨をして下さいませ、就いてはこの儘では何となく奥歯に物が挾んで居るやうで氣が濟みませぬから仲直りのために一杯召飲つて下さいませと、段段彼奴等を醉はして置いて、その晩は此方も醉つた擧動して先方へ泊り込み、夜中を合圖に寢首を搔くといふ寸法だ』萬『ナ、ナアール程……何うも感心いたしました』萬『サアこれから準備に取り掛らう』といふので祐天萬次郎は乾分と共に我家を指して歸りました、智者も欺くにその道をもつてせば智を施すに由なく、勇者もその道をもつて謀れば勇を施すに術なしで、彼の祐天萬次郎は到底普通では平次、團平の兩人を討取ることが出來ないと考へを附けましたから、和睦に托つけて酒の力を借り寢首を搔かうといふので、夫れ〳〵若者に云ひ付けて酒肴の準備をいたしまして、恰ど日暮前といふところに右の酒肴を權次に持たせまして、月山兼五郎の宅へと出て來ました 萬『御免なさいませ』すると若いものが出て ○『ヤア祐天の親分でございますか、何か御用で……』萬『エ、、先刻は何うも失禮いたしました』

○『何ういたしまして』萬『一寸このことに就いて、兼五郎親分にお眼に掛りたいので、宜しくお取次をなすつて下さいませ』と萬次郎、胸に一物ございますので、若者にも叮寧に云つて居りまする ○『エ、宜しうござります、一寸とお待なすつて』と若者は兼五郎の居間へ來まして ○『エ、親分、只今祐天の親分が見えまして、先刻は失禮を申した、それについてお前さんに逢ひたいと仰しやいます』兼『ム、爾うか、何ういふ用事かは知らねえが、此方へお通し申せ』といふので若者が祐天を座敷へ案内をしました、萬『エ、先刻は詰らねえ事を云つて、河童の親分へも濟まねえ譯で、實は宅へ歸つて若者へ懇々意見をいたしたので、若へ奴等ら何うも惡いことをした、以後は氣を注けるから勘辨して呉れと、此樣なに申しますので若者の總代として權次を連れて、お詫に出ましたやうなことで、何うか蛙の平六、河童の團八兩親分へ、宜しくお傳へを願ひます』兼『なアにその樣に固くるしく、儀式張りをせいでも宜ろしいに』萬『イヤ〳〵爾うでございませぬ、そこで甚だ申し兼ねましたが、お兩人へ和解の盃をして戴きたいのでございますが、如何なものでございましやう』兼『ヤアそりやア此方からも望むところでございます……エ、平六さんに團八さん……』と聲を掛けまするとて祐天が來たといふことを若者から聞いて居りますので、萬一といふときには打斬つて遣らうと、兩人が窃かに待つて居る、兼五郎の聲に早速出て來ました兩人『ヤア親方何にか用でも

……』兼『餘の儀でもございませぬが、祐天の親分が見えて斯う〳〵云つて、御丁寧な挨拶ですが、何樣なものでがせう』兩人『イヤ爾ういふことなら、此方は異存はない、盃を戴きませう』萬『イヤ何うも有難う存じます、何うかマア先刻のことはお腹も立ちませうが、水に流して下さいませ』兩『なアに其樣な心配は要りませぬ、ことが分れば結構でございます』とこれから萬次郎と權次においては、持つて來た酒肴を出しまして奥の座敷で酒宴と相成りました、無禮講といふやつで、頻りに萬次郎と權次は盃を平次、團平の兩人へ献してチヤホヤいつて居ります、勿論自分等は飲む眞似をして懷へ流したり、或は疊の間へ溢したりいたして居りましたが、智勇に富んだ斑鳩平次でございますから 平『何うも怪しからぬことをいたすわいこいつア油斷がならぬ』と心の中で覺悟をいたして居りまする、其中に段々と醉ふて來まして、最う兼五郎は泥醉になりまして 兼『アヽ、最う飲けねえ、ゲープエーイ……おゝ乃公も餘程醉つてしまつた、平次團平も醉うた擧動をいたして、その場へ堪へられないやうに倒れてしまひました、兩人は心の中で『イヨー占た、今夜こそおのれ寢首を搔いて、千兩の金にするのだ』と窃に喜んで居りましたが、聽て最う夜中にもならうといふ時分に、兼五郎がハッと氣が注いて 兼『ヤア何うも皆な酩酊と見える、サア寢みませう……コレ〳〵若い奴、臥床を取れ』といふので皆々寢むことに相成りましたが萬次郎、權次も泊ることに定めまして一

室の中へと這入りましたが何うして寢られませう、時分を考へて空鼾をグウ〳〵と搔いては四邊の樣子を考へて居りまするうちに、時刻は遠慮もなく經ちまして初更二更と更け渡り、四邊も寂として參りましたから、祐天萬次郎は時分は好しと思ひまして 萬『アア……醉うた〳〵……ヱヽ、何うか水を一杯願ひます……ヱヽ、お賴み申します』と言つて見たが皆々寢込んでしまつたか、誰とて返事をする者はない 萬『ウーム能く寢入つて居やアがる、アア有難い明日からは千兩の御主人さまだ』と獨りホク〳〵喜びまして、側に寢て居る權次をチョイと突きましたから 權『親分……』萬『叱、徐かにしろい、今は好い時分だ、準備をしろッ』權『合點だ』と兩人が密つと起き上り、着物の裾を高くからげ、鉢卷襷の用意に及び、おの〳〵祕し持つたる小刀の目釘を濕し、拔足差足して平次、團平の居室へ忍んで參りまして、密と襖を開けて見まするとと、酒に醉つたか大の字形にグウ〳〵白川夜船の高鼾、眺めた萬次郎と權次はニッコと笑ひ、互に顔を見合はして眼で默頭いて居ります、此方は、平次團平の兩人が實は寢た擧動をいたして、今にも來るかと待つて居た處へ、襖をガラリと開たので 平『ハテ來たわい、何うするか、見て遣らう』と右の手を吉原枕へ掛け、素知らぬ風で鼾を搔いて居りまするとと、今しも萬次郎と權次は息を殺して近寄るなり、萬次郎が平次の上へ跨りまして小刀を閃めかし氣管を目蒐けてブッーリ突刺さうとするやつを 平『エイ』といふなり吉原枕

を萬次郎の面へ投附けました、不意のことゝて萬次郎は、充分に眼と鼻の間をゴツンと打たれて堪りませう 萬『アッ』といふなりヨロ〳〵ッと、その場へ倒れてしまひました、平次はパッと跳起るが早いか、萬次郎の兩手をグイと捻上げましたから 萬『アッ痛…何うかお助けを…』といふやつを 平『ナニッ』といふなり早くも縛つてしまひました、これと同時に權次は團平の上に跳つて、咽喉を目蒐けて突刺さうとするやつを、團平が早くもパッと外して、同じく兩腕を捻ぢ伏せました 團『ア痛い…』平『ム、團平何うだ』團『マア難なく取押へました、何うも怪しい奴…』平『ム、拙者も取押へたが、イヤなか〳〵油斷がなるものぢやない』團『飛んで火に入る夏の虫、螳螂の斧といふなア、此奴等のことでございませう、先生斬殺しませうか』平『イヤ〳〵殺すことはならぬ、必らず殺しては不可ない』といつて居るうちに、勿論燈火は消えて眞の闇でございますから、誰だか確乎とは分りませぬ、只だ平次、團平が推察して萬次郎、權次と思つて居るのでございます、そのうちにこの物音に眼を覺して月山兼五郎がパッと起るなり、手燭を片手に來て見まするとと、斯ういふ有樣でございますから 兼『ヤア先生何うなされました』平『イヤ怪しい奴が忍び込んで、拙者等を暗打にしやうとしたから、只今取押へたところだ、その燈火を見せて呉れ』兼『畏まりました、何うも危險なことで』と手燭の燈火で見まするとと、案に違はず祐天萬次郎、山形權次の兩人でございま

すから 平『ヤアおのれは宵に和睦をいたして呉れイと賴んだ祐天、權次の兩人ではないか』團『ヤア先生…此奴でございます』平『夫れは分つて居る、先刻酒宴の折柄、奴等兩人の擧動が怪しいと思つて居たから、酔つたと見せて待つて居たのだ、サア祐天萬次郎とやら、奴は何者に賴まれて拙者の生命を奪りに來た、ウム但しは若者が團平に投附けられたが、遺恨でその無念を晴さんがために、斯樣な騷動をいたしたのか、察するに奴は何者にか賴まれたのに相違あるまい、サア此處においてその名前を申せ』萬『ウム…その私共は、決して他人に賴まれたのではございませぬ、乾兒といへば我子も同然、若者が投附けられたが無念で、斯樣な粗相をいたしました、何うかこれからは改心いたしますから、生命ばかりはお助けを願ひまする』平『ウーム、自分の惡いといふことに氣が注いて、以後改心いたすといへば、生命丈は助けて得さそう』團『先生、かういふ奴は活かして置いたところで、世のためになる奴ぢやアございませぬから、寧そ打斬つてしまひませう』平『イヤ〳〵斯樣な犬に等しい奴を、殺すは却つて此等の汚れだ、早くこの犬共を裏門から放してしまへ』團『ヤイコリヤ犬…此方へ來ませい、先生がお仁慈深いから、二ッとない生命が貰へたのだが、これが他の人であつて見ろ、其方等の命はないのだ、ウムヤア〳〵先生が斯樣に仰しやるから、生命は免して遣るが、併し一ッ丈け辛抱をしろ』萬『ウム…イヤ有難う存じまする、一ッ丈辛抱をせ

いと仰しやいますのは・・・・』團『その一ッを辛抱をせいといふのはこれだ』といふなり萬次郎の首筋と、權次の首筋を左右の手に掴みまして、頭と頭と拍木のやうにゴッ〳〵と打ち合はせました兩『アッ痛い・・・・』と云ふやつを團平が、裏門へ曳き摺つて來まして 團『サアこれで宜い、犬畜生奴、これから勝手に出て失せろ』とヤッと突出しました、此方は萬次郎、權次は頭を抱へてその儘走り出しましたが 權『親分』萬『何んだい』權『何んだといつても、何うも酷い目に逢はしやアがつた、人間の拍木をしやがつてゴッ〳〵、乃公ア眼が飛出すかと思ひましたせ、加之に犬なんて吐しやアがる、マア乃公が狗兒でお前さんが、親犬といふやうなものでござりませうかい』萬『打擲るせ、この野郎・・・・』權『だが親分なんと無念ぢやアございませぬか、何うしても彼の野郎にやア叶ひませぬかな』萬『なアに心配するな箆棒奴、この儘で濟まして置けるものか、俠客といはれる身の上だ、假令惡いことにもせよ、一旦男が思ひ立つたことを、遂げるのが男ではないか、彼の手でゆかなけりや、此の手で行るのだ、一旦祐天が見込んだからにやア、何うして泣き寢入りをするものか、さアこれから御家老松田主膳さまへ出て、お智慧を借るのだから、權次落膽せずに乃公に從いて來い』權『合點でございます』とこれから萬次郎、權次の兩人が、危い生命を助けて貰つた恩をも思はず、いよいよ怨に思ひまして、御家老松田主膳の屋敷を指て、ドン〳〵駈つけて參りました。

（第貳拾壱）

お勝所夫萬次郎へ異見の事、幷に萬次郎改心松田主膳の機密を平次に内通の事

兩人は松田主膳の屋敷へ駈着て 萬『エ、お頼み申します、お願ひでござります』と怪だしく喚鳴るものでございますから、驚いた取次の侍○『誰だ・・・・何者だ』と出て參りますると、祐天萬次郎でございますので 山『ヤア其方は祐天ではないか、如何いたしたのぢや』萬『ヘイこりやア山本樣でございますか、一寸と旦那へお目に掛つて、至急お話を申上げなければならねえことが出來ましたので、何分宜しうお取次を願ひまする』○『ム、左樣か、暫らく待つて居れ』とこのことを取次の山本武平といふ者が、主人松田主膳へ申入れました、此方は主膳で見ますると、豫て祐天へ頼んでございますので、早速此方へ通せいといふので、祐天萬次郎と山形權次が一室へ通りまして 萬『さて旦那さま、實は先日御依頼のことにつきまして、斯樣々々のことでございましたから、こいつア的然斑鳩平次に早川團平が、蛙の平六、河童の團八と名前を變へて俠客風となり、當地へ來て居るのに相違ないと思ひましたから、斯樣々々の計略で巧く泊り込みましたが、かういふ次第で到頭失策ひまして、漸つと生命は助けて呉れましたやうなことで、旦那彼人ア平次、團平に相違ございませぬ、何うしたもの

でございませう』と一伍一什の物語をいたしたので、主膳は喜んだ 主『夫りやア何うも御苦勞であつた、何よりも忝けない、ヨシさう云ふ事であれば、計略をもつて討取る外には仕方がない、假令兩人の者が如何に武術に長けて居つたところで、不意といふやつには、敵はない、よつて不意擊にいたそう、就いては氣の毒だが、今晩其方へ對して家中の若侍三百人を貸すから、何うか案内をいたして密つと月山兼五郎の宅へ忍ばして呉れい』萬『へい〳〵』

主『巧く兼五郎の宅へ忍び込みさへすれば、時分を圖つて一齊に討入つたら、寡は衆に敵せず、殊に不意と來て居る故、彼等を討取るは容易いことである、その代り速やかに討取ることが出來たら、其方へは千兩、また權次とやらには五百兩を遣はすぞ……』萬『イヤ委細承知致しました、ぢやアさういふ都合に、待つて居りますから、お忘れのないやうに願ひます』

主『ム、承知をいたした』といふので祐天萬次郎と山形權次の兩人は夫れ〴〵我家へ歸つて來ました 萬『オ、お勝、いま歸つたヨ』するると三十歳計りの質朴らしい、俠客の妻には不似合な女が出て來まして 勝『ヤア親分お歸りかい、昨夜は何處へ行つて居たの』萬『ム、昨夜か』昨夜はその何だ金儲に行つたのだ』勝『夫れやア宜かつた、何かい何ういふ金儲けなの』

萬『何ういふ金儲といつて、その斯う〳〵いふ譯だ、ところが昨夜失策つて、既に生命のない處を助けて呉れたのが先方の不運、今夜は斯う〳〵いふ計略で、其奴等兩人を討取るのだ

これさへ首尾よく行つたら、褒美の金子が千兩、最う汝には苦勞はさせねえから、夫れを樂みに悅んで呉れ』といはれてお勝は悅ぶかと思ひの外、大層機嫌が惡うございます、萬次郎は其樣なことにも氣が注かず 萬『ヤレ〳〵大層草臥れた、兎に角湯へ行つて來るから、一杯飲む準備をして置いて呉れ』とその儘手拭を持つて出掛けましたが、此方はお勝が進まぬながらもチヤンと酒肴の用意をいたして待つて居ります、そのうちに萬次郎は歸つて來るなり一寸と膳の上で一杯飲みました上手枕をいたしその日の酉刻と云ふ時分に、不圖眼を覺して

萬『ア、よく寢込んだ、サアこれからポツ〳〵準備をしなけりやアならねえ、かう一寸と一本燗けて呉れ』勝『また飲むの』萬『さうだ、……斯ういふことを決行るにやア酒の助けがなくなつては不可ねへ』勝『ウームお前さん勝手に燗けてお飲り』萬『オイ〳〵何をいやがるんでい……千兩といふ金儲に行くのぢやねえか、酒の燗ぐらゐして呉れたつて、蒲更罰も當るめえ』勝『お前さん勝手に飲みなさい、私ア今日は氣色が不快くでならないのだから』萬『アーアか〻の強いのには困つたものだ』と萬次郎は呟きながら、自分が立つてコツ〳〵と酒肴の準備をいたして、獨で手酌でグイ〳〵飲んで居ります、處へ來たは萬次郎の伜萬吉と云ふ子供でございます萬吉『お父ちやん』萬『オ、萬吉か、何をしに來た』萬『あのその……坊にもお肴をお呉れヨ』萬『また行儀の惡いことをいやアがる、さあ口を開けと自分の箸で、魚の切肉を挾

んで口へ入れて遣ると 萬『ア、甘い』ムニャ〳〵といつて頻りに悦んで喰つて居ります、勝『ねえ萬さん……』萬『ム、何だ』勝『お前さん何かい、爾うして萬吉に肴をやつて、ニコ〳〵笑つて飲んで居らつしやるが、その子が可愛いのか、また憎いのか、お前さんの氣が聞きたいのだヨ』萬『オイ〳〵串戲ぢやアねえせ、我子が憎いといふものがあるものか、燒野の燒子夜の鶴、子を思ふ親心は皆な一つといふぢやないか』勝『さうかい、お前さん、子が可愛と云ふのは夫りやア嘘だらう』萬『何故……』勝『嘘でなけりやアお前さんに、私は一言云ひますがね、能く道理を考へて御覽なさい、お前さん昨夕兼五郎さんの宅に、和睦の酒だと云つて仙臺の御家來斑鳩平次さまと早川團平さまといふ、お兩人を殺しに行きなすつたらう』萬『オイ〳〵お勝……其樣なことを大きな聲でいふな……』勝『アイヨ、併し萬さん、お前さんが先方へ行つて殺さうとしたやつが、却つて先方さまに取押へられた、その時の心は何樣でござんした』萬『夫りやア取押へられたときは、アーア困つたことになつた、可愛い子の顏を一眼見ることも出來ず、此處で殺されなけりやアならぬか、勿論かういふ稼業をして居る身の上、生命はさら〳〵惜いとは思はねえ、人間は百歳まで生る者もあれば、また藁の上から死ぬる者もあると、斷念りやアことが濟むが、只だ心殘りは萬吉の顏を一眼見ていと、實はホロリと涙を溢したのだ』勝『さアそのくらいお前さんも萬吉が可愛いし、また一年でも長く生きて

居りたいのは、こりやア皆な人間の情でござんす、お前さんだつて生命は惜うないと仰しやつても、滿更四十や五十で死にたいこともござんすまい、萬一先方さんが仁慈の薄い人であつたら、お前さんはかうして萬吉の顏を見ることも出來ず疾に黄泉の客でござんすぞえ、それを先方さんがお仁慈深いお方でこそあればお前さんの生命を助けてお呉んなすつたのぢやアありませぬか、左すりやア お前さんの爲には、其のお兩方は生命の親でござんせう、その生命の親たるお兩人を殺しに行くなんて……假令千兩の金子に眼が眩れたにしろ、お前さんの了簡が私は全然間違つて居ると思つて居ます、金子

は幾らあつたつて、生命を買ふことは出來ますまい、金子が千兩あつたつて、何の益にも立ちませぬよ、今夜お前さんは先方へ乘込んで、巧くお兩人を殺して、千兩の金子を貰つたところで、さういふ天理に背いたことで身に附いた金子は浮かべる雲とやらで、直に消失なつてしまいますよ、またお金子は死ぬるまであるにもせよ、そのお金子を冥途へ持つて行かれもしますまい、だがね・・・罪といふやつは現世許りでなく、黄泉まで附いていきます許りでなく、孫子の代まで傳はるのですよ、お前さんは萬吉が可愛と仰しやるが、さういふ罪を犯して、萬吉にまで報を受けさせるとして見りやア、眞個に可愛いのではござんすまい、モシ萬さん・・・私はね、良人と思へばこそこれ丈のことをいふのでござんす、能く胸に手を置いて私のいふことを考へて下さい、因果な子に生れて來たり、また不具な子になるのも、こりやア皆な親の因果が子に報ふのでござんす、夫りやアお前さんは假令何うならうとも、身から出た錆と斷念も附きませうが、何にも罪のないこの子にまでも報を受けさして夫れでお前さん子が可愛と云はれますまい、サア此點でござんす、子の可愛いと憎いが別れの二ッ辻、只だ眼前の可愛さでは何の益にも立ちませぬよ、お前さんが程好く千兩の金子を貰つて、この萬吉を氣樂に大きくさしたにしろ、他人さんが何と云ひます、萬さんソウぢやないかね、彼人は斯う〳〵した金で、育てられた萬次郎の伜だ、彼人いふ邪曲なことをした奴の子供と遊ぶ

なといつて御覽なさい、彼の子の巾が何處で利きます、假令貧苦に生活しても、惡い心を出しさへせねば、其樣なことをいふ人もござんせぬ、富豪になるならぬはこりやアその人の德不德で仕樣がないけれども、いまいつた通り萬吉が成人になつた曉に、彼の祐天の息子の萬吉といふ者は、成程今では立派な顏をして居るが、彼人の親の萬次郎といふ者は斯う〳〵といふことがあつた、彼人は生命の恩人を返り討にして金子を儲けたので、今ぢやア如彼して立派にして居るのだ、親に似ぬ子は鬼子だから、萬吉も何れ碌な人間になりはしまい、對手になつたら我々までが、何樣な目に遇ふかも知れないから、對手にすなといつて御覽ナ、萬吉の肩身が何れだけ狹いか分りやしませぬ、幾らお前さんが萬吉を可愛といつたつて、他人さまに嗤はれて、萬吉の身が立ちますか、何うか能くお前さんの心の中で考へてもお呉んなさい』と女房お勝は涙ながらに、理に理を押して諫の言葉に、今まで默然と聞いて居りました祐天萬次郎、口元までもつて行きました盃を、膳の上にピタリと置きながら、小首を傾け双手を組み思案に暮て居りまするとと、萬吉は側へ近寄つて來まして 萬『お父ちやん・・・お父ちやんよ、お母さんは馬鹿だねえ、お父ちやんはお悧怜だ・・・お母さんは馬鹿だ・・・』と父親萬次郎の顏の下へ我が顏を突入れて、熟つと眺めたその時、上から我子の顏を眺めて思はず知らず涙を溢し 萬『アーア乃公が惡かつた、これ坊や、お父さんは馬鹿だ、お母さんは怜

惘だ、アーアお父さんは馬鹿だ・・・オイお勝、能ういつて呉れた、汝のいまの意見は、五臓六腑に沁み渡り無明の夢が醒た心地だ、忝けない・・・・有難い、ホンに今までは惡いことをしたわい、今日只今改心をするから、何うか安心をして呉れろ』勝『夫れぢやア萬さんあの私のやうな者がいつたことが、お前さんの心に入りましたか、それで私も嬉しうございます』萬『イヤ汝ならこそ、乃公を大切に思つて斯れまで意見をして呉れたのだ、忘れはしねえコレこの通りだ』勝『アレ勿體ない、夫りやア女房の勤でございます、何のお前さん其樣なに拜んでお呉んなさると私は却つて罰が中ります』萬『ヨシ斯う改心をしたからにやア、今から密つと兼五郎の宅へ出掛け、平次さまや團平殿へ、實は斯う〳〵いふ譯でございますが、耻しながら、嬶の意見で改心しましたからお知らせ致しまするが、今夜は三百人許りの侍を連れて來ますから、正可の御用意をなさいませと生命の親の恩返し、萬一平次さまや團平どのが多勢のために危いと見たそのときは、及ばずながら、この萬次郎が助太刀をして斬死をする覺悟だ、お勝・・・・』勝『アイ』萬『萬一さういふ場合で、乃公が死んだそのときは萬吉だけは充分に養育て、呉れヨ、これ斗りが乃公の頼みだ』勝『ア、嬉しうございます、夫でこそ祐天の親分、決して萬吉や跡の處は御心配には要りませぬ、女でこそあれ流石祐天の子だけあると、他人に嗤はれないやうに養育まするから、安心をしてお呉れ』萬『アー有難い、夫れを聞いて安心だ、ぢや

ア行つて來るから刀を持つて來て呉れ』勝『アイヨ』と祐天萬次郎が、豫て秘藏の來國俊二尺八寸の業物を持つて來たやつを腰に打帶み、今しも出やうとすると頑是なき一子萬吉が、父親の袂を掴んで萬『お父ちやん坊も行くのぢや』萬『エ、馬鹿なことをいふものではない、坊は賢いから、お母さんの側に行つて温和しく、お母さんのいふことを聞くのだ、ウム怜悧だのう宜いか・・・併し乃公が死んだなら、跡に殘つたこの萬吉が父なし子といはれるのが憫然だわい、ア、思ふまい思ふまい、何うなるかは時と時節だ、エッ男らしくもねえや・・・ぢやアお勝、跡は頼んだぜ』フイと戸外へ飛出しまして、月山兼五郎の家を指して急ぎ駈着けまする萬『マア兼五郎さん、一寸とお願ひいたします』兼『オ、祐天の親分でございますか』萬夜前は何うも失禮をいたしました、何と申してお詫をして宜いやら、實はそのことについて一度平次の旦那にお眼に掛りたうございますので、態々出掛けて參りましたが、何分先夜のこともございますから、またどのやうな事をいふかも分らぬといふお疑念もございませうが全く女房お勝の意見によつて、初めて無明の夢が覺めました今日の祐天、決して粗忽なことはいたしませぬ、詰り平次旦那のお身の上に關はる大事がございますので、是非共お話がいたしたうございますので、何うか宜しうお傳へを願ひます』兼『ヤア宜しい、お前さんも祐天とまでいはれる俠客の親分、爾ういひなさりやア豈夫僞言も言ひなさるめえ、宜うがす、乃

公が平次の旦那へ取次いで上げますから、暫く控へてお居でなさい』と兼五郎から斯樣々々と、平次正盛へ申入れました、勿論度量宏大なる斑鳩平次でございますから、彼等ごときが如何なることをいたしたとて、なアに取るに足らざる小人と思つて居ります 平『ム、さうかちやア此室へ通して呉れ』すると早川團平が 團『ヤア先生なか〳〵迂濶にはなりませぬぞ、おのれ今日こそは手を出して見ろ、打ち斬つて膾にいたして呉れるから……』と團平は力味返つて居ります 平『ア、コリヤ早川、拙者がかうと知らすまでは、決して手荒な事をしてはならぬ、宜いか、何ういふ大事を知らして呉れるかも、相分らぬから……』團『心得ました』

平『兼五郎どの、早く呼んで下さい』兼『承知仕りました』とこれから兼五郎が入口へ出まして 兼『イヤ何うもお待遠さま、平次の旦那が面會うと仰しやるから、此方へお上りなさい』

萬『ア、有難う存じまする、夫れでは此刀を……』と腰なる一刀を兼五郎へ預け、無腰になつて出て來ました祐天萬次郎、遙か此方に兩手を突かへ、頭を低げまして暫時の間は無限の感に打たれまして、何事も云はず俯向いて涙をボロ〳〵と溢して居ります、これを眺めた早川團平威丈高に相成りまして 團『イヤ汝はまた出て來やアがつたナ、この手で行かねば彼の手で行るといふ心だらう、ウム何用あつて參つたのだ、今度こそ手を出して見ろ、その塲において胴體と首は西と東へ別けてしまつて遣るから爾う思へ』平『ア、コリヤ〳〵早川、お

前のやうに爾う頭からがみ〳〵いつては不可ぬ……ア、祐天近う寄れ、何用があつて參つたのぢや』萬『ヘイ有難う存じまする、併し旦那……貴公方は蛙の平六、河童の團八なんて俠客風になつてはお居でになりまするが、全くさうぢやございますまい、眞實は奥州仙臺の御家臣で斑鳩平次、早川團平といふお侍でございませう』平『ム、何うして夫れを其方が存知て居る』萬『旦那、實はそのことを疾くから知つて居りましたので、昨夜も賴まれた人はないと申しましたが、彼れは全く僞でございます、その實際は賴まれた人がございますので、……

平『ウーム誰に賴まれた』萬『エ、最う何も彼も打開けますが、私もあれから何うも殘念なと思ひまして、今夜はそのお三方から三百人の若侍を借受け、此宅へ夜討に押寄せる覺悟でございましたが、圖らずも女房お勝の諫言に依りまして、お耻しうございますが、私も初めて善心に立返り、かうして貴方さまの處へ出て來た譯でございます、その賴んだ人といふなア、二番家老の松田主膳といふ人でございます』平『ム、さうか、ア、其方の妻勝といふは女にしては感心なものぢや、して何か何ういふ譯で松田主膳といふ者が、拙者を討取らうといふのぢや』萬『それが何でございます、お話をいたしませんと分りませんが、その松田主膳の女房といふのが、仙臺の御家老伊達彈正といふ人の、妹でございます』平『ム、成程……』萬『そこで伊達彈正から緣合を以て、太田七郎左衛門、大河内團藏、廣田軍平といふ三人を、松田

の屋敷へ寄越しましたので・・・』平『ウーム』萬『それから私を呼びに參りましたから、何事であらうと早速出て參りますると、主膳から申しまするには斯樣々々の次第であるから、萬一斑鳩平次といふ者が入込んで來るかも知れない、そのときには斯樣々々の人相であるから喧嘩を買つて討取つて呉れい、左すれば千兩の金子を褒美に遣ると此樣なに申しますから、私も實は千兩の金子が欲しさにその賴みを受け込みまして、時機を待つて居りまするとと、先日權次が早川の旦那に投附けられ斯う〳〵だと申しますから乘込んで來て見ると、豫て聞いて居る人相に少しも違ひませぬ故、ハ、アこれこそ斑鳩の旦那に相違ないと思ひまして、濟まぬことを致しましたのでございます』平『ウーム成程・・・それで能く分つたわい』萬『ところで昨夜は既に生命のないと思つたやつを、旦那に助けられましたが、それをさうとも思はずに早速松田の屋敷へ斬着け、斯樣々々と話を致しますると、さういふ譯であれば今夜若侍三百人を遣るから、其方の案内で旨く兼五郎の宅へ忍ばせ、爾うして一時に不意を討取れば必らず失策はないといふ約束でございます、よつて旦那斯ういふ始末で、私が案内をせぬと當地にも居られませぬから此處まで案内を致しまする、それでお氣の毒ではございまするが、何うか御油斷のないやうに、これだけは私が改心をした證據に御案内丈をいたして置きますので』と聞いた平次正盛は轉た彼等の所業を憎み、且は二人の在所の知れたると祐天萬次郎

の改心を悦びまして　平『ム、左樣であるか、イヤ親切なるその一言、平次も感心いたした、惡に強き者は善にも強し、萬次郎其方の志厚く受けるぞよ』萬『有難う存じます、これで私も天下晴がいたしたやうな心地に相成りました』平『コリヤ早川、一徹短慮功をなさずとは此所のことだ、前夜殺してしまへば何にも相成らぬ、生命を助けて遣つたればこそ、今日改心をいたして正當の人間をば得られた而已ならず、かういふ大難を通知いたして呉れるのだ、これだから以後は短氣を慎むが宜い』といはれて早川團平は、頭を掻きつゝ赤面をいたして居ります　平『して萬次郎、その若侍が押寄する時刻は・・・』萬『ヘエ〳〵そりやア夜半に合圖をいたして居りますので、萬一違つたらその時また、私から密つと内通を致しますによつて御安心を下さいませ』平『ム、有難い、それでは何分其處を宜しう賴むぞヨ』萬『委細心得ましてございます』平『ヤア何うも御苦勞々々、必らず阿呆のないやうに確と賴み置くぞ』萬『貴方さまにも、御油斷のございませぬやうになさいませ』といひ置いて祐天萬次郎は氣も爽快となり、兼五郎の宅を出まして松田主膳の屋敷へ素知らぬ顔で出掛けて參りました、跡で平次正盛は團平に向ひ　平『サア早川、必らず油斷をいたすな』團『承知致しました』平『そしてチャンと準備をいたして置かねば相成らぬ、斯ういふ工合にいたして置け』團『心得ました』平『それから必らず殺すことはならぬ、急所を徐けて少々の淺傷を負はして逃がすことにいたせ、

殺すといふと、また後で面倒に相成つて、理があつて非に落る事がなきにもあらず、よつて充分注意をいたすやう』團『何事も心得て居ります』といふので兩人は下には鎖襦袢を着し、欅、鉢卷、身輕の用意をいたして、萬次郎の合圖を待受けて居ります。

（第貳拾壹席）　平次松田主膳の同勢を悉く追斥ける事、幷に萬次郎妻子と共に非道の拷問を受ける事

扨團平は兼五郎を呼んで委細の話をして　團『兼五郎、其方が萬一傷を受けるやうなことがあつてはならぬから、今夜は用心をいたして居れヨ』兼『承知致しました』平『それから先刻いつたことを、用意をいたして置て呉れ』兼『畏まりました』とこれから月山兼五郎は、蒲鉾板を五六十枚買つて來まして、その板へ釘を打附け蠟燭を打込んで蠟燭臺といたし、彼方此方の壁へ打附けて素破といへば點火いたすやうに用意充分に整ひました、軈て夜半時分と相なりまするとと、斯る内通のしてあらうとは神ならぬ身の若侍共、知らう道理もござりませぬ、各々黒裝束の身輕の扮裝、手に〳〵得物を引提げまして足音窃んで參りまする、なれども何しろ三百人と云ふ多勢でございますから、幾ら足音を忍ばして來たところで、ガサ〳〵といふ足響が平次の方へは能く聞える、殊には四邊森として靜粛なる夜半の頃でございますから、充分と

歩む足音が分ります、祐天萬次郎は眞先に立つて、その側には山形權次と三百餘人の若侍が、月山兼五郎の宅間近に相成りまするとと、萬次郎は小石を拾つて兼五郎の家の棟へ指してパツと投附けました、するとコロ〳〵ツと轉げ落ちて、カチンと庭石に當つて音響が致しましたから平次正盛、早川團平の兩人は『ハーア合圖だわい、ヨシ來た』と太刀の裏と表の目釘を濕し、息を殺して待受けて居ります、此方は祐天萬次郎、心の中でア、して合圖をして置いたからは大丈夫だと、裏の切戸の處へ出て來て見ると、此處から這入れといはぬばかりに、掛金を脱してございますから、そいつを開けた祐天が　萬『サア旦那方、お這入りなさいませ』皆『ム、』と互に點頭いて、無言の儘で忍び込みました、三尺柄の長槍を持つ者もあれば、長い刀を引拔いて居る者もございます、凡そ百人餘といふ者が屋敷内へ這入りまして、殘餘の者は屋敷の周圍を取捲いて居て危いといへば這入らうと用意をいたしてゐる、祐天萬次郎は裏戸を閉めまして、おのれは厠場の中へ潜り込み、空氣窓から樣子を眺めて居ります、何うも劇場か相撲場の棧敷で見物をするやうに思つて、ニコ〳〵笑ひながら　萬『サア何うなるだらうナ、何しろ平次の旦那はなか〳〵豪傑と聞いて居るから、豈夫負ける氣遣はねえが萬一危いと來たなら構ふことアねえ、斬死をして遣らう、おれが何時か浮れ節で聞いたことがある、死すべきときに死せざれば、死に優る耻あり、虎は死して皮を留め、人は死して名

を貽す、如彼して子伜はお勝に頼んで置いたし、未練も心殘りもねえや』と獨り言をいつて居る、此方は多勢の若侍共が、今や縁側に足を掛けやうと致しますると、這は如何に雨戸がガラリと開いたかと思ふと平次、團平の兩人が身輕の扮裝を以て、夏尙ほ寒き氷の刄水も滴るかと思ふ許りの業物を、眞向上段に振冠つて大音聲　平『ヤア汝等は夜中に及んで黑裝束で覆面頭巾、兇器をもつて忍び込むとは、察するところ夜盗追剝の類ならん、退散すれば夫れで宜し、萬一抵抗いたすにおいては、何奴此奴の容赦はない、片ッ端から薙斬にいたし、死人の山を築いて呉れるから覺悟に及べい』と兩勇士が、縁側から飜然飛下りまして、多勢の中へワット飛込みました、これに驚く若侍　○『ヤア各々方……先方が早く知つたと見え、用意をいたして居りますから、御油斷あるな』皆々『心得たり』と此處でチャンチャリンと斬り結びましたが、何しろ駒根木八流の奥義を究めましたる平次正盛、彼方に現はれ此方に隱れ、千變萬化虛々實々働いて居るその早業は陽炎稻妻か、但しは石火と申しませうか、飛鳥の如き有樣に多勢の若侍は只だ呆氣に奪られて、此處彼處と急所を避けての薄傷を負はされ、只だワッ〳〵といふ計でございます、早川團平においても獅子奮迅の有樣　團『ヤア……籠手……』といつてはチョイと斬り『胴』といつては腰の邊をチョイト斬り、宛で曲斬を行つて居ります、そのうちに外の方よりも二百有餘人の加勢としてドヤ〳〵と這入つて來まし

たから、如何なる兩勇士も平地の戰ひは損であると、内方を指して飛込みました ○『ヤア内方へ這入りましたぞ』といふなり、ドヤ〳〵と押寄せて參りますが、何しろ今までの手練に舌を卷いて驚いて居る若侍、最う悸氣が襲いて只だ我れ前にと這入る者はございませぬ、詮方なしに後方から押掛けて來るから這入るので、何しろ數多の若侍却つて自由が利きませぬ、此方はこの時なりと兼五郎へ合圖を致しますると、乾分の面々がワアーと鬨の聲を揚げ室毎々々の例の燭臺へ火を點しましたから、一度にパッと明くなるなり、ワアーといふ多勢の聲に驚いた若侍の面々 ○『ヤア先方には計略がある』といふ聲に一層に悸氣が生じて來ました、この機に乘じて平次、團平は彼方に現はれてチョイと斬り、此方に現はれてチョイと斬るのでございますから、最う若侍も堪らなくなつたと見え ○『ヤア各々彼人やア人間ではござらぬ、天狗の再來に相違ないから、迂濶々々して居ると生命が危うござるぞ』といふなり五人逃げ十人隱れ、百人走るといふ有樣で、到頭三百餘人の者が薄傷を負ひながら四離八散に逃げてしまひました 平『早川其方は負傷しなかつたか』團『先生なか〳〵愉快でございました、ア、私は初めて人間の曲斬といふやつを行りました』平『ム、……マア無事で結構だ』と兩人が面白氣に話をいたして居る、處へ厩場から出て來ました祐天萬次郎 萬『旦那如何でございました』萬『オ、萬次郎か、何うも今夜は有難い、其方の密告で旨く災難を遁れた

ぞ、これからその三人を召捕る工夫をいたさなければならぬ、まだ其方へ賴むこともあるから充分に働いて呉れ、屹度お禮はいたすから……』萬『有難うございます、私のやうな者でもお役に立つことがございましたら、何なりとも仰しやつて下さいませ』平『ム、過分に思ふ、マア〳〵一人も殺すやうな深傷は負はしてはないから、其方も歸つて素知らぬ顔をいたして居れ』萬『ヘイ』と萬次郎においては我家へ急ぎ歸りました、此方は彼の若侍共でございます松田主膳の屋敷へ出て來まして ○『ヤア御家老、只今歸りました』主『オ、各々方何うも御苦勞でござつた、先方の樣子は何うでござつた、見れば各々方は血が流れて居るが、甚だ樣子が氣遣はしい、サア早くお話あれい』○『エ、何うも先方に巧く乘込みましたが妙でございます、彼れは八封見と思はれます』主『ウーム何ういふ譯で……』○『それが我々が乘込んで、今や緣側に上らうと致しますると、斯樣々々でございました、チャンと前から知つて居りまして』主『ハテナ』○『そこで御覽の通り、皆々薄手を負はされて、殘念ながら一時引揚げましたが、何うもなか〳〵酷い奴で、到底人間の所業ではございませぬ、必らず天狗の再來だらうと思ひます、何うして我々共の手に合ふ奴ではございませぬ、實に驚きました』主『左樣か、何うも前に知つて居るといふのも不思議千萬でござる……ウームこりやア何だナ、誰か彼方へ内通をいたしたものがあるに違ひない、屹度さうだ』○『ヘエー内通をした、成程さうでござ

いませう、誰が内通を致しましたらうナ』圭『サア何うも内通をするやうな者はないが、ハテナ誰であらう』と・・・皆々小首を傾けて思案をいたして居ると、例の山形權次が口を出しまして 權『エ、旦那恐れながら申上げます、その内通をいたしましたといふのは、私の思ひまするには祐天親分だらうと考へます』圭『何故祐天が内通をいたしたといふのぢや』權『さればでございます、今夜も案内をして這入つたなり、おのれは大便所の中へ這入つて、窓から旦那方のお働きなさるのを見て居りまして、旦那方が傷でもお受けになると、何だかニコ〳〵と笑つて居りましたから、何うも私は變だと思ひます』圭『ウーム爾うか、成程何うも祐天より他に内通をするやうな者がないから、或は祐天萬次郎かも知れない』權『ヘイ〳〵夫りやア屹度祐天に違ひございませぬから、一度呼んでお調べなすつたら、何うでございます』圭『ヨシぢやア一つ、彼奴を呼んで詮議をいたして見やう、彼がこの場に居らぬといふも一ッの不審ぢや』權『爾うでございます、大體親分も歸つて來なけりやアならねえ筈だに、一寸も顔出しをせぬところ、これが内通をした證據でございます』と權次奴頻りにドシ〳〵と讒訴ました、これは何故權次が斯樣に申すかといひまするとと、權次は豫て祐天を除けて、おのれが親分にならうといふ心がございますから、この時機こそと思ひまして斯く申したのでございます、兎角浮世は自由ならぬとは、實に能く穿つた金言でございまして、祐天萬次郎が一時私慾の

ために邪道にまよひ、恩人たる平次を討取らうと惡人輩に味方をいたしたやつを、女房お勝の意見によりまして初めて後悔をいたし、前非を改め正直の人間に立返りましたが、圖らずも山形權次のために無斬や内通者と認められまして松田主膳の屋敷に拘引られ、庭前に引据られまして 圭『コリヤ萬次郎・・・』萬『ハイ』圭『其方は怪しからぬ奴ぢや』萬『これはまた思ひも寄らぬお言葉、何で私が・・・』圭『申すな萬次郎、其方は今回の計略を平次、團平に内通をいたしたに相違あるまい』萬『ヘイー内通といつて・・・その内通といふなア何の事でございます』圭『默れッ、内通が分らぬなど丶空惚けて居るな、汝は豫て若侍を遣ることを右の兩人へ知らせたであらう、さア眞直に白狀いたせ、松田主膳といふ家老から賴まれたと吐したであらう、何うぢア』萬『恐れながら私は左樣な覺えは毛頭ございませぬ、そりやア何かのお間違と考へます』圭『ソリヤ左樣なことで、拙者を籠絡しやうといたしたとて無益のことだ、内通をする者は其方より外にはないわい、サア白狀してしまへ、萬一左や右と吐せば、拷問にかけても白狀さするぞ』萬『これは甚だ迷惑に存じまする、私は決して左樣なことを、兩人へ知らした覺えはございませぬ、どうも覺えのないことを白狀せいと仰しやつても、白狀の出來る道理がございませぬ、それともお疑ひがございますれば、如何なる拷問にお掛けなされませうとも、是非ないことで、致方はございませぬ』と流石は俠客の親分と人に尊てられる

程の根性がございまして、なか〳〵白狀は致しませぬ、熟つと眼を瞑つて俯向いて居ります
から　圭『ム、よく申した、然らば拷問にかけるから左樣心得い、その場に到つて後悔いたす
な……ヤア〳〵儕輩、拷問の準備をいたせい』と呼はりますと、豫て用意が出來て居りまし
たか、若侍はハッと應へて、其場へ持出しましたは算盤責といふ器械がございます、それ
は樫の木を三角に削りまして、四本列べて打附けてございます、その上に行儀よく座らして
膝の上へ石を載せるので、イヤハヤその苦痛といふものは大層なものでございます、三角の
尖つたやつが向脛へ喰込みまして、血は泉の如く流出まするといふ、何しろ向脛といふやつ
は蚤に嚙まれても痛いといふところでございますから、なか〳〵尋常普通の苦しみでなく、
大概のものはこれに閉口いたして、詰り覺えのないことでも白狀するといふ、どうも昔は實
に壓制極まつた野蠻のお話でございます、どうも其點は當今の御政治は結構なもので假令此
方から殺しました、盗みましたと申立ましても、證據といふやつが具備して居りませぬと、
罪人になると云ふ譯には參りませぬ、何うも昔と今日は天地雲泥の相違でございます、餘事
を申上げまして相濟みませぬ……さても若侍は祐天萬治郎を、算盤責の上へ載せまして、
一の大石を膝に載せまして　圭『サア何うだ、これでも白狀いたさぬか』といはれて萬次郎は
グイ〳〵と喰込む三角木の尖、痛いの痛くないのぢやアございませぬ、顏色は朱のごとく、

また靑菜のごとく相成り、鬢の毛をブル〳〵顫はしまして、眼を天眼といふやつにいたし
萬『ウームア、……痛々〳〵ウーム……』と苦痛を堪らえるその有樣、現世からなる地獄の責
苦、見る眼もなか〳〵哀れのお話でございます　圭『サア何うだ……ウムこれでも白狀いたさ
ぬか』萬『ウムアッ……假令如何なる責苦に逢ひましても、覺えのないことは申上げやうがご
ざりませぬ』圭『汝まだ左樣なことを申すか、ヤアもう一枚石を載せい』といふので又もや一
枚〳〵都合二枚の切石を載せられて堪りませうか、肉破れ骨あらはれ鮮血淋漓として流れ、四
邊は朱を染なす許り、齒を喰緊り眼を白黑にいたし　萬『ウーム』と許りに氣絶を致しました、
　圭『ソレ水を……』といふ指圖に若侍が水を吹浴けますると、茲に蘇生つて只だハアッと
突く息は虫の音よりも細く、宛ながら現世の人とも思はれません　圭『サア何うだ、これでも
內通いたした覺えはないと申すか』萬『ウムアッ……た、た、假令如何樣にお尋ねなされまし
ても、この萬次郎も男子でございます、一旦覺えがないと申しましたからは、死ぬとも申上
げは致しませぬ、サアは、は、早く息の根を絶めて下さいませ』と如何に尋ねましたとて萬
次郎は、これより一切口を利きませぬから、松田主膳も倦みましたか　圭『ヤア〳〵奉行中田
勘太夫を招げい』といふので、これから中田勘太夫といふ奉行を招ぎまして、取調べ役を申
附けますると　勘『委細承知仕りました、この勘太夫屹度白狀をさして御覽に入れまする』

主『ム、宜しく頼む』とその日は一先づ拷問を止めとして一室の中へ押籠めて置きましたが翌日と相成りまするとと中田勘太夫は小役人に申附け、祐天萬次郎の女房お勝、一子萬吉の兩人を呼出しました、お勝においては、良人が拷問に掛つてるに相違ないと、心に覺悟をいたし、速やかに一子萬吉の手を曳いて、小役人と共に出て參り、兩手を突かへ頭を低げますること、中田勘太夫 勘『ア、それに控へたるは、祐天萬次郎の妻子であるか』勝『御意にござります』勘『ム、今日其方を呼出したるは餘の儀でない、即はち汝の夫祐天萬次郎なる者が、月山兼五郎の方に居る斑鳩平次、早川團平といふ者へ、若侍が乗込むといふことを内通いたした事件であるが、其方は良人の事だによつて、内通いたしたことを存じて居るだらうから、この場において白狀をいたせ』お勝は莞爾と笑つて 勝『恐れながらお奉行さまへ申上げます、失禮ではござりまするが、私の良人祐天萬次郎も男一疋の人間でございますから、我身ですることをば、女房の私にこれは何うしやうか、斯うしやうかと、一々相談をするやうなことはござりませぬ、貴方さまとてもその通りでござりませう、今日囚人をお調べなされまするに、奥さまへこれは斯うして調べやうか、彼して尋ねやうかと、一々御相談はなされますまい』勘『ロリヤ控へろ女奴、ウム奉行に對して、意見が間敷いことを申すとは不埒な奴ぢや、何事を申す』勝『イエこりやア譬でござります、早いお話がその通りでございませう、それぢ

やによつて、私は良人萬次郎から何事も聞いたことはございませぬ、内通したとか其樣なことは毫も存知ませぬので……』勘『能くべチヤ〳〵喋口る奴ぢやわい、ウム其方は知らぬことはあるまい、サア速かに申してしまへ』勝『これはまた何うしたものでございます、一度存せぬと申し上げました上からは、二枚の舌を使ふやうな……女でこそあれ祐天の女房勝でございます、覺えのないことは何程お尋ね下さいましても、申し上げやうはございませぬ、それとも御承知がございませねば、何の樣な拷問にお掛け下さいませうとも、更々厭はございませぬ』と覺悟を極めし女房お勝、男に優る度胸でございます、聞いて中田勘太夫キリ〳〵と眼を釣あげ、ハッと許かり睨み附け 勘『ヤア不屈至極の女奴、能くも失禮なることを申した……ヤア〳〵者輩、手酷い拷問に掛けい』○『ハッ』と應へて、小役人が左右よりお勝を後ろ手に縛し、首筋に繩を掛けまして、首を股の間に入れ、繩の端を後手にしてあるところを結び附けられて堪りませうや、所謂海老責といふやつで、首が折れる許りになる 勝『ア、……』といひつゝ顔の色を變へ大層な苦痛でございます 勘『何うぢやこれでも白狀いたさぬか、ウム苦しいか……苦しけりや早く申上げい何うぢや、それでも覺えがないと申すか』勝『アッ……ぞ、ぞ存知ませぬ』勘『ナニッなか〳〵剛情な奴だ、ウム早く申上げるが宜からう、まだまだ拷問は種々あるぞ、これぐらゐなことはいろはのいの字ぢや、苦しい思ひをせぬうちに

早く申上げい、其方が白狀いたしたからといつて、汝や子供に罪を被けるのではないから』

勘『ナーニお奉行さま、そ、そ、そりやア御無理でござります、假令何と仰しやいましても覺えのないことを白狀いたそう道理がござりませぬ、私は存じませぬ、サア早くお殺し下さいませ』とお勝は七轉八倒の苦痛の中よりも眼を瞋らして、奉行中田勘太夫の顏を睨み附けて居ります 勘『ウム爾ういへば、手酷い拷問に掛けて遣はす・・・ヤア儕輩祐天萬次郎を此處へ曳出せい』○『ハッ』と應へて小役人が、祐天萬次郎を曳出して參りました、萬次郎は唯だ一日の拷問に掛りましたのでございますが、餘程劇しかつたか、僅か一夜の間に眼は凹み顏色青く、頰骨高く現はれて、見るから憫然の有樣でございます、徐々と出で來るなり、女房子供が後手に縛られ苦痛の體に、ハッと思つた萬次郎は顏を背向けてその場に坐りました

勘『コリヤ祐天萬次郎、昨日から御家老のお尋があるに、何故お上に手數を掛け白狀をいたさぬ、ウム今日は汝の女房子伜も此處に呼び寄せある、汝の白狀いたさぬにおいては、女房伜を拷問に掛けるが、それでも白狀いたさぬか』といはれて祐天萬次郎は無念の齒切を致しながら、我身は如何なる責め苦に遇ふも更々厭はないが、女房や伜の苦痛を見せられて何んと堪へられうか、アー天道さまもお情けないと、心の中に思ひながら 萬『ヘイ實は・・・』と萬次郎は妻子の苦痛を察しまして、今や白狀をしやうとすると 勘『ア、モシ、滅多なことを

仰しやいまするな』と良人を勇ますお勝の言葉に萬『ウム・・・何でござります、實に知らないことは白狀いたすことは出來ませぬ、何うかこの上のお情には、早く殺して下さいませ』

勘『ウームヨシ白狀いたさぬとあれば・・・ソレ儕輩小伜を打ち据ゑ』○『心得ました』と呵責の鬼に等しい小役人が、情容赦もあらばこそ、頑是ない萬吉をその場へ俯向けに倒しまして竹割といふやつをもつて、左右から萬吉の尻をビユー〳〵と打擲に及びます 萬『ア、痛イアッ苦しい、伯父さん勘忍して下さいませ、最うこれから惡戯は致しません、お父ちやんや、お母さんの仰しやることに背きは致しませぬから・・・』と悲鳴を揚げて謝まりながらも泣き入る苦痛に、兩身は己が身體を打たれるより尙ほ辛うございます、齒を咬み締め顏を背向けて、堪らゆる心の中は何の樣でございませう 勘『サアこれでも汝等は白狀いたさぬか・・・ソレ儕輩打て〳〵』と奉行の言葉に小役人が、またもや力を入れてヒユウ〳〵と打ち据ゑまする、萬吉はハヤ顏の色も唇の色も紫となりまして、最う聲を揚る力もございませぬ、ヒー〳〵といふ計りで、手足はビリッ〳〵と慄はす而已でございますから、堪り兼ねたか祐天萬次郎は

萬『オヽッ』といふなり我子の側へ寄らうとするを、小役人が ○『控へろ』と背面を一ッポンと蹴りました、蹴られて萬次郎ハラ〳〵と涙を溢し、髮の毛を慄はして居りましたが 萬『アモシお奉行さま・・・』 勘『ム、萬次郎白狀いたすか』 萬『ヘイ・・・』 勘『サア早く申上げろ』

萬『その全く・・・』といはうとすれば女房お勝が、宛も恨めしげに萬次郎を眺め落る涙を瞼で止め 勝『ア、モシ萬次郎さん、假令親子三人が何ういふ責苦に逢ふとても、覺えのないことをあるやうに、白狀するといふことはございませぬ、これが拷問に掛つて居ると思へばこそ、其身も辛うございませうが、斯ういふ病氣が身から出たと思へば、斷念が附かぬことはございますまい、此處が男子の意地でございます、このお勝は女でこそあれ、一旦知らぬ存じませぬといひ出したからには、假令我身や萬吉が殺されやうとも、白狀するやうなものではございませぬ、モシ萬次郎さん、我子と思へば辛うございませうが、ナーに彼子は他人の子・・・サア赤の他人と思へば、辛いことも悲しいこともございませぬ』と鳳ますお勝の雄々しい言葉に、祐天萬次郎は 萬『ア、我ながら男の癖に未練の至り、女房さへ斯樣に申すか』と心の中で感じ入り、目を瞑つてその儘俯向いてしまひました 勘『ヤア祐天何故白狀をいたさぬ、汝は女房のいつたことを眞に受けて、それゆえ白狀を思ひ止まつたか、ウム何うぢや』萬『イエ爾うではございませぬが、全く存じませんので、申上げやうがございませぬ』勘『ウム爾うか然らば手酷い目に遇はして遣るから、後悔いたすな、ソレ傍輩小伴を打据ゑい』といはれて今まで打擲いたした小役人が、何思ひましたか持つたる割竹をその場へ棄てまして ○『アーア眞個に慘酷らしい奉行もあればあるものだ、能く考へて見ると、たかの知れた十歳に足ら

ぬ子供を、如何に責めたとて私のお父さんが、斯ういふ罪を犯しましたといふ道理もなし、眞個に詰らねえや、殊にお奉行だといつたつて、このくらひの子供もあらうに、我身を抓つて他人の痛さを知れだ、萬一奉行の子供を此樣な手酷い眼に遇はしたら、何樣な心地がするだらう、それを思へば斯うも慘く打たれた譯のものでもあるめえ、ホンに乃公だつて此樣な鬼とも蛇ともいひやうのない、打ち打擲をしなけりやア、その日の飯も喰へぬかと思へばモウ詰らねえ、心細くなつて來た、マア〳〵宜いわ、此樣な役を廢せば宜いのだ、能くいつてらア、盗みする子が可愛くて、蠅取が怨めしい・・・定めて乃公がこの子供を打つたときは、萬次郎なりお勝が乃公を怨むであらう、眞個に憫然な者だ、エッもう此樣な役は廢してしまはう』といふなりその儘向方の方へ出て行かうと致しましたから 勘『コリヤコリヤ何處へ行くのぢや』○『ヘイ私ア最う歸りますので・・・』とキッパリ云ふ。

（第貳拾貳席） 團平山形權次を殺す事、幷に平次主膳屋敷へ乘込み斬合の事

奉行は驚いて 勘『ナニッ・・・吟味中歸るといふことがあるか、控へろ馬鹿者奴・・・』○『だつて最う廢めますので・・・ヘイ此樣な詰らねえ役は勤めませぬ、なアに當月の給金さへ戴かね

ば、言草はありやすめえ・・・へイ眞平御免なすつて・・・眞個に馬鹿々々しいや、奉行々々といつたつて、仁慈のある立派な奉行のねえものか知ら・・・』ぶん〳〵憤りながら、それなりフイと戸外へ出で去つてしまひました、世の中には隨分上位に居る人で沒曉漢が多うございまして、下位の者に正理を踏む儕輩が却つて多くございます、この小役人をして居りました松藏といふものも、萬吉の頑是ない子供にして慘たらしく苦しむるのを見ましては、松藏の心止め難く、斯る役所を立退いて出て來ましたのが、裏町通りでございます、すると此處に日の出酒店といふ酒店がございます、その酒店の主人とは松藏も知つた間柄でございますから、今しも松藏が何かブツ〳〵呟やいて通り掛けましたのを眺めて、主人の德右衛門 德『アアモシ松藏さんぢやございませんか』松『ヤア 德右衛門さんか』德『何を、ブツ〳〵呟いて居るのだい、マア〳〵お這入りなさいナ』松『なアに、何だか今日は氣色が惡くてならねえのだ幸ひ一杯飲まして貰はう』と松藏は酒店の宅へ這入つて來ました 德『左樣か、心地の惡いときは酒に限りますよ、酒は憂を掃ふ玉箒、ハ、、、自分勝手なことをいひまするぢやて・・・』松『イヤ全く酒に限る、一寸と一合計り燗けて呉んナ』德『畏まりました』松『その酒は幾錢だい』德『此酒ですか、こりやア十六文で・・・』松『そいつア不可ねえや、錢は厭はねえから、極上等飛切といふやつをね・・・』德『ぢやア此方のに致しませう』と上等の酒を汲んで出しました、そいつをグイ〳〵と飲んで 松『ア、何うも良い酒だ、ゲープ・・・併し分らねえ奴は奉行だ、彼樣な幼少い子供を打擲させやアがつて、眞個に憫然な者だわい、今頃ア子供は何うしてゐるだらうナ、父親や母親は嘸かし血の涙を流して居るだらう、ホンに可哀想だなア』と泣き出しましたから、吃驚したのは德右衛門でございます 德『モシ松藏さん、貴方は泣いてお居でになりますナ』松『泣かいでか、眞個に慘いから・・・』德『ヘエ 何が慘いので・・・』松『何だつて眞個に泣くどころの騒ぎぢやねえや』德『何う致しましたので・・・』松『何うしたつてお前、今日お白洲でまだ十歳に足らない子供が、拷問に掛つて居るのだ、乃公ア中途から餘り憫然に思つたから、打つ役を謝絶つて歸つて來たのだ』德『ヘエー何うも酷いことを致しますなア、してその子供といふのは、何樣な惡いことを致しましたのでございます、掏摸でございますかい』松『なアに掏摸でも何でもねえや、その子供といふなア何にも犯した罪はねえのに、奉行の野郎手酷い拷問に掛けやアがるのだ、そのお前幼少い子供を拷問に掛けながら兩親が側で見て居るその辛さは、マア何樣なであるだらうと思やア、乃公ア泣かずには居られねえのヨ』德『マア〳〵何うも・・・ヘエー何ういふ理由で、拷問に掛けますのぢや』松『サアそれがお前さんは知つてござるだらう、祐天萬次郎といふ親分があるだらう、その親分の子の萬吉といふ者がある』といひ出しまするとと、何故か德右衛門はニコ〳〵顔で 德『ヤア松藏

さん、お前さんも萬吉を見て下さいましたか、彼奴は何うも腕白で困りまするぢやア』松『オイ〳〵徳右衛門さん、お前その萬吉といふのを知つてゐますかい』徳『ヘイ〳〵知つて居るもおらぬもございませぬ、彼子アお前さん私が娘で、お勝といふ者の子でございまさア、祐天の親分の處へ嫁に遣りまして、間もなく出來ましたのが萬吉で、私のためには祕藏な孫でございますヨ』松『ヘエー』徳『でその孫が何うか致しましたか』松『オヤ〳〵大變だ、お前さんの孫が萬吉かい』徳『ヘイ』松『その孫だヨ、いま拷問に掛つて居るといふ子供は……』と聞いて徳右衛門は吃驚致しまして 徳『エーッ、……ぢやアあの萬吉が……あの孫が拷問に掛つて居りますか』松『さうだヨ』徳『おのれよくも罪のない幼少い子供を拷問に掛けやアがるナ、何てえ事をしやアがるのだ』といふなり松藏の胸襟をグイと掴みましたから 松『アッ痛い、オイ〳〵徳右衛門さん、お前乃公を何うするのだ、乃公ア何も知らねえのだ、夫れどころか乃公アお前、その子供が憫然だと思つて、役まで廢めて歸つて來たのぢやねえか』徳『オ、これは松藏さん、何うも濟みませぬ、ツイ腹が立つて眼が暗みましたので、ヤア何うも勘辨してお呉んなさい……』松『ア、、何うも酷い目に遇つた、マア〳〵夫りやア宜いが、お前さんも娘なり婿なり、また可愛い孫が拷問に掛つて居ると聞いちやア、夫りやア周章なさるも無理はねえ、だが依然として居つては、それこそ何うなるかも分らねえから、何とかしなくちや

アなるめいぜ』徳『イヤ何うも御無禮を致しました、眞個に困つた事になりました、何とか助ける工夫はござりますまいか』松『爾うさなア、何でも乃公が聞いたには、月山兼五郎と云ふ親分の宅に、仙臺の御家來で鳩斑平次とか云ふお侍があるそうだ、その平次の旦那へ、祐天の親分が内通したと云ふので、あゝして拷問に掛つて居るのだから、その平次と云ふ旦那へ相談をしたならば好い工夫もあるだらうと思ふのだ』徳『イヤ成程、何うも有難うございます、『徳右衛門は松藏を突退けて、その儘月山兼五郎の宅を指して飛出しました、此方は松藏ヨロ〳〵ツとヨロメきながら 松『イヤ危險ねえせ、ヤア最う向方へ飛出してしまつた、イヤこれも無理はねえ』と松藏は我家を指して歸りましたが、徳右衛門は狂氣半分になつて、倒げつ轉びつ兼五郎の宅へ駈着けまして、格子戸をガラッとあけて這入つたなり、その場へウームと氣絶に及びました、サアその音響に驚いて飛出して來たは兼五郎でございます、兼『オイ〳〵誰だい、ハテナ何處の人だらう……オイ若い儕輩、誰か此處に氣絶して居るから、氣を注けて遣れ』○『畏まりました』と若者は早速水を持つて來まして徳右衛門を抱起し○『オーイ氣を確乎に持ちなさえ』と水を口中へ入れましたから、徳右衛門はムーンと云ふなり眼を細く開けまして 徳『モシ親分、何うも大變な事が出來ました』と云ふ顔を眺めて 兼『オヤオヤ誰かと思つたら、お前さんは祐天の姉御のお父さんぢやアねえか、大變だつて何うした

のだい』德『實はこれ〳〵斯う云ふ譯で、何うかその仙臺の平次の旦那と云ふのに逢はしてお呉んなさい、愚圖々々して居つたら、最う婿なり娘なり孫の生命がございませぬ』とワアワアと泣き出しましたから、兼五郎も氣の毒に思ひまして、早速この事を平次、團平の兩士へ申入れました、これを聞いた兩士は飛出して來て 平『イヤ德右衞門とやら、拙者こそ斑鳩平次である、何う云ふ事情ぢや詳しく申して見よ』德『ハイ〳〵只今兼五郎親分まで申上げましたが、斯樣々々の仕第で、三人共に拷問に羅つて居りますから、何うかお助けの程を願ひます』と一伍一什の話を致しました、兩士は互に顏を見合して 平『ウーム無禮極まる松田主膳、そういふ譯であればこの儘棄置くといふ譯には參らぬ、德右衞門とやら心配いたすな、屹度拙者が助けて遣はす、だが祐天萬次郎が拙者等へ內通をしたと云ふことが、能く先方へ知れたのう、必らずこれは誰か訴人をいたした者があるに違ひない、何うぢや誰か心當りはないか』德『左樣でございます、私しも細かい事は存じませぬが、その私に知らして呉れた人の話には、祐天の乾兒で山形權次と云ふ奴が、何うやら訴人をいたしたと云ふ事でございます』平『ム、爾うか、何うも親分乾兒の間柄で、親分の事を訴人をいたすとは重々憎むべき奴である、爾う云ふ奴は生かして置いても、世間の爲に相成らぬから、先づ其奴より打斬つてしまはう……團平續いて來い』と云ふなり一刀腰に打帶んで 平『サア德右衞門とやら、權

次の宅へ案內を致せ』德『ヤア有難う存じまする、サア斯うお來でなされませ』と德右衞門も鉢卷をいたし、尻端折つて走りでました 德『へイ旦那、此處が權次の宅でございます』平『ム左樣かと、暫く門前で內方の樣子を考へて居りまするとと、內方では權次と女房が對坐となりまして、今しも一杯飲つて居る處と見えまして 女『ねえ權次さん』權『何だい』女『何だいぢやアありやアしないよ、あの祐天の親分がねえ』權『ム、』女『彼人がマア拷問に羅つて居れば屹度死ぬるだらう』權『夫りやアきまつてらア』女『爾うなると、從來の祐天親分の一家を支配をする者は、誰がするのだい』權『夫りやア分つてるぢやアねえか誰彼と云つたつて、一の乾兒の乃公より他にする者があるかい、乃公が二代目になつて、一家の儕輩を支配するのだ』女『オヤ爾うかい、夫れぢアお前さんが親分となつたら、從來とは違つてお金子の融通も利くだらうね』權『知れた事だ、十手捕繩を預るのだから、召捕者があつた時は、乃公が顏出しをすりやア、金子なんか融通は自然に附いて來るのだ』女『爾うなつたら嬉しいわ、私の衣服も質受をしてお呉れよ』權『宜いて事よ、質受をする處が、新しい品を買つて遣らア』女『眞個に嬉しいねえ、夫れから銀臺の簪を買つてお呉れよ』權『ム、承知だ、其樣な事ア云ふだけ野暮だ、可愛い女房だから、乃公がチャーンと何も彼も買つて來て遣らア』女『爾うなつたら此樣な小い宅に居られないから、最つと大きな宅を借りなけりやアなるまいね』權『ム、爾うだ

とも』女『爾うなると此様な鑄掛をした釜ぢやア、不都合だらうぢやアないか』權『直に銅か眞鍮の、ピカ〳〵する品を買うことにしやう』なんて夫婦が的にもならない事を、最う親分の跡を取つたやうに、チャホヤと饒舌りながら酒宴をいたして居るやつを、聞いて此方の平次正盛、早川團平と互に顔を見合はしてニッコと打笑ひました 平『早川何うも怪しからぬことをいつて居るのう』團『如何にも馬鹿話をいたして居ります』平『御苦勞だが、戸を叩いて呉れ』團『長まりました』と早川團平が 團『御免なさい』トン〳〵と戸を叩きます、内方から權次の聲がして 權『エ、何誰ですか、戸は閉めてございましても、錠は卸してございませぬから開けてお這入りなせえ』團『ぢやア御免』山形權次は團平の顔を見るなりアッといつて、前にありますす飯臺を取るより早く、團平の面上目蒐けてなげ附けました、飜然體を轉した早川團平が 團『おのれッ』といふなり一刀の鞘を拂つて斬附けた、權次は早くも側にあります刀を拔き拂つて同じくチャン〳〵と斬結びましたが、何うして權次は團平に敵ひませうや、二三合チャン〳〵と合はしたかと思ふと、キャッといふ聲と共に血煙發つて、その場へ息は絶えてしまひました、これに驚く權次の女房 女『人殺しイ』といふ聲を揚げ、裳も露はに戸外へ駈出さうとする 平『おのれ囂しく申すな』と當身を一ッ入れましたから 女『ウーム』といふなりその場へ打倒れました 團『汝も權次と共に冥途へ旅立つが宜い』と一刀浴せ掛けやうと

するから 平『ア、コリャ早川、女に罪はないから、殺すまでの必要もあるまい、打棄て置け』團『心得ました』とこれから、兩人が先づこれで宜いと戸外へ出まして 平『ヤヤ德右衛門、敵の片割山形權次を打斬つたから、マア〳〵聊か怨を晴して呉りやれ、拙者等はこれより松田主膳の屋敷へ罷り越して、祐天萬次郎父子三人を助けて遣るに依て、其方は一先づ我家へ歸つて居れや』德『有難う存じまする、何うかこの上ながら、宜しうお願ひ申しまする』と德右衛門は悅び勇んで我家へと歸りました、此方は祐天父子三人を助けやうといふので、松田主膳の宅へ駈着けました斑鳩平次、早川團平の兩人 玄關から慇懃に 團『エ、お願ひ申上げます、お賴み申しまする』と聲を掛けますると、取次の侍が其處へ出まして ○『ドーレ何誰でござる』平『恐れながら斯くいふ拙者は、奥州仙臺伊達家の藩士斑鳩平次正盛、またこれなるは矢張り同藩士早川團平と申す者でござる、今日我々兩人が出ましたは、少しくお奉行に御面會をいたし御願ひ申したき心底、何卒宜しなにお取次を願ひます』と聞き、取次の侍は豫て知つて居ることでございますから、ハッと驚いてその儘奥へ走り込み ○『エ、恐れながらお奉行へ申上げます』勘『ム、何事である』○『只今例の平次、團平といふ兩人が參りまして斯樣々々と申して居ります』勘『ナニッ平次、團平が參つたと申すか』○『御意にござります、お奉行へ御面會をいたし、談判いたしたい儀がござるといつて、何うもその何でございます

血相變へて居りますが、その中でも早川團平といふ奴は、眼を釣上げて腕に力を入れて勢ひ込んで居ります、偶爾としたらその何でございませう、祐天萬次郎を拷問に掛けて居ることを知つて、談判に來たのかも知れませぬ』勘『成程さうであらう』○『何うもさうなると、餘程技倆もあるさうでございますから、何ういふ事にならうも知れませぬから、御油斷は出來ませぬ』勘『ム、如何にも爾うぢや、面會しないといつたところで、爾ういふ勢ひであれば、豈夫歸りもすまい、面會するとすれば其方の申す通り、何ういふことを致すまいとも限らぬ、よつて早速御家老へ申して、その邊の準備を賴んで置け』○『心得ました』とこれから松田主膳へこのことを申しまするとと主『ム、承知いたした』といふので、これから屈竟の若侍二十餘人を、襖の此方へ隱して置くといふことにいたし、若侍が出てきまして○『エ、御奉行、拙者共がこの襖の蔭に隱れて居りますから、萬一といふときには合圖を願ひまする』勘『ヤア各々方、御苦勞千萬宜しうござる、拙者が合圖を致しますから、その節は間違なくお出まし下されヨ』○『委細心得ました』といふので皆々襖の蔭に潛んで居ります、此方は平次團平の兩人は、取次の侍が這入つたなり、何とも返事を致しませぬから、早川團平が大音聲に團『お願ひ申す……お賴み申す』と呼ばはつて居る勘『ヤア早く行つて此方へ通れと申せ』○『心得ました、エ、何うも長らくお待せ申しました、サア何うか此方へお通り下さいませ』團『通つても宜しいか』○『サア〳〵お通り下さいませ』兩『然らば御免あれい』と大劍を左手に引提げ、油斷なく目配をいたしながら一室へ通りまするとと、正面には一家老松田主膳左右には十人許の若侍が、横手に從ひて奉行中田勘太夫が控へて居りましたから、平次は慇懃に禮を施し平『ハヽッ這は初めて御面會を致します、拙者等兩名はお取次をもつて申入れましたる通り、伊達陸奥守家來斑鳩平次、又たこれなるは早川團平と申す者でござる』主『ヤアこれは申後れましたが、拙者事は松田主膳これなるは中田勘太夫でござる、して何かお話がござると申すことでござるが、全體何ういふお話でござるか仰せ下されたい』平『餘の儀でもございませぬが、承まはれば今回祐天萬次郎父子の者を拷問に掛けられ、何かお取調べのある由でござるが、全體彼等父子に何等の御疑念がござつて、さる責苦に御逢はせなさるのでござるか、この儀承はりたく、態々推參いたしたのでござる』と恐る〳〵氣色もなく兩人の者をグッと睨んで問詰めました勘『これは怪しからぬことを承はるものかな、拙者は當所の奉行でござるぞ』平『いや夫れは只今承はつて存じて居ります』勘『然らば何も奉行が當所で出來た事件に就て取調べを致すに貴公方の干渉を受ける理由はござらぬかと考へられる』平『イヤ左樣でござらぬ、彼の祐天萬次郎に就ては、拙者も少し關係がござる、承まはれば道案内をして、内通をいたしたといふお取調べと聞きましたが、その内通といふのは何の内

通をいたしたのでござるか、夫れを承まはりませう』 勘『決して内通をしたといふことに就いて、取調べをいたすのでござらぬ他に吟味いたすべきことがあつて、取調をいたすのでござる』平『ハ、ア左様でござるか、して他に吟味すべきことは、全體何う云ふ御嫌疑でござるか』

勘『これはまた要らざるお世話、如何なる吟味があらうとも、他藩の貴殿に申す必要がござらぬ、餘計なことを仰しやるな』と刎附けましたから性質短氣者の早川團平、怫々として勘太夫を睨み附けまして 團『默れッ言葉を左右に託して、籠絡いたそうとしても、その手で引込やうな拙者等と思ふか、疾くに内通の事件に

いては委細を取調てあるのだわい、我が先生が穩かに出て居らるれば增長しやアがつて餘り馬鹿にいたすな、假令他藩の者にしろ、大體拷問に掛けるといふのは夫れ〳〵手續のあるべきもの、專斷いたすといふのは法度であるぞ、ウム拷問に掛けるならば、江戸表御老中へ伺ひをいたし、許可を得なければならぬ、その許可印が定めてあるだらうから此所へ出して見せい』勘『お默りなされい、假令許可印があらうがあるまいが貴公方からお世話を受ける理由がござらぬ、失策があれば當方へお咎めを受くるに止まつた譯、餘計な詮議に及びませぬ』

團『ナニッ、いはして置けば法外千萬なることを申す奴だ、おのれ爾う吐せば覺悟いたせ』といふなり一刀の鞘を拂ふが早いか、奉行中田勘太夫を目蒐けて斬り附けました、此方は中田勘太夫が 勘『何を亂暴をするか』といふなり、前にある仙德の火鉢を把つて投附けましたハッと體を轉して早川團平が、またもや斬込まうとする此時早し彼時遲く、襖の左右をバラリと開けて、躍り込んだる若侍『ヤア亂暴極まる腰拔け侍、其處動くな』と左右齊しく斬込んで參りましたから、班鳩平次正盛は最うこれまでなりと、太田七郎左衛門、大河内、廣田の奴等が居るこそ幸ひ、此處において召捕つて呉れやうと、これまた一刀拔き拂つて多勢の若侍を對手にしながら『ヤア團平必らず殺すなよ、生捕にいたせよ』團『心得ました』と兩人が、彼方へ轉し此方へ避け、刀背をもつてピン〳〵打附けて居りましたが、何しろ武勇

に秀でた平次正盛、何條若侍が敵ひませうや ○『ヤア御家老加勢の侍を頼みまする』といふなり尙も必死となつて平次、團平を討取らうといたして居ります、處へ松田主膳の指揮によつて、加勢のために出て來ました百人餘の若侍、各々一刀を拔拂つて斬込んで參りますから平次、團平も必死の働き、此處を先途と鬪つて居りますが、何しろ先方は百五十人有餘の多勢、此方はわづか兩人でございますから、如何なる豪傑も所々に薄傷を負ひまして、血汐は衣服を染めなす許り、なれども屈する色は毫もございませぬ、勇氣益々加はりまして、蛟龍の天に昇るの勢ひか、猛虎が千里を走るの狀、獅子奮迅の勢ひで右に現はれ左に隱れ、神出鬼沒の働きをいたして居ります、斯る處へ表の方から大音聲 ○『ヤアー暫く〳〵、白晝多勢が劒戟を揮ふとは何事でござる、双方共お止まりあれ……萬一公儀へ聞えなば何となさる、お家に關はる一大事、主君へ對しては不忠となるではござらぬか、先づお控へあれ……お止まり下され』双方必死となつて戰かつて居るその處へ、飛び込み來た一人の侍は、此人ぞ智者と呼れたる、大目附妹尾孫九郎といふ勇士でございます、松田方の若侍は孫九郎と見るより打驚き『これは大目附に顏を知られては、後日の一大事と思ひましたから、ハッと何所へか逃げ出してしまひましたから平次、團平はホッと一息を吐いて居ります、その場へ出て來ました妹尾孫九郎は聲高となり 孫『貴公方は何所の何人でござる』平『拙者共は奧州仙臺

の藩士斑鳩平次、早川團平と申す者でござるが、今日斯樣〳〵の次第で、唯今の有樣でござる』と委細のことを具さに物語りに及びましたから 孫『成程左樣の儀でござつたか、イヤ拙者は大目附をいたす妹尾孫九郎でござる、何とか處置を致しますから、兎に角拙者の屋敷まで御越し下されい、拙者も決して依怙贔員の沙汰は仕りませぬから、』平『イヤ御厚志の段有難う存じまする、然らばお言葉に從ひまして、御屋敷へ罷り出ませう、何うか何分宜しうお願ひ申しまする』といふので孫九郎同道し妹尾の宅へ來まして、丁寧に故國出立の理由から二家老松田主膳の屋敷に右三名の者が潛み居る事、祐天萬次郎父子の話を更に詳しう致しましたので 孫『イヤ何うも御心痛お察し申します、左樣の儀でござれば、右二人の者は、拙者の手より手渡しを仕つりますから、御安心を下されたい』と 正理を踏みたる孫九郎の言葉に平次、團平も大きに安心をいたし、手傷は醫師を招いて夫れ〳〵療治を致しましたが、何しろ薄傷のことでもあるし、外部から受けた傷で又血氣壯なる、兩士の身でございますから、大したこともございませぬ、僅か四五日も經てば以前の身躰になるといふ醫師の言葉でございますので孫九郎も本人等も非常に悅びまして、此處に三人が相談を致して太田七郎左衞門大河内團藏、廣田軍平の罪狀を認め、御渡し下されたいといふ願書を、一家老山田監物へ差出しました、すると山田監物もこれを御覽になりまして『兎に角太守へ伺つた上、返言を

いたすから、夫れまでは穏かに相待づて居れ』といふことで平次、團平に於てもその通知を待つことに致しました、さて此方は松田主膳でございます、早くもこのことを聞きまして、萬一太守より相渡せといふやうなことになつては、伊達彈正にも濟まず、また自分の意地にも關係致しますから、右の三人と相談に及びまして、先づ平次、團平を早く亡き者にいたさなければ、到底安心することは出來ないといふので、當時忍術の妙を得たる山本權太夫といふ者を招ぎまして、莫大の金子を遣はし、首備能く討果して呉れたなら、五百石の侍に取立て得さすと利を以て賴み込みました、勿論金子さへ見れば火の中、水の中へも飛込むといふ山本權太夫でございますから、一も二もなく承知を致しまして、或日の夜身輕の準備に及び朱鞘の大小刀を打帶んで密と出て來ましたが、妹尾孫九郎の屋敷裏手の方でございます、今しも權太夫が邸内へ忍び込まうと致しまする。

（第貳拾參席）　月山兼五郎密使の事、幷に陸奥守御前評定の事

豫てこの妹尾孫九郎といふ人は、大層犬が好でございまして、澤山の犬が飼つてございますから、權太夫の姿を認めてワン〳〵と、數匹の犬が吠へ出しました、權太夫も閉口いたし樓『叱々、イヤ何うも大層な犬を飼つて居やアがる、こいつア困つたわい……叱々』と犬を

追拂つて居りますが、何うしてなか〳〵逃げる氣色はございませぬ、夫れも一匹や二匹の犬でございましたら、追拂ふことも出來ませうが、また犬の方でも逃げるかも知れませんが、何しろ大層な犬でございます、犬だからつて多勢を賴みて、ます〳〵吠立てゝ居りますので如何な權太夫も手の着けやうがなくなつて、到頭立歸つて參り、犬の話を主膳へ物語りに及びました、主膳も致し方がございませぬので、何とかして殺す工夫はあるまいかと、皆々評定に及んで居りました、さて此方は孫九郎と平次團平が何とか沙汰があるだらうと、毎日待焦れて居りますが、凡そ一週間許り經ちまするが、一向何の沙汰もございませぬ、一家老も到頭松田主膳の佞辯に惑はされて一味同復に及んだものであらうと平次も思ひました、孫九郎も亦た同じ感じを起して居りますので、一日の事孫九郎が獨り熟々思ひまするとこりやア荏苒斯うして待つて居たら、主膳の方から如何なる工夫をもつて、平次團平の兩人を殺すかも相分らぬ、さういふことがあつたら、仙臺の方で到底默つて居る筈はない、いよ〳〵兩家不和と相成つて、戰爭にでもなるといふやうなことが出來るかも知れぬ、さうなると實にお家の一大事と思ひましたから、平次に向ひまして　孫『平次殿今日までも沙汰がないとして見ると、一家老も同腹ではござるまいかナ』平『サア拙者も左樣に心得ますが、茲に一の御相談といふのは、斯うして只だベン〳〵と待つて居たところで仕方がござらぬから、この有樣

を一應仙臺の方へ知らして戴き、公然當方へ掛合をして貰ふことにしては如何でござらう、それが第一早く始末が附くやうに考へますが』孫『ウム成程・・・』平『爾ういふことに願ひませう、決して御當家へ御迷惑は掛けませぬから、この儀は何うか御安心を下さいませ』孫『イヤ宜しうござる、成程それが得策でござらう』といふ、此處で平次は手紙を認めまして、今日までの事情を詳しく記し、孫九郎へ渡しまする、孫九郎は一人の仲間を呼びまして、これを仙臺家へ屆けさすことに致しました、そこで仲間がその手紙を懷中に及びまして、仙臺へ行こうと致しまするとと松田主膳、此奴なか〳〵遺漏のない奴でございますから、チャンと出口々々へ張番をいたさせ、怪しき者は一切領分外へ出さぬから、例の仲間も出ることが出來ませぬ、強いて通らうと致しまするとと、多勢の若侍が一々身躰なり、荷物を檢めますから、その手紙を見られては何の役にも立ちませぬので、已むを得ず歸つて參りまして○『エ、旦那、なか〳〵領分を出ることが出來ませぬので、歸つて參りました』孫『ウーム何ういふ譯で・・・』○『實は斯樣々々でございまして、松田の方から若侍が出口へ張番を致しまして、一一檢めますので、何うしても仙臺へ行くことが出來ませぬ』孫『爾うか、イヤ何うも驚いた、念を入れて居る、そりやア困つたもの』とこれから平次、團平にもこのことを物語に及びましたから、二人も非常にこれに閉口いたし、さて誰か仙臺へ行く者はあるまいかと、二人が

評定に及びましたところから平『开れならば斯うしませう、拙者がこれまで厄介になつて居りました月山兼五郎、此人に賴めば如何いふ俠客のことでござるから、また何とかいたして仙臺へ參れるかも知れませぬ』孫『成程それが宜しからう』と相談が決定りましたから、仲間をもつて兼五郎を招ぎました、兼五郎は平次からの迎ひと聞きまして、取る物も取敢えず早速出て來まして兼『エ、旦那、何か乃公にお話があるといふ、お使でございましたから、早速出て參りましたが、何ういふお話でございます』平『オ、兼五郎か、何うも御苦勞である實は其方を呼んだといふのは、他でもないが斯樣々々の有樣に成つて居るので、このことを仙臺へ知らして、仙臺から公然に此方へ紹介つて貰はうと思ふ、夫れに就いては、仙臺へ手紙を持つて行かねばならぬ、それで當家の仲間を賴んで一度出して見たが、何うして俟好邪知の松田主膳が、出口々々へ張番をいたして、出入の者を檢ためるといふことで、仙臺へ行くことが出來ないといつて、仲間も歸つて來たやうな譯だ、就いては其方何とかいたして城下を忍び出で、首尾よく手紙を仙臺へ持つて行く譯には行くまいか』といはれて月山兼五郎兼『ヘエー成程・・・』と暫時小首を傾けて、頻りに考へて居りましたが、軈て決心の色を面に表はしまして兼『イヤ承知仕りました、私が何とか工夫を致しまして、屹度お手紙を屆けませう、御心配は要りませぬ、何うか御安心を下さいませ』と容易く承知に及びましたから、

孫九郎、平次、團平の三人漸と胸を撫で下し平『爾うか、其方が首尾好く屆けて呉れるか』兼『ハイ〳〵細工は流々、仕上を御覽じませ』と此處で月山兼五郎が如何なる計略をもつて首尾好く山形の城下を出て參りまするか、總て眞の俠客と相成りますること泰山の如く、死を見ること塵芥のごとくして、一旦男と見込まれて賴まれた以上は、おのれの生命を棄てゝも、そのことを仕遂げるといふ氣象がございますから、月山兼五郎も平次に見込まれて、この大役を仕向けられたところから、是非ともこの役を仕遂げやうと、二言なく承知に及びまして、我家へ歸つて參りまして、女房には委細を云ひ含め、他人に知られぬやうに髪の毛を切つて了ひ頭部は灰を塗つけ、面部手足へも同じく灰を塗つけ、醜もない姿に扮たちましたところは、どう見ても乞食か驛流れの働き人夫としか見えませぬ、身體へは肩の拔けました襦袢を纏ひ、醬油で煮締た樣な手拭を頰被り、手には竹の息杖といふやつを持ちまして、その息杖の中へ例の手紙を納れましたところは、なか〳〵巧く考へたものでございます、チャンと仕度を致しまして、フイと外戸へ出て來ました、すると乾分の者が○『オヤ……親分ぢやァござえやせんか、何てい風をしてお居でになります』兼『エッ知られたか……オイこれには少々事情があるのだ、マア〳〵夫れはどうでも宜いや、不在の所をたのむよ』○『ヘイ……』といひましたが皆々妙な面をいたして居るやつを、見向もせず兼五郎は

スタ〳〵やつて來ましたのが、城下の雲助の寄場でございます 兼『ヤア何誰も今日は……』と衝々逗入つて來ました、勿論渡の雲助といつて、幾らも斯う云ふ人間が這入つて來まするから、誰でも兼五郎親分とは知りませぬ ○『ム、』兼『エ、江戸の方から、流れ〳〵て當地まで出て來ましたので、何うか何分宜しくお願ひ申します』○『ウーン何處まで歸るのだ』兼『ヘイ仙臺へ歸りますので』○『ウ、さうか、ぢやァ暫時待つて居れ』兼『何うか何分親分賴みます』○『茲で待つて居れ』○『有難うございます』と兼五郎は仕合せ宜しと隅の方に待つて居ります、すると一人の男が竹の皮に包んだ辨當を賣に參りました、これは一箇が二十文宛でございます、一寸と高野豆腐に切昆布と、油揚豆腐といふやうな物がお菜にしてございます、そいつを片手に提げまして ○『エ、お辨當は如何でございます』と頻りに賣廻つて居ります、何しろ澤山な雲助でございますから、錢のある奴は其品を買つて、ムシャ〳〵食ふ奴もございます、錢のない奴は兩人で一個を買つて、折半にして漸つと飢を忍ぶ奴もございます、さうかといふと全然金のない奴は、他人の食ふやつを羨やましげに眺めて居る奴もあり、イヤ種々雜多でございます、兼五郎も一個求めまして、おのれは腹が大きうございますので、片傍に居つて買ふことが出來ずに、宛も羨ましげに見てゐる男に向ひまして 兼『何うだお前さん、乃公が買ふは買つたが何だか食ひたくないから、失禮だが食べなさらぬか』○『ヤア有難

い、ちやあ遠慮なしに戴かう』とその男は瞬くうちにペロリ食つてしまひました、するうちに諸方から荷物が來まして、頭分が一々指揮を致します ○『オイ〳〵此品ア、佐竹の方へ行くのだよ、これは莊内へ行くのだ』とそれ〴〵雲助に割當てますると、今度來た長持 ○『オイ此品は仙臺へ行くのだ』といふうちに兼五郎が、衝々とその長持の側へ駈寄りまして兼『親方そいつア乃公が參りませう』△『オイ〳〵厚顏しい奴ぢやなア』兼『親方何うか、乃公を遣つてお呉んなさい、ドーセ仙臺へ歸る者でございますから』△『ぢやア行くが宜い』兼『ヤア何うも有難うございます……モシ合棒一ッ、何うか宜しく賴むよ』といふので兩人で擔ぎ出した △『ヤア待て〳〵送り狀を持たぬかな』○『ヘイ全然忘れて居りました』とこれから送狀を貰ひまして ○『親方行つて參ります』△『ムー中は破毀物があるから、道中氣を注けて行け ○『畏まりやした』と兼五郎と共にヨイショ〳〵と擔ぎまして、城下端れに出て來ますると ハヤ兼五郎は肩が痛くて堪りませぬ、何しろ今まで重い物といつたら、肩に乘せたことがないので、兼五郎は二三間行つたかと思ふと、擔ぎ棒を兩手で差あげました ○『オイ〳〵合棒何てえことをさらすのだ、合圖をせぬかい』兼『ム、承知だ』といひながらも差上げて居ると最う腕が堪まりませぬから、左の肩へ代へました ○『ヤアまた其樣なことをしやアがる、合圖をせぬかい、汝は何だナ荷物を擔いだことはなえのだナ』兼『マア〳〵辛抱をして呉れ、乃

公ア一寸と道の二十町許ば、斯ういふ工合にしないと都合が惡いのぢや、なアに直に慣るから……』△『オヤ何うも酷い奴と合棒になつた……乃公まで肩が痛くなつて來た』兼『何うか少しの間辛抱をして呉れろ』といふうちに、またもや右の肩を代へるといふ有樣、腰の工合といつたら、何うもそれやア妙痴奇な風でございます、合棒の男はこの體を見てブリ〳〵憤りながらに心の中で、クス〳〵笑つて居ります ○『眞個に困つちまふ、其樣な腰で仙臺まで行けるかい』兼『なアに大丈夫で、これぐらゐの荷物はお茶の子さい〳〵だ』○『串談ぢやアねえせ、確乎行つて呉れろ、途中で尻を割るなョ』兼『宜いつてことョ、これでもいまに見ろ、慣れて來るから……』○『笑はしやアがる、爾う手近に慣て堪るものかい』と兩人がボシヤ〳〵いひながら出で參りますると、城下端では松田主膳から若侍を出して、出入の者の荷物を檢めて居ります ○『コリヤ待て〳〵』兼『ヘー』○『其品は何處へ行くのぢや』兼『ヘイその仙臺へ參りますので』○『ナニッ仙臺へ送る……此方へ見せろ、ウム中には何があるのだ』兼『ヘイ中には何がございますか、私共には分りませぬ』○『ム、爾うか此處へ下せ』兼『ヘイ……』と例の侍がバラ〳〵ッと近寄つて來まして持上げて見ましたが、中には人間らしいものもない樣子ですから、四五人にて搖起して出しました 參『エ、旦那、さう搖動つては不可ぬ、中には破壞物が這入つて居ると申されましたから……』○『爾うか、イヤ宜しい行け〳〵』兼『ぢやア

參つても宜しうございますか』○『宜いから行けと申すに……』兼『有難うございすとズン〳〵擔ぎ出したが、兼五郎のそのときの嬉しさは、實に天へも上る心地でございます、心の中で兼『サア〳〵た最う大丈夫だ、此處さへ出りやア、斯樣な重い荷物を擔ぐ必要はねえや、眞實に肩が折れるやうであつた、併し此處で打棄ると合棒奴、後へ戻つて左や右うと面倒だ、最う少し行つて遣らうと、痛む肩を辛抱しながら、一の村に這入つて來ました、すると一軒の茶店がございますから、兼五郎がこれを見附けて 兼『ナアオイ合棒……一寸大便に行きてえから、茶店で一服して居つて呉れ』△『ム、早く行つて來

いよ』兼『直だ、乃公ァ早い方だから』と長持を茶屋の前へ卸しまして 兼『エ、御免なさい：：』すると婆がでまして 婆『これはお來でなさいませ』兼『エ、申しかねましたが一寸大便所を貸して下さい』婆『サア〳〵汚穢しうございまするが、この裏手にございますから、遠慮なくお出でなされませ』兼『ヤァ有難う：：ぢやァ合棒頼むよ』と兼五郎は裏手へ指して參りましたが、何も大便がしたいのではございませぬ、此處で逃げ出さうといふので、裏手へ出るより竹垣を越へまして田圃路を、ズン〳〵向方へ逃げてしまひました、此方は爾ういふ計略のあるとは知りませぬから、暫時待つて居りましたが、一向出て來る樣子がございませぬので△『何をして居やァがるんだらう、何うも長い雪隱だなァ、早い方だなんて吐しやァがつてコレ最う餘程にならァ：：モシお婆さん濟まねえが、いま便所へ行つた野郎に、早く出ろといつて呉んナ頼みまさァ』婆『ハイ〳〵ようございます』と婆は裏手へ來ました大便所の前で婆『モシ雲助さん、合棒の方が待つて居なさるから、早く出て上げなされ：：コレ雲助さん：：』と呼べと一向返事がございませぬから 婆『オヤ〳〵何うなさつた』と戸を開けて見ると誰も居りませぬ、オヤッと横手を見ますると、竹垣を壞して人が出た樣子でございますから 婆『ハァ此所から逃げ出したのだナ』と表へ出て來まして 婆『モシ雲助さん』△『何うだい最う出て來るかナ』婆『何のお前さん出て來る筈がねえ、同行の人は裏手の垣を壞してサ、疾

うに逃げてしまひなさつたよ』△『エーッ：：酷いことをしやがるぢやァねえか、眞倒に馬鹿にしてらァ、野郎奴到頭尻を割りやァがつた、眞倒に困つちまふ：：ぢやァお婆さん、合棒を捜して來るから一寸この荷物を頼みますよ』婆『ヘイ：：宜しうございます』△『ぢやァ行つて行やう』と合棒の男を何處へかさがしに出て行き、間もなく一人の男を雇つて來まして、これは仙臺へ參りましたが、さて田圃路を逃げ出しました月山兼五郎でございます 兼『マァ此處まで來れは大丈夫、併し野郎奴吃驚してゐやァがるだらう、マァ〳〵其樣なことを心配して居る所ぢやねえ、寸時も早く此の手紙を持つて行かねばならぬ』とドン〳〵駈出しましたが、間もなく仙臺へ着きまして、平次正盛の屋敷へ歩つて來まして、玄關へかゝつた 兼『エ、お頼み申しまする：：、ヘイお願ひでござりまする』案内を乞ひまするとと、民藏が玄關に出て來まして 民『何だい』兼『ヘイ私は山形の者で、月山兼五郎といふ者でござります』民『ウーム：：して何事があつて來た、ウム何うも大層見苦しい風體をして』兼『ヘイ、これには少々事情がございますので：：實は平次の旦那から頼まれまして、漸つとのことで出て來ましたので：：』と聞いた民藏は 民『ウムさうか、ぢやァ何だな、乃公の旦那から用事を頼まれて來たのか』兼『ヘイ』民『左樣か、夫りやァ何うも御苦勞であつた、マァ〳〵勝手へ廻つてお茶でも飲むが宜い』兼『有難うございます』民『して何か用事と云ふのは：：』兼『ヘイお

手紙を持つて參りました』民『ちやア出して呉れ』斑『ヘイ〳〵』と兼五郎は持たる竹の息杖を敷石で割りまして、その中から一通の書狀を出しまして 兼『ヘイこれでございます』民『ム、爾うか』と受取りましたが、何しろ明き盲で字は讀めませぬ、早速奥へ驅入りましたが、この奥に居りまする人は誰であるかと申しますると、留守番として野口金太隼方が參つて居るのでございます、これは何ういふ譯かと申しますると、前にも申あげました通り、何しろ大切の萩の戸なり八之丞の妹弟が居りますから、萬一何ういふ變事がないとも限らぬといふ心配から、平次正盛が金太隼方に不在を賴んで置いたのでございまする 民『エ、野口の旦那：：』金『オ、何か用事でもあるのか』民『ヘイ只今山形においでになります旦那から、お手紙が參りました』と差出す手紙を金太隼方が受取て見まするとと、一通は太守へ宛てたる書狀、一通は金太隼方へ宛て〻ございますから、自分の名宛の分を披いて見まするとと、山形での出來事が詳しく認めてございます、讀んで隼方は吃驚いたし 金『何うもこりや大變である』といふなり早速駒を曳き出しまして、パッと飛乘るのが早いか 金『ハイヨー』と一鞭打て〻驅出しました、馬は逸物乘人は上手、間もなく仙臺の御城下へ着きまして、太守へお目通りを願ひ出ました、直に御面會と相成りましたところから 金『ハ、ッ恐れながら申上げます、只今山形の斑鳩平次殿より、斯樣々々に申越しましてございます』と例の書狀を恭しく差出す

やつを、陸奥守殿はお受取に相成りまして、御披見になると眼を釣上げて、滿面朱の如く大層な御立腹 太『ヤア誰ぞあるか、非常太鼓を打てい』といふ御意に『ハッ』と應へて近習の侍、早速火の見櫓へ駈登りまして、ポン〳〵〳〵〳〵と打鳴しまする、この非常太鼓を打ちまするは、何か非常の出來事があるときでなければ無暗に打つのではございませぬ、それをドーン〳〵打ち出したので、家中の一統は驚ろきまして皆々急ぎ登城に及び ○『ヤア松本氏、何事でござらう』松『サア餘程のことが出來たに相違ござらぬ、何うか大變なことでなければ宜しうござる』と皆々心配をいたし、馬上で駈け着ける者もございます、自働車或は二人曳の人力車、イヤ其樣な物はございませぬ、早駕籠で登城する者もございまするし、城中は宛で潮の湧が如き有樣でございます、此方は活潑剛毅をもつて知られたる陸奥守殿家中一統の登城を今か〳〵と中腰になつてお待兼でございます、其處へ指して皆々伺候に及びまして『ハッ：：』平伏に及びました 太『臣等一統早速の登城、予も滿足に思ふぞよ』皆『ハ、ッ、非常太鼓何事の出來でございますか、一統の者只だ憂慮いたして居りまする儀にございます』 太『ム、餘の儀でもない、只今山形に居る斑鳩平次正盛より、斯樣々々の儀を申越した、其處にあつて承まはれ』と陸奥守どのにおいては、聲を顫るはして御立腹の體でさら〳〵と、平次から遣はした書狀を高らかにお讀上げになりますと、臣等一統の者はこれを聞くなり互に

顔を見合はして、さてこそ山形では厭制極まることをいたすわい、太守には非常の御立腹、這は何うなることであらうと、言はず語らず心の中で心痛をいたして居ります、太『如何である、何うも不埒極るではないか、この儘に打棄て置いては、六十餘萬石伊達家の威光にも關はる譯、予の本陣へ對して放火をいたした、極惡罪人を保護する而已ならず、予の名代たる平次正盛を苦しめるなどとは、もつての外ではないか、この談判は誰かする者はあらずや何うぢや』と曰ふ御意に一統の者は只だ額に汗を流して、誰あつて私がこの任に當りませうといふものはございませぬ、只だ顔と顔とを見合はして○『アーア大變な騒動になつたものぢ』や、これは餘程六難しい役だ、ことによつたら兵馬を向けなければならぬ、何うも容易ならざることである、萬一兵馬を向けるやうになつたら、將軍家に對して恐れ入る次第、穩かに談判が濟めば宜いが、成行なら致方はないとしなければならぬ、ハテさて非常なる難件である』と、皆々心配をいたして恐れ入つて居ります、太『ヤア腐甲斐なき臣等の者かな、予の恥辱にならざるやう、談判をいたす者はないか……ウム六十餘萬石の家中に、さる忠臣は一人もあらざるか』と非常に御立腹になつて居りまする、遙か末座より現はれました一人の若侍、身長高さは六尺有餘の鬼髯左右に生じ、筋骨逞しき一個の豪傑、此人ぞ即ち伊達小冠者宗任といふ豪傑でございます、太守の御前に兩手を突き頭を低げ　宗『ハ、ッ君命の重さこと

泰山のごとく、主辱められて臣死すとやら、嗚呼ケ間敷はございまするが、宗任不肖ながらこの役は、身を抛つて屹度勤めまするから、私に仰せ附け下されませうならば、有難き仕合に存じまする』と、憚る色もなく申上げました、太守はニコ〳〵お笑ひ遊ばし　太『ム、伊達小冠者宗任であるか』宗『ハ、ッ』太『勇ましき今の一言、予も滿足に思ふぞ』宗『恐れ入りまする』太『イヤ汝であれば定めてこの役を勤めるであらう、怠りなく仕遂げて參れッ』宗『有難う存じます』太『就いてはいま一人介添として、其方の望むべき者を召連れて參れ』宗『ハ、ッ然らば井伊直人どのを願まする』太『爾うか……コリヤ井伊直人……』直『ハ、ッ、……』太『其方小冠者宗任の介添を申し付けるによつて左樣心得い』直『御意正に心得ましてございます』宗『宗任、尙ほ手勢は汝の望に任せるから、左樣心得い』宗『承知仕りました』と宗任に於ては家中をズッと眺めて居りまするとと、例の秋山良助、城戸武助の兩人でございます、早川團平は平次正盛と共に出て行きましたので、今度こそは乃公等を連れていつて來れゝば宜いと頻りに顔を擧げて宗任を眺めて居ります、これに眼を着けた小冠者宗任は心の中で『ム、……』と合點を致しまして、更に太守へ向ひ　宗『エ、彼處に控へて居りまする秋山良助、城戸武助、其他五十名許り、拜借を願ひ上げます』太『其方の意に任すが宜い』宗『有難う存じまする』太『然らば只今より出立を致せよ』宗『畏まりました、何卒我君にはお心易く思召しを願ひ

ます』太『ウム必らず失策のなきように宜いか』と太守には欣然として奥殿へお入りに相成りました、家中一統の者はほつと一息して、何うか宗任が、程好く談判を仕遂げて來れば宜いがと、夫れ〳〵下城に及びましたが、さて小冠者宗任、井伊直人の兩士でございます、早速準備に及びました、何しろ六十萬石の伊達陸奥守の御名代でございますから、夫れだけの格式を與へてございます、素袍大紋を着用に及び、立烏帽子を戴きまして、太く逞ましき名馬に跨り、勇氣凛然と控へて居ります、附從がふ家臣の面々もこれまた下には鎖帷子を着用に及びまして、大身の槍の鞘を拂ひ、素破といへば主君のために討死を遂げやうといふ決心、各々兩親や妻子兄弟に別の盃をいたし、必死の覺悟で山形の城下を指して、月山兼五郎の案内で急ぎ駈着けましたが、これは一寸とお預り致しまして、此方は祐天萬次郎でございます、主膳の方では一日も早く、白狀をさせねばならぬといふので、中田勘太夫へ指揮をいたし、妻子の拷問を手酷く致しましたから、如何なる祐天萬次郎も、妻子の苦痛を見るに忍びませぬところから、到頭白狀に及びました。

（第貳拾四席）　平造越後家に召出される事、幷に平造仕置場を荒らし萬次郎を救ふ事

そこで妻子の者は放免をいたし、萬次郎の仕置を早くせねばまた何ういふ處から故障が出ましたにも限らぬといふので、今日しも城下端に空地がございます、これに矢來を構へまして萬次郎の仕置場といたし、多數の警固人を四方に配り嚴重にいたして居る、祐天萬次郎に於ては、數日の拷問に遇うて氣力も盡き、甚だしく衰弱を來たすて居りますから、駕に載せられて悄然と仕置場へ送られて參りました、見物人の連中は山をなし許り、祐天萬次郎の仕置を見やうといふのでドヤ〳〵押掛けて居ります、今しも祐天が送られて參りましたから ○『オヤ、祐天の親分は、何う云ふ罪で仕置に上るのだ』△『サア何の罪か乃公も知らねえのだ、』すると横合から一人の男が ○『夫りやア何でも他人を殺したとかいふ罪でせう』□『イヤ爾うちやアねえ乃公が聞いて居るのには何でも内通といふ罪ださうだ』△『ヘエ……内通といふなア何樣なことをしたので……』○『内通といふのだから、何でも姦通でもしたのだらうかい』なんて喋々いつて居りまする中に、最早時刻が參りましたから、祐天萬次郎の兩眼を白木綿で閉ぢまして、一人の役人は白鞘の一刀を拔き拂ひ、水を浴けながら片手でピユッと一つ振りまして、今や眞向に振冠り萬次郎の首を望んで斬下さうとする、この時萬次郎は 萬『恐れながらお役人樣へ申上げます』役『何事だ、只今になつて……』萬『エ、、恐れ多くはございまするが、臨死の際に私が一のお願ひでございまするが、何とお聞き届け下さる譯には參りますま

いか』役『ウム……して願とは何事だ申して見ろ』萬『有難う存じまする、餘の儀でござりませぬが、伜の萬吉でございます、何うか此世の見納めに、一度顔が見たうござりまする、只だこれ斗りが冥途へ赴く障りで、何うか一眼だけお免しを願ひ上げます』といはれて役人も、眼を瞬き鬼の眼にも涙を溢し。○『ウム承知いたした、上役へ聞いて見て遣る』と早速このことを上役へ申じました 役『さうか、長い間といふ譯には參らぬが、暫時の間逢はして遣れ』といふので、これから女房お勝と一子萬吉を呼び出しまして。○『萬次郎の女房か、伜は居らないか』と高らかに呼びまするとと、豫て良人の仕置になるので、餘所ながら暇乞ひをしやうと、群衆の中に紛れて來て居りますから、其處へ指して悄々と出て參りましたお勝、萬吉ヤレ嬉しやと木戸口を這入らうといたしますると。○『コリヤ〳〵、其方は這入ることはならぬ小伜だけだ』お勝『モーシお役人さま、女房の私でございます、一度逢ひたうございますから何うかお許し下さいまし』○『ならぬと云へば相成らぬ』と突き飛ばして萬吉を連れ込みました。○『サア萬吉とやら、汝の父に逢ふが宜い』と祐天の側へ突遣られて萬吉は涙を流しながら、父親萬次郎の膝へ縋りつき 萬『お父ちやん、早く宅へ歸つてお呉れヨー』といはれて祐天萬次郎は、ブル〳〵と體を震はして抱込まうにも兩手は縛られて自由になりませぬ、宛も怨めしげに萬吉の顔を眺めて、ホロリと溢す一雫、凝つと見詰めて居りまするとと、これを眺

めた女房お勝は、殆んど狂氣のごとくに相成り、聲を發てワッと許りに泣き倒れ、ました、見物の人々も、誰あつて涙を溢さぬ者は一人もございませぬ。○『アーア憫然な者だ、眞個に可憐らしいわい』と聲を立てねど心の中で泣いて居りまする、人情さこそあるべく實に道理の次第であります、暫く眺めて居ました祐天萬次郎 萬『コリヤ坊ヨ、この父はナ、今日お仕置になつて現世を旅立たねばならぬお母さんに無理をいつてはならぬぞヨ、宜いか分つたか、汝もこれからは父なし子と、他人に嘲り笑はれるであらう、それが乃公ア憫然……といつたところで返らぬ繰言、併し汝が成長したなら立派な

者になつて呉れよ、また他人が汝の父は何ういふ罪でお仕置に上つたかと問はれたら、内通をした咎めで、お仕置になつたといつて呉れ、宜いか、千部萬部のお經をあげて呉るより、乃公の爲めにやそれが功德だ、忘れてはならぬぞョ』と涙と共にいひ聽かせました、子供ながらもこの萬吉は 萬『アイ能く分つて居ります』といふやつを役人が ○『最う宜い、サア早く彼方に行け』、と尙ほ取縋らうとする萬吉の、襟首取つて入口の處へ曳摺り出しました、ワツと泣き出す萬吉の聲に、今まで泣き倒れて居りました女房お勝が駈け寄るなり抱き締め 勝『オ、可哀想に……』とまたもやその場へ泣き倒れました、此方は祐天萬次郎が心の中で『ア、情けない慘い仕方』と松田の屋敷を眺めてグイと睨みました、役人が早くも目隱をいたし、一人は祐天の髪を掴んでグイと前へ引張つて居ります、斬役は一刀を振り揚げて、今や斬下さうと身構へました、此處間髪を容れざる危急の場合、俄かに矢來の外がやがやと騒しくなつたかと思ふと、バラ〳〵ッと柵を破つて飛込み來つた一人の侍、旅裝束をいたし朱鞘の大小流儀帶し、色白くして眼淸しく、身長六尺に餘る一個の壯士でございます、役人がアッと驚いて居る、その虛に乘じて萬次郎の側に近寄つて參りましたが、此人ぞ斑鳩平次正盛の兄平造でございます、何故この平造がこの場へ乘り込みましたかと申しますると、話頭前復りまして平造はその身の罪を弟平次が被り、代官勝田忠左衞門の宅へ參りましたが、

心配で堪りませぬから種々と樣子を探つて居りますると、平次は忠左衞門とは伯父甥に當る間柄といふので一命を助かり、江戸表へ修行に參つたといふことを知りましたところから、大きに安心をたいし、その身も弟に負けては相成らぬといふ精神を起しまして一封の書置を殘して、飄然と槻木を出立に及び、廻り〳〵て出て來ましたのは筑前久留米でございます、或る一軒の道場で頻りにお面お籠手お胴と武術の稽古をいたして居りまするから 平『ハ、アこの處も道場と見える、今日まで諸國を廻つたが、何うもこれといふ師匠が見當らない、一ッ此處へ這入つて見て遣らう』と衝々と玄關へ掛りまして 平『エ、お願ひ申す……、お頼み致しまする』と案内を乞ひますると、奥から出て來ました一人の門弟 ○『ドウレ……何誰でござる』平『拙者は諸國歩者修行に廻はる者でござる、先生御在宿なれば一本の御教導に預かりたし、御門前を通りましたので推參致しました次第、宜しくお取次を下されたい』○『ム、左樣でござるか、暫時お控へ下さい』と取次の門弟は奥へ這入りまして、このことを師匠に申入れました、師匠といふのは年頃六十前後でございまして、誠に柔和な容貌にて、白髯を生じてニコ〳〵笑つて居りましたが、此人ぞ九州において有名なる秋月主馬といふ先生でございます 主『ム、左樣か、丁寧にして道場へお通し召されい』○『ハ、ッ……』と玄關へ出て來まして ○『エ、どうか道場へお通りあれ』 平『然らば御免下さい』と洗足の湯を貰ひ受けま

して、徐々と道場へ通りました、見ると正面には右の主馬先生が控へられ、左右には數多の門弟が控へて居ります平『ハ、ッ早速の御對面恐悦至極に存じます、斯くいふ拙者は斑鳩平造と申す未熟者、一本の御教導に預かりたう存じまする』主『これは〳〵御叮寧なる御挨拶、拙者は秋月主馬と申す浪人、なか〳〵貴公等へ教導なぞとは思ひも寄らぬこと、併し折角の御來訪一ッ手合を願ひませう』と温和しき言葉に平造は感心いたし、何處に參つても豪そうにいふが、この老人はなか〳〵奥床しい挨拶、これこそ眞の大先生に相違ないと、妙なもので力のある人は却つて温和でございます平『ハ、ッ有難い仕合に存じます』と此處で双方準備に及びまして五六合打合はしましたが、何うしてなか〳〵平造足許へも寄れませぬから、ハッと木刀を放り出し、低頭平身に及びまして平『ハ、ッ恐れ入りました、何うかこの上は不肖なる拙者でござれど、御教授の段偏に願はしう存じまする』といふので、これから平造は一心不亂に、この秋月主馬先生に就いて武術の修業を致しましたが、質が怜悧ではございますし、且つは最とも熱心に勉強致しましたところから、凡そ二年の間に免許皆傳を得ました、主『ャア平造、最うこれで宜い、これからは慢心を起してはならぬぞよ』平『師の御高恩、死しても忘却は仕つりませぬ、斯くまでの技倆に相成りましたは、これ畢竟師の賜物有難う存じまする』主『併し油斷大敵といふことがあるから、この儀は忘れては相成らぬ、凡て劒

道の流儀は種々あるが、その奥儀といふは、時に臨んで己れの身を棄てるといふ、覺悟が第一である、宜いか』平『御教訓謹んで了承致しました』主『然らば宜い、これから故郷に歸るとも、また良き主人へ仕へるとも、其方の望に任すが宜い』といふので秋月主馬先生よりお暇を貰ひ受け、平造においては昇天の悦び、一時も早く父平兵衛に面會いたし、技倆の程を知らせて悦び給ふお顔を見んものをと、門弟衆からは餞別を貰ひまして、筑前久留米を出立に及び、途中またもや諸國の道場を訪ね、仕合を致しましたが、不覺を取つたことは一度もございませぬ、日を經、宿泊を重ねまして出て來ましたのが越後國高田の城下でございます、みると多勢の人が道路を清めるやら、右往左往に走つて居りますから、平造も不審に思ひまして平『一寸お尋ねいたすが大層の騒ぎ、全體何ういふことでござる』と往來の人に向つて尋ねました、尋ねられたる一人の男が ○『ヘイ〳〵こりやア其何でございます、今日お太守さまのお鷹狩でございます』平『ム、』○『今日お太守さまの、お鷹狩がございますので、此處を御通行になりますから、斯うして騒いで居りますので…』平『ハ、ッ成程國主のお鷹狩隨分美事であらうの』○『ヘイ〳〵夫りやア當所は年に一度のお鷹狩で、なか〳〵立派なものでござります』平『いや何うもお邪魔をいたした』と町の中央まで出て來ましたが、平造は心の中で平『年に一度のお鷹狩とあれば、隨分美物であらう、餘所ながら一ッ拜見をいたさ

う』と偶爾と左側を見まするとと、一軒の料理屋がございますから、此店へ這入つて來して、平『ア、免せ』○『來らしやいませ』平『一寸一杯飲みたいが、差支へはないか、』○『ヘイ〳〵、その實は今日御主君さまのお鷹狩で、此處を御通行になりますから、表二階では差上げるといふ譯には參りませぬが、幸ひ離座敷がございますから、其處で宜ければお上り下さいませ』平『ム、夫れで宜い』とこれから、平造が離座敷に參つて、二三種の下物を取寄せ一杯飲んで居りまするとと、間もなく御通行といふので案内の者がバラ〳〵ッと店頭へ飛出し、下座をいたして拜見をいたして居りまするとと、凡そ總人數三百有餘人、行列美しく威儀嚴然と國主を保護して、徐々と御獵場指して參ります、程なく御通行も濟みましたので、平造はバチ〳〵と手を鳴らし平『ア、亭主々々』すると亭主の八兵衛が出て來ました八『ヘイ何か御用で』平『他でもないが、御獵場といふのは餘程遠いかナ』八『ヘイ〳〵左まで遠くはございませぬ、この城下端から。エ、と半里ばかりでございましやう』平『ム、左樣か、イヤ大きに有難う、して勘定は幾錢になる』八『有難うございます、何うか御緩然なされませ……ヘイ〳〵六十文戴きます』平『左樣か、然らば此數に置いて行くぞ』八『有難う存じます』平『何うもお邪魔であつた』八『何う致しまして……』とこれから平造は料理屋を立出で、御獵へ近着いて見まするとと遙か小高き山です、大勢の勢子が頻りに獲物を追出して居ります、何しろ國主のお鷹

狩でございますから、その美事さは何に譬へやうもなく、雉子、鳩、山鳥なんぞがパタ〳〵と飛交ふ有樣、勢ひ好く追ひ廻す鷹、その下を走る獵犬ワア〳〵といふ數多の若侍、實にや一小戰爭の起つたかとも思はれまする、國主においては一段小高い處に床几を据ゑさせられ十數人の近習を從へ、頻りに御覽になつて居ります、平造は大きに感心をいたし、遙か彼方に在つて一心不亂に眺めて居りまするとと、折しも一陣の砂煙を蹴立てゝ、太守の方角へ向つて走せ來る一頭の大猪がある、支へんとする若侍を牙に掛ける勢ひなか〳〵當るべくもなき有樣に。○『ソレ猪が出ました、ヤレ各々平素の武勇を現はすは此時でござる』と我先にと手鎗を提げ、仕留めんものと必死に働いて居りますが、何しろ餘程年數を經た猪と見えまして、突けども刺せども力チン〳〵といふ音響のみいたして肉へ通りませぬから、猪においては少しも怯む氣色なく、彼方へ蹴飛ばし此方へ突掛けると云ふ瞬くうちに十四五人の若侍は、淺傷深傷を負ふて倒れました、この體を眺められました、太守においては床几をお離れに相成りまして、太『ヤア誰ぞある、彼の大猪を仕留めよ』との御意が、下りましたが、何うして猪の勢ひが劇しうございますので、誰あつて我仕留んと向ふものがございませぬ、そのうちに猪は猛りに猛つて、今や太守の御座へ間近く進んで參りましたから、家來の者においては、最早豫猶すべき場合でないと、聊か武術の心得ある者は ○『おのれ不埒なる獣奴』と

前後左右から斬込んで參りましたが、何うして前申上げましたる通りの古猪で、少しも怯む氣色はございませぬ、ます〳〵怒つて牙を鳴らし、此處でも五六人の侍を倒しました、サア斯うなると太公は御立腹に相成りまして、今や御自身猪に向はれやうと致しますから ○『御前、這は何事を遊ばされまするや、萬一御身體に過失があつては、それこそ一大事でございます、恐れ入る儀にはございまするが、暫時御座を變られて、然るべく存じまする』太『ヤア卑怯なる一言其處退け』とお佩刀に手を掛けさせられ、眼血逆り髪の毛をブル〳〵とお震はしに相成つて居ります、臣等の者においては、今更如何とも致方なく、非常に心痛をいたして居ります體を、遙か此方に在つて眺めて居りましたは斑鳩平造でございます、そこで平造においては、此危急の體を見、打棄て置かれずと一散に駈着まして 平『御免』といふが早いか、彼の大猪の荒れ狂ふ背面へ指して飛乘ました、猪はおのれ小癪なりと計りに、牙を鳴らして平造を乘せたる儘で、前面へ駈出しましたが、一統の侍、只アレヨ〳〵といふ計り、太守におかせられても眼を放たず其狀況を御覽になつて居りますと、平造は猪の毛を確乎と掴んだなり、凡そ十間許も曳かれて參りましたから、最う好き時分と思ひましたから、小刀片手に拔より早く、猪の咽喉望んで、ブツーリと突き通しましたから、猪は死物狂ひと相成り、ます〳〵暴れて居りましたが、急所の痛手に勢ひ衰ろへ、オ、と叫んだなりその場に横に打倒

れました、平造は飜然と飛下り、またもや一刀突き刺しましたので、猪は四足を震はし難なく絶命に及びました、平造その場へハツと平伏に及んで居ります、太守はこれを御覽に相成り 太『ヤア見事であるぞ』と感心いたし太『ア、適れの武士である……ヤア〳〵誰ぞある、彼の姓名を尋ねて參れ』○『ハツ』と應へて近習の侍が、バタ〳〵と駈着けまして ○『エ、貴方は何地の何人でござる、太守の御命令により拙者罷出ました儀でござる、早々お名乘り下し置かれたい』平『ハ、ツ、這は恐れ入りまする、名乘るべき者でもござりませぬが、御太守の御命令とあれば申上げざるも却て無禮、拙者は斑鳩平造と申す百姓でござります』○『何と……然らば貴公は百姓でござるか』平『如何にも農民でござります』○『ウーム……暫時控へて居られい』とそのまゝ後へ引返しまして ○『エ、我君へ申上げます、彼は斑鳩平造と申す農民でございます』太『ナニ農民と申すか』○『御意にござります』太『ム、農民にしては適れなる技倆、武士にも優る器量人、苦しうない此處へ連れて參れ』○『ハ、ツ』とまたもや平造の處へ出て來まして ○『平造殿とやら、君のお召でござる、拙者と同道いたされい』平『有難き仕合に存じます、併し農民の我』○『イヤその儀は苦しうないといふ君の仰せ、御遠慮に及び申さぬ』平『左樣でござれば、お供をいたすでございませう』と近習に伴はれて太守の御前へ參り、大地に頭を着け平伏に及んで居りまする 太『オ、平造とやら面を擡げい』平『ハ、ツ』太

『其方は農民と申すが、汝の容貌又は擧動を見るに、以前からの農民とは思はれぬが、何か事情があるのであらう、何うぢや包まず申して見よ』平『恐れいりまする、實は私は加藤十勇士の一人、斑鳩平兵衛の一子平造と申す者で、加藤家斷絶の後は父平兵衛二君に見ゆる心底なく、奥州槻木といふ處において、百姓と身を落し居りまする儀にございます』太『ウーム、イヤ流石は勇士の子ほどあつて、なか〳〵立派な者ぢや、只今の働き余は感ずる次第、其方なかりせば、予は如何なる恥辱を受くるやも計り難い、汝ありてこそよく危難を遁れたのである、どうぢや予に奉公いたす所存はないか』といはれて平造は喜び勇み 平『ハヽッ勿體なき君の仰せ、不肖なる私にさるお言葉を下し置かれまするは、甚だ恐れ多く存じまする』太『イヤ〳〵左樣でない、何うぢや奉公をいたすか』平『ハヽッ私ごとき者にても、お抱え下し置かれますれば、身命を抛ち御奉公をいたすでござりませう』太『ム、過分に思ふぞ、然らば五百石を遣はすから予に對し、指南をいたして呉れるやう』平『ハッ有難き仕合に存じまする』と此處で平造は一足飛びに、五百石の指南番と相成りました、早速御歸城といふので、平造もその儘御供を仰せつけられ高田城へ御歸城の上新に屋敷を賜はり立派な家を建てまして、太守及び家中の若侍へ劍道の指南をいたして居りましたが、一度故郷槻木へ立歸り父平兵衛に面會いたし、一伍一什の物語をせんものをと、太守に暫時のお暇を願ひ、衣服大小立派

に致しまして、槻木を指して歸つて參りまする途中、山形の城下へ一泊いたしたのでございます、こゝで祐天萬次郎といふ親分が、斑鳩平次へ内通いたしたといふを聞き合はして見ると、前回申上げました通りの始末でございますから平『然らばその祐天萬次郎とやらを助け得させて、弟平次に面會をしやう』と早速仕置場へ駈着たのでございます、平造が息を切つて駈け付けて見ますると、今しも祐天萬次郎の首を討落さうとする處でございますので、矢庭に柵を破つて飛び込み來つたのでございます、小役人が振り下さうとする腕を支へて平『ヤア暫時お待ち下さい……、暫らくお止まりを願ひます』といつたものでございますから小役人は吃驚いたし ○『ヤア、何者なれば亂暴にも柵を壞して亂入いたし、仕置いたすを制止るのだ、無禮者奴』といふより早く、平造を目蒐けて斬込んで來るやつを、持つたる鐵扇をもつてガッチと受留め、手許へ近寄るなり役人の腕首逆に捉り、體を捻つて岩石落し、向方を指して投附けました、この有樣に役人一同は呆氣に奪られて、眼をパチ〳〵させながら只だ茫然と眺めて居ります、見物人の儕輩は宛も心地快げに、一同がワアッと揚たる鬨の聲手を拍く者もあれば手拭を振る奴もございまして、人情は妙なものでしきりにワイ〳〵いつて祐天の方へ同情を寄せて居る有樣、中にはこれを知らさうと宅へ走り出す者もございますが、何うもなか〳〵の騒動と相成りましたが、流石は檢使をする役人だけございまして ○『ヤア

貴殿は何人でござつて、何故あつての亂暴をなさるのでござる』平『拙者は好んで亂暴を致す者ではござらぬ、斯くいたすも畢竟當國を思へばこそ、拙者の老婆心から、この仕置をお止め申したのでござる、然るに拙者に對して斬込んで參られたから已むを得ず防禦いたしたまでのこと……、拙者は斑鳩平次正盛の兄、平造と申す者でござる』と大音聲に呼はりました、此方は平次の兄と聞いて『さては同腹の味方であるか』と一層立腹いたし ○『何といはるゝ當國を思ふての制止とは全體何ういふ譯である、詰らぬ答辯をいたさるゝな』平『これはしたり、拙者は決して無益のことはいたさぬ、承はれば祐天萬次郎なる者が、平次正盛に內通をいたしたといふ罪によつて、お仕置になるといふことでござるが、全體內通をいたしたといふのは、公事でござるか但しは私事でござるか、私事をもつて一國の掟に行ふことはござるまい、公事とあれば如何なることを內通致しましたか、殊に人間一人を仕置に行ふには、必らず江戸御老中の裏印といふ物がなければ、むざ〳〵仕置に上ることは出來ない規則、その裏印がござるか サアござるとあれば、平造一見致したいものだ』と詰寄りましたから此方の檢視は、理に詰つてグウの音も出ませぬ、最う無茶になりまして ○『コワ要らざる助言聞く耳持たぬ、裏印があらうとあるまいが、他國の貴殿が御關係なさるに及ばぬこと……ヤアヤア傍輩、彼の平造といへる奴を討取つてしまへ』と威丈高になつて睨め附けました、平造

は莞爾と笑ひ 平『拙者は老婆心からお止め申したといふのである、暴をもつてせば暴をもつて易ゆるの道理、サア我と思はん者は出で來つて勝負いたせ』とこれ又四方を睨んだその有樣、漢の趙雲が一騎、魏の何萬といふ軍勢をしりぞけたも斯くやと思ふ威風でございます、なれども先方は多勢を賴みに、前後左右から斬込み擊込み、平造一人を生擒にしやうと群がり集まる多勢の侍、平造は最うこれまでなり、イデ死人の山を築いて呉れやうと、腰なる一刀拔より早く前から來るは拜み討、後から來るは體を轉じて掬ひ斬り、左りから來る奴は腰斬り、右から來る奴をば車斬り、千變萬化と働いて居りますが、何しろ多勢でございますから、立代り入代り四方より斬込んで來る有樣に、如何なる平造も身體勞れ最早危く相見えました、さて此處に彼の平次正盛、早川團平の兩人でございます、月山兼五郎は巧く仙臺へ行つて呉れたか知ら、今日まで歸らぬところを見れば、『故障なく仙臺へ行つたに相違ない、さすれば今に仙臺から何とか 照會して來るであらうと、只だそれ而已を一日千秋に待つて居りましたが、今日しも兩人が一室の中にて平次『早川』團平『ハイ』平次『何うも遲いではないか 團『如何にも遲うございますな、併し斯ういふ時でございますから、兼五郎も千辛萬苦をいたしたので、時日が遲れるのでございませう』と頻りに話をしてゐる。

（第貳拾五席）伊達小冠者井伊直人山形表乗込の事、幷に主膳切腹七郎左衞門等再び逐電の事

平『ム、夫れもさうだ、併し祐天萬次郎の方は何うしたものであらう』團『サアこの事でございます、私も心に掛つては居りますが、何しろ祐天を助け出さうと致しまするには、却つて目的の罪人を取逃がすやうなことになりはせまいかと、それが心痛でございまするので』平『ム、如何にもさうぢや、小を棄て大を取るのが至當なれども、氣の毒なは祐天の身の上ぢやのう』團『左樣でございます、何とか好い工夫がないものでございませうか』と兩人が頻りに心配いたして居ります、此方は祐天の仕置に相成るといふ場所へ、平次の兄平造が飛び込み來りて、必死の働きをして居るといふことを、松田主膳から萬一他の正義の侍の耳へ這入ると、如何なる妨害をいたすかも知れないといふので、何うも念の入つた好才の長けた奴でございますから、チャント張番をいたさせ、家中の者の耳に入らぬやう、巡囘をさせて居りますので平次、團平の兩人は一向存じませぬ、最う兩人が思案に倦んで平『何うぢや餘り氣が疲れたから、密つと散歩でもいたして來やうか』團『宜しうございませう、私は元來性急の方で、斯うして邸内で肅然として居ることが大嫌ひでございますので、何だかある智識もな

くなつたやうに思ひます』平『アハ、、イヤ道理である、それでは散歩に出掛けやう、また新らしい空氣を吸ふたら、好い分別が出るかも知れぬ』と此處で兩人が身裝を變へまして、一刀腰に打帶みながら密つと妹尾の屋敷を出まして、漸次と歩つて來ましたは裏町通でございます、すると二人の町人が聲高に ○『なアオイ長さん、』長『ム、』○『眞個に大變ぢやないか、』

長『爾うヨ、何でも平次とかいふ人の兄ぢやそうぢや、多勢の役人と斬結んで居ると云ふことだ、早く行つて見やう』○『なか〳〵技倆が達者だといつてるよ』長『そりやアお前一人が飛込むくらいだもの、だが祐天の親分は何うしたらう、最う首を斬られたところかい』○『なアにそいつは神さまのお助けだヨ、いまに斬らうとする處へ、その侍が飛込んだといふことだ』

長『そうか、そいつア有難い』と頻りに話をしながら、ドン〳〵駈出して居りますから、これを聞いた平次團平の兩人は、互に顔を見合はして眼で以て點着き、これまた宙を飛んで仕置場へ駈着けました、するとワア〳〵といふ人聲、チャリンチャリンといふ劍戟の音響に、平次、團平は吃驚いたし下緒を脱つて早速の欅、手拭にて後鉢巻をいたし、衣服の裾を高く褰け、太刀スラリ拔くより早く、オッと叫んで面も振らず多勢の中へ飛込みました、平造一人でさへも持てあぐんで居る役人輩、二人の勇士が不意に飛込みたるに膽を潰し ○『ヤア助勢の者が參りましたぞ』といふなり平次、團平へ向つて斬込んで來るやつを、兩人が右へ當

り左へ倒し、縱横無盡に働きますから平造は勇氣を回復し 平造『ヤア何誰でござる、御助勢を下し置かるゝは・・・・』と役人對手に大音に呼はりました、これを聞いたる平次正盛は平次『お兄上有難う存じまする、斯くいふ拙者は平次正盛でございます』平造『オ、平次か、容赦なく打斬つてしまへ』平次『なアに木葉に齊しき痩侍、なに程のこともござらぬ、刀の背にて打懲らせば足ります、御安心下されたい』といふなり刀の背をもつてビユー〳〵と打懲して居りますから、數多の役人も避易いたし ○『ナント強い奴ではござらぬか』△『ソレッ御覽なさい先日だつて此方が負けるは必然の理でござらうがナ、それに貴公は何と仰せられた、拙者が向へば曩中の鼠を取るより容易いなんて』○『ヤア何うして、これには敵ひませぬ』と二人逃げ三人走り、遂には何處へか散つてしまひました、三人はホッと一息吐きまして平次『お珍らしうございます』平造『ヤア平次か、其方も無事で祝着々々』平次『貴兄は御壯健でこの上もない悅びでございます、併し何うして斯樣な處へ』平造『ム、不審も道理、實は斯樣々々で、拙者は五百石をもつて抱えられたから、安心をいたして呉れ』平次『それはお芽出度う存じます』平造『何うぢや其方はまだ仕官をいたさぬか』平次『私もお悅び下されませ、圖らずも伊達陸奥守どの、お見出しに預かり、當時は聊かながら祿を頂戴いたして居ります』平造『ウームして祿高は』平次『ホンノ聊かで、八百五十石をもつて抱えられました』平造『エーッ八百五十石』何

だか妙な顏をいたして體裁惡げにいたして居ります、平次はニッコリと笑ひながら平次『併し何うして斯ういふ所へお來でになり、且は祐天萬次郎の仕置をお助け下さいました』平造『されば、今回太守より暇を受け、父平兵衛殿へ面會しやうと、當城下へ一泊ゐたしたるに、斯樣々々の評判、さては弟平次は當所へ參つて居るか、それとも祐天といふ者が、何の内通を其方へいたして仕置に上るかは存せぬが、其方のために仕置になるといへば、打ち棄てゝも置けないと、先刻この場へ乘込んで見ると、いまや首を刎ねやうとする最も危き場合早速飛込んで談判をいたしたが、役人共が無體にも拙者へ斬込んで參り、已むを得ず對手にいたして居つた處である』平次『イヤ有難う存じまするお兄上のお越がなければ祐天萬次郎も既に命を損す處でござつた』とこれから祐天萬次郎の繩目をとき、目穩を脫りましたので、萬次郎は嬉し涙に咽びましたは、道理でございます、萬次『ヤア旦那さま有難う存じます、私は最う現世にないものかと、覺悟をいたして居りましたが、ワア〳〵といふ人聲に眼は見えず、心の中で何事が起つたかと、不審に思つて居りました、イヤ何うも何共お禮の申樣もございませぬ』平次『イヤ其方も拙者ゆえに、嘸かし苦勞をいたしたであらう、何か兎して呉れヨ』萬次『ど、ど、何う致しまして斯樣なお詫には及びませぬ』といつて居る處へ女房お勝一子萬吉の手を曳いてこの場へ駈け着け、左右から萬次郎に取縋りました、餘りの嬉しさに

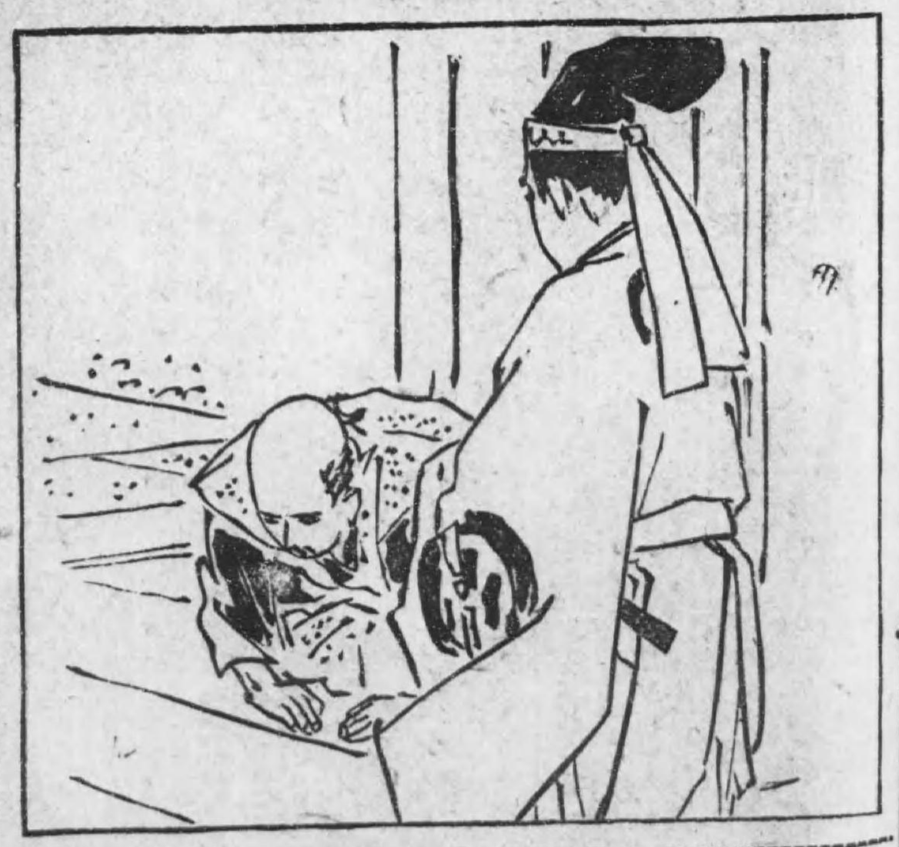
物をいふことも出來ませぬ、平次等三人を拜んでは、萬次郎の顏を眺めてホロ〳〵と涙を溢して居りまず、この有樣に思はず三人も貰ひ涙を催ふし、見物人の連中も徐ろ同感を表しまして、只管役人の無情を怒り、平造平次團平等の義俠を賞へて居りまする平次『其方は萬次郎の妻であるか』勝『左樣でございます、此度は段々の御心配有難う存じまする』平次『ム、此度は大層氣の毒であつた、承まはれば斯樣々々のことで、全く萬次郎の改心も汝の力である。お勝とやら平次は斯の如く禮を申すぞ』と兩手を大地へ突かへました、お勝は勝『アレモシ何事をなさいます、正しい道を踏みまするに、何の貴方さまからお禮を受ける覺えはございませぬ』平次『イヤ爾うでない、汝がなかつたら拙者共は、不意擊をやられたであつたぞや、マア〳〵兎に角結構であつた』勝『何よりも嬉しう存じまする』平造『併し平次、斯うしたこの場で愚圖々々して居ると、またもや彼等が押寄するも圖りがたい、左ある時は敢て恐れるにはあらねども、却つて面倒であるから、兎に角何處かへ引揚げやうではないか』平次『如何にも夫れが宜しうございます』といふので今や妹尾の宅へ、引き揚げやうといたして居る處へ遙か彼方よりワワッ〳〵といふ鬨の聲が致しますから、團平が團『先生何んだかワアワッといふ人聲が致しますが、またもや彼の蛆虫共が押寄せたのではございますまいか』平次『ム、さうかも知れぬ……ヤア萬次郎、其方は早く女房子供を連れて仙臺へ赴くが宜い、此方に金子

が十兩ある、これは汝に遣はすによつて、定めし弱つても居らうが、此處に居つてはまたもや何う云ふことに相成るかも計られぬから……』萬次『有難う存じまする、夫れではお言葉に甘へますやうでばございまするがいこのお金子を頂戴いたしまして、兎に角仙臺へ參ることに致しませう、何れ後日お目に掛りまする』と父子三人は非常に喜びまして、祐天萬次郎はお勝に助けられて、萬吉の手を曳きながら、奥州仙臺を指して赴きました、三人はこれで一先づ安心だと思ひまして、サア來い今度は死人の山を築いても、太田等三人を捕縛いたさねばならぬと、覺悟をいたして相待つて居りまする中に、漸次と人聲が近く相成りましたから平次『お兄上決して御油斷なされまするな』平造『ム、承知いたした』と勇氣を皷舞して今や來るかと相待つて居ります、そのうちに距離間近く相成りまするとと、前には馬乘の勇士十二名その後よりは五十有餘人の若侍が、手に〳〵鎗を閃かし曳々聲で駈着け來ましたから、平次はハテナ……と思ひ、屹度向方を見渡しまするとと、何ぞ圖らん伊達小冠者宗任、伊井直人の兩人殊にその後に引續いて來るは、秋山良助城戸武助の兩人でございますから平次『ヤア、其處にお居であるは宗任殿ではござりませぬか……直人殿でござりませう』といふ聲に兩人は、馬から降りまして宗『オ、平次殿か、貴公の御通知により、太守の御名代として拙者等兩人駈着けた次第でござる、してその後の有樣は如何でござる』平次『これは〳〵遠路御足勞

の段恐縮に存じます、實は只今斯樣々々の儀で、此人なるは拙者の兄平造と申す者でござるが、折好くもこの場を通行いたし、祐天萬次郎を助けました次第でございます』と一伍一什の物語に及びまして 宗『さらばこれより松田主膳の屋敷へ乘込み、一談判いたすであらう、事に依れば當國を對手にいたしても、右三人の者を召連れ歸らねば、太守へ對して何の申譯が出來やう』と此處で一同の者は松田主膳の屋敷へ乘込み、玄關へ突立つた城戸武助 武『賴まう、お賴み申す』と案内を乞ひました、取次の若黨か、何にも知らず其處へ出まして。○『ドーレ何誰でございます』と偶爾と眺めると、這は如何に五十有餘名の侍が、威儀嚴然と押詰めて居りますから、最うブル〳〵震へ出し、式臺へ低頭平身に及んで居ります 武『拙者共は仙臺家のものでござる、此處に居られる伊達小冠者宗任どの、及び伊井直人どの、御兩名、太守の御名代とあつて、御主人へ聊か御談し申すべき儀がござるにより、宜しくお取次を下されい』と聞いた若黨は ○『ハッ承知 仕りました』といひ棄て、周章てながら主人主膳の居室へ出て來まして、右の次第を申しました、これを聞くなり松田主膳、太田七郎左衛門、大河内團藏、廣田軍平の四人は、色も青くなりまして、互ひに顏を見合はしながら 主『何うも各々方大變な事になりました、丹くまで注意をいたして居つたに、何ういふ處から仙臺へ知れたものでござらう』三名『如何にも不思議でござる、併しながら會はぬといふ譯

にも參りますまいから、何うか其處の處は宜しくお願ひ申します、もう五十有餘人も參つて居るとすれば、何れ屋敷の周圍も注意いたして居りませうから、今更逃げ走るといふことも出來ますまい……

主『サア何れ先方が來るくらゐでござるから、到底屋敷を出るといふ譯には參りますまい、マア〳〵運を天に任さるゝが宜い』とこれから松田主膳は衣服を改め裃を着用に及び、玄關へ出て參り頭を低げ兩手を突かへた 主『ハッ伊達陸奥守さま御名代、御遠路御苦勞に存じまする、如何なる御用かは存じませぬが、其處は端近イザ先づ此處へ……』と客室へ案内を致しましたから、伊達小冠者宗任



伊井直人の兩人は兩人『出迎ひ御苦勞に存じます』といふなり斑鳩平次同じく平造、早川團平、城戸武助、秋山良助の五名を從へ、其餘の者は屋敷の周圍を見廻いたさせ、徐々と客間へ通りました、主『エ、お使者の趣き仰せ聞け下されまする樣……』宗『餘の儀でもござらぬが、今回主君陸奥守殿御本陣へ放火をいたし、或は殺人罪を犯したる太田七郎左衞門、大河内團藏、廣田軍平の三人、國元を脱走に及び貴殿お屋敷に隱れ居るよし、右召捕役として斑鳩平次、早川團平の兩人を差向けたるに、言葉を左右に託して御渡しなさゝる而已ならず夜中兩人を不意擊にせらるゝなぞ、殊に右の儀を内通いたしたといふ嫌疑をもつて祐天萬次郎なる者を相當の手續きを盡くさず、斬首の仕置にせらるゝなぞ、もつての外のことではござらぬか、然れども今日溫順に右三名の者をお手渡しに御成り、祐天萬次郎を放免せられなば、敢て事を好む儀でもござらぬから、拙者等とても仙臺へ溫順に引揚げ仕つるが、萬一尙ほ左や右と仰せあれば、當國の太守へお目通をいたし、更に御話しも仕つり、事によれば弓矢を以て一戰をも仕つるべき覺悟、御返答如何でござる』といはれたときには、松田主膳も吃驚いたして、暫時の間は返答もいたしませんだが、軈てのことに主『ハ、ッ仰せの趣き謹んで了知致しました、屹度右の三名はお手渡しを仕まつりまする間、何卒これまでの失禮は平にお宥し下されい、併しながら拙者もこの過怠がござりまするから今日只今より隱居願

を差出し、伴庄太郎をもつて家督相續を願ふことに致しまするにより、御歸國の上は御太守へ宜しく、お詫を下さいませ』と流石は家老職を勤むる人だけございまして、惡を知つては後悔の念も早く、心注き右のやうに申しました宗『殊勝なるそのお言葉、宗任誓つて太守へ宜しなに申上げまする間、御安心をいたされい』主『有難う存じまする、然らば右三名の者をお手渡し仕つるでござらう』と主膳においては奥の室へ來て見まするとこは如何に、太田等三人は何處を何うして逃げ出しましたか、一向姿が見えませぬから、主膳は齒切をいたし狂氣のごとくに相成り、隅々隈々に至るまで吟味を致しましたが、到頭姿が相見えませぬので此處に覺悟をいたし哀れ割腹に及びました、此方は宗任、直人平次の連中が待てども〳〵主膳が出て來ませぬので、さては何うしたのであらうと評定をいたしてゐる處へ、主膳の伴庄太郎が涙ながらに父主膳の切腹、三名の者が逃走致した事柄を物語に及びましたので、初めて皆々も吃驚いたして、アーア殘念千萬、然るにしても、何うして逃げ出したものであらう、一同においても四方へ手分をばいたし捜索に及びましたが、一向端緒がございませぬ、致方もなく宗任、直人、平次、平造は同勢を率連れ、先づ仙臺へ立歸り太守へこのことを委細復命に及びまして、陸奥守殿も最と無念に思はれ即時平次に捕縛の役を申渡され、假令何年要るとも右三名の者を召捕つて參れよ、といふお言葉、お手當として金子五百兩を賜はり

ました、そこで斑鳩平次はお受に及びまして我家に歸つて見ると、這は如何に我家にも變事が起つて居ります、と申しまするは大切なる萩の戸が、何處へ參つたか行衛が知れぬといふ大騒動が湧き返つて居りまする、この萩の戸は一日も早く亡父の仇を討取りたいといふ孝心から、毎日程遠からぬ仙臺の八幡宮に日參をいたして居りましたが、ツイ昨日のことで萩の戸は平生のごとく、八幡宮に參詣するといつて出た限り歸つて來ないといふことを、野口金太隼方より平次が聞きました、殊に萩の戸の弟八之丞は子供のことゆゑ、附いて居りますから平次は大に驚きまして 平『ウーム何うも大變なことをいたした、婦人の身では無理ならぬことなれど、この平次が一旦引き受けたからには、假令遲く相成るとも、屹度仇討をいたすものを……イヤ最う幾らいつたところで六日の菖蒲、致方もないことである、併し豈夫生命には別條もあるまい、幸ひ今回斯う〳〵斯樣の始末で、再度の召捕役を仰せ附けられたにより、太田等三人捜索の序で萩の戸どのゝ行方も捜し出さう』と此處で平造金太、民藏等と共に種々の物語に夜を徹し、翌日平造は槻木へ歸つて參り、父平兵衛に對面を致しまして、盡ぬ名殘も仕官の身は是非なくして、高田へ指して歸りましたが、これは歸國後間もなく江戸詰と相成りました、さて此方は平次正盛におきましては不在中は、野口金太隼方に頼み置き八之丞を民藏に託して、相變らず早川團平を連れまして何處を目的と定めなく、太田七郎左衛

門等、三名の在所且は萩の戸の行方を捜さんものをと、旅の準備も十二分にいたし、仙臺を後に段々出て參りましたのが、岩代の國若松の城下でございます、今しも城下の入口にならうといふ二町許り手前に一軒の茶店がございます、この茶店へ這入つて參りました平次、團平、勿論太田等三名に知られぬやうにと、態と黒木綿三ツ紋の汚れた衣服に小倉の袴、一寸見ますると詰らぬ武者修行の風體でございます茶店の親父は澁茶を酌んで其處へ持つて來まして ○『お客さまお出でなされませ澁茶ではございまするが』と出す、その澁茶を受取つた平次正盛平次『オ、亭

主好い天氣だのう』○『左樣でございます、幾日續きましても私共は結構でございます』平『拙者等とても雨天では道中をいたすに閉口ちやて……』○『成程御道理でございます、併し旦那一寸斯うお見掛け申しますると、武者修行にお廻りになるやうではございまするが、違ひますか』平『汝の眼にも爾う見えるか』○『ハイ』平『その通り武者修行に廻つて居る者ぢや』○『成程良いお心掛でございます、お身體といひ、年頃から今が分別盛でございますナ、確乎と御勉強なされませ、貴方は何うやら一人前になられさうでございますよ』何うも茶店の親爺の口上としては、大變無禮な言葉でございますから、性質短慮の早川團平は、これを聞くより憤然といたし、飛蒐らうとする樣子に平次正盛は眼で制して平次『ウーム左樣か、イヤ有難い何うぢやこのお方は……』○『左樣で御座いますな、一寸と難かしうございますなア、何うもこのお方は些つと高慢心があるやうで、これが一生の瑕瑾でございます、何でも物といふものは最う乃公はといふ、自慢が出まするとこれでお仕舞でございます、世の中には何ういふ處に、何樣な豪い人があるか知れませぬから、高慢心といふやつは宜くございませぬ』と聞いた早川團平は 團『ナニッ禿頭親爺奴……』と睨み着けて居ります 平『コレ早川そう怒るものではない……亭主なか〳〵汝は巧いものだ』○『ヘエこれでも少々は易を習ひましたので』平『ウーム何うぢやらう拙者共は、少々尋ねる者もあるのぢやが何方を捜して宜からう、一

つ占て呉れないか』○『お待ちなさいませ』と親爺は眼を瞑つて、何かグズ〳〵いつて居りましたが、軈て兩眼を開きまして ○『旦那こりやア何でございますナ、人をお捜しなさいますのでございませう』平『ム、夫れに違ひない』○『是りやア遠くではございませぬ、先づ五十里までの處に居ります』平『ハ、ア左樣か』○『それでこれから西北をお捜しなさいませ』平『ウーム、ヤア有難い、夫れではホンの志此處に置いてある』と金子二分紙に捻つて腰掛の上へ置きまして平次、團平の兩人は茶店を出ましたが 團『先生、彼奴口から出放題のことをいひますな』平『爾うぢや必然と行くまいが、差當り拙者の考へで斯うといふ方角も定ちないから先づ無益としてこれから越後路を捜して見やう』團『夫れも爾うでございます、中るも八封中らぬも八封、八段嘘九段とか申しますから』平『然らば參らう』とその日は若松の城下を捜しましたが、これといふ手掛もございませぬから、またもや段々泊りを重ね、越後の新發田といふところまで參りました、この新發田で旅人宿を營業にいたして居る、尾張屋吉兵衛といふ者がございます、この吉兵衛は町人ながらも非常に劍術狂人でございます、勿論少々は使へる技倆でございますから、世の中に乃公ぐらゐ劍術の出來る者はないと思つて居りますから、侍と見れば好んで旅宿に泊めます、最うこれが評判となりまして、尾張屋といふ者はございませぬ、劍術屋々々と人がいつて居ります、そいつを吉兵衛は大層喜んで居るといふ、